

個性使ってヒーローの
ラブドール作ってみた

ロンゴミ星人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生まれ持つたチート個性はこのためにあつた。

即ち——エログッズで金を稼ぐために。

しかし一人の少女を店員として迎え入れてからというもの、彼らはいつの間にか社会
を揺るがす大きな騒動に巻き込まれていく羽目になるのだった。

目 次

序章 「理想を叶える店」	84	第 7 話 U・S・J 襲撃 前編
第1話 アダルトショップ 「理想郷」	95	第 8 話 U・S・J 襲撃 中編
1		第 9 話 U・S・J 襲撃 後編
第2話 新店員と新事業	23	第10話 報告会
第3話 招かれざる客	13	幕間 レアアイテムの行方
第4話 『ヒーローミ●コのガチエロ	108	二章 信念の在り様
三番勝負!』		第11話 一般客の三人組
第5話 情報収集 in 田等院	35	第12話 唐突過ぎる接触者
幕間 悪の会話	45	第13話 一欠けらの覚醒
幕間 正義の裏側	56	161 149 138
第一章 狂気の坩堝	65	129 119
第6話 狂える少女	74	

				174
258	第15話 個性を生かした健全なお仕事です			
	三章 新たな道筋			
	196			185
	第16話 イこうぜ☆オナホ販売会			
	218			
	第17話 急転直下			
	247			
	第18話 作戦名「ヒーロー殺し」	207		
	233			

幕間 热狂明けて	断章 悪意満ちる塔
A—0 プロローグ	
A—1 作間の計画	
A—2 タワーの頂きにて	
A—3 塔を登る少年少女	

314 306 298 289 281

番外 とある掲示板の書き込み

序章 「理想を叶える店」

第1話 アダルトショツプ 「理想郷」

都心のどこかにある路地裏にて。

日が落ちかけて薄暗い通路を、二人の人間がキヨロキヨロとあたりを見回しながら歩いていた。

一人は牛のような角が生えた大柄な男で、もう一人は眼鏡をかけたひょろりとした風貌の少年だ。

牛男の先導で歩き続けていた彼らは、しばらくすると一つの店に行きついた。

彼らが辿り着いたその店の看板には、『理想郷』と書かれていた。

「ここ？ なんかあんまり……」

「見た目は気になくていいんだよ。とにかく中に入ろうぜ。ここらはそれなりに物騒だからな」

男に言われて見るからに怪しげな雰囲気を発するその店に入った少年は自らの目を疑つた。

店内に立ち並ぶガラス張りの陳列棚の中には、ヒーローに興味がある人間なら誰でも

知るであろう有名な女性ヒーローたちの姿があつたのだ。

もちろん作り物のはずではあるのだが、ヒーローコスチュームを着たその姿はとても本物の人間以外には見えない。

そんなありえないほどに完成度の高い人形の中に自分のお気に入りがいるのを見つけた少年は、ゴクリと唾を飲んだ。

「ミ、ミッドナイト……」

「いらっしゃいエロガキ」

「うわっ!?」

背後から声をかけられた少年が飛び上がるようにして振り返ると、そこには嘲るような笑みを浮かべる一人の男がいた。

だらしなくスーツを着崩したその男は、少年に一枚の紙を押し付けるとすぐに背を向け、近くにあつた椅子に腰かける。

「えっと、その……」

「おつと質問は待て。まず紙を見ろ。お前の知りたいことはそこに書いてある」

「え?」

「そしてそつちの……牛山だつたか。またの来店ありがとうございます。今日は紹介か?」

「あ、ああ! こいつの家は金持ちだから、いい客になるはずですよ!」

「へえ……」

二人の大人が話をする中、少年は手元の紙に視線を落とす。

そこにあつたのは『注意書き』と『料金表』だつた。

注意書きの部分には、紹介目的以外で他人に店の事を知らせない事や、買った後の保存方法などが書かれていた。

そうして幾つもの注意書きに目を通した少年が料金表に目を移すと、そこには目を疑うような金額が書かれていた。

「て、店長さん！ これ、一体百万つて！」

「あ？ 間違えんなよ最低百万だつて書いてあんだけ？」

「いやそりゃなくつて……そんなんに高いの？」

料金表の内容は実に大雑把なものだつた。

無名、低人気のヒーローなら百万、新人や人気好調なら三百万、誰もが知つてるレベルなら時価で交渉に応じると書いてあるのだ。

事前に高いと聞いてはいた少年ではあつたが、全ての商品がそんな値段設定であることに驚愕していた。

「当たり前だろ。どんだけリスク高いモン売つてると思つてんだ？ この値段に文句言うような客はいらねえからさつさと出でけ」

「う、うめんなさい。文句があるわけじゃないんです。買いに来たんです」

「素直に謝れるガキは好きだぜ。ま、ちゃんと買う気があるならそれでいいんだよ」

少年が鞄の中をゴソゴソ漁つて分厚い封筒を取り出したのを見て、店長は相好を崩した。

そのまま気分よく立ち上ると少年と肩を組み、上機嫌に話しかける。

「さて、それじゃあ金はあるようだし。商品を買う前に自分がどれだけ価値のあるものを買おうとしてるのか確認しといてもらおうかな」

「え？」

「奥に体験コーナーがあるんだよ。どうだ？ 見ておきたいだろ？」

「お、お願いします！」

「オーケー、いい返事だ。それじゃ奥に行こう」

金があると知るなり機嫌がよくなつた店長に連れられ、客の二人は店の奥へと進む。そして重厚な作りの扉を開いた先には、巨大なベッドとその上に横たわる何体もの裸の女性が転がつていた。

店長は無造作にその女性の腕を掴んで引っ張ると、興味深そうにしていた少年の方に突き飛ばした。

「うわっ！」

「おお。こいつあ確かにどつかのサイドキックの……」

「そ。バブルガール。店を注文制にする前に見た目可愛いから作ってみたんだけど、売
れなかつたんだよねえ……」

「知名度微妙つすからねえ。俺もなんかの雑誌で見ただけです」

「だからとりあえず体験コーナーにでも置いとこうと思つたのよ」

「なるほど……」

大人二人がそんな事を話す間、少年の方は心臓をバクバクさせながら体を硬直させて
いた。

青い肌とクセのあるショートカットの女性ヒーロー。その限りなくリアルな裸の人
形に抱き着かれただけ……しかしその人物はあらゆる意味で人間に近すぎたのだ。

感触も、重さも、匂いも、そして体温までもが人間だつた。

まるで生きている本物の女性に抱き着かれたかのようで、少年は動搖が抑えられな
かつたのだ。

「こ、これ本当に人形なんですか!? まるつきり本物の——」

「ただの人物が最低百万で売れるわけないだろ?」

「いやつ、それは、そうなんですけども!」

「わかるぜその気持ち。俺も初めて買ったときは同じ気持ちだった。とても信じられな

かつたぜ」

驚愕する少年に牛山は自分の経験を語る。

一度目の来店時、同じグループの兄貴分から店を紹介された牛山はこの店の商品を購入した。

購入したのは、かつて自分を個性の不正利用で捕まえたヒーローの人形。

ただの偽物に何をしても……そう思っていた牛山だったが、眠っているだけの人間にしか見えないその人形にあらゆる鬱憤をぶつけることで、最近は毎日すつきりとした毎日を送っているらしい。

「しかもどういうワケか知らないが、普段世間からは見えないコスチュームの下の肉体まで完全再現って話だ。以前、『透視』の個性を持つてる奴に本人と比較してもらつたら黒子の位置まで完全再現だつたつてよ」

「やり方は企業秘密だ。ま、個性のおかげとだけ言つとくよ。あと、そういう探るような真似は勝手だが口には出すな」「す、すんません」

女性ヒーローの肉体を完全再現した、消滅も腐敗もしない生きた肉人形。

それがこの『理想郷』の商品である。

本当の女性ヒーローと完全に同じ肉体のそれを好きにできるため、客は牛山のような

指定敵^ク団体^ザの下つ端から大金持ち、そしてヒーローに不満を抱く警察の人間まで多岐にわたる。

そしてそれ故にこのような商売をしているにも関わらず、逮捕を免れているのである。

「とにかく。そんな本物同然の肉人形を、客が好きに楽しめるつてのがウチの売りなんだよ。わかつたか？」

「僕の……好きに……」

「……そうだ。つつても注意書きにあつた通り、『過度な欠損を行うと腐り始める』から、もし最初から欠損した状態のが欲しい場合は要注文だ」

少年は何やら妄想を始めたのか、ぼうっとした表情で抱え込んだバブルガールの人形を弄り始めた。

それを見た店長は少し気味悪がりながらも、商品の説明を続ける。

「あと保管場所だな。そこは自分でもわかつてるだろう？　こんなもん見つかったら色々ヤバい。ちゃんと隠せ。いいな？」

「え？　は、はい！　それはもう！」

「処分したくなつたらウチに来い。引き取つてやる。変な場所に勝手に捨てるなよ」「はいっ！」

妄想から戻ってきた少年に注意事項についてきちんと言い聞かせた店長は、小声で牛山を呼び寄せた。

そして喜ぶ少年から隠れるように、小声で話し合う。

「何すか？」

「本当に大丈夫か？ 親に見つかって通報なんて事にならないだろうな？」

「大丈夫ですよ。こいつ一人暮しつすから。毎月何百万も貰つてゐるつて自慢してました」

「嘘だろお前」

「マジです」

少年の信じ難い生活環境を聞いて驚きながらも、いい客になりそุดと感じた店長はニヤリと笑みを浮かべる。

既に上客は何人もいるが、そういう客は何人いても嬉しいものだ。

「じゃ、どうする少年。一発体験してくか？ それとも本命買つて帰るか？」

「買います！ 本命買つて、ゆつくり……家で……！」

「そ、そうか。わかつた。さつき見てた『ミッドナイト』でいいんだよな？」

「はい！ お願ひします！」

ビシッと頭を下げる少年に向けると、店長は店の更に奥へと入つて

いつた。

そしてしばらくすると、人が入りそうなほどの巨大なバッグを持って戻ってきた。そのバッグを少年の前に下した店長は、少年に中身の確認を促した。

「どうだ？ 確かに『ミッドナイト』のはずだ。ちゃんと確認しろ」

「すごい……！ コスチュームもそのままだ！」

「そつちは見た目だけの偽物だけどな。代金は二百万だ」

「匂いも……想像してた通りだ！ ありがとうございます！ こちらをどうぞ！」

「お、おう、まいどあり」

ハイテンションになつた少年に少し引きながら、店長は彼が差し出した封筒を受け取つた。その重さと分厚さにほくほくしながら紙幣カウンターに封筒の中身をセットした彼は、少し待つ間にドン引き顔で少年を見る牛山に声をかけることにした。

「おい、お前は何か買わないのか。どうせもうズタボロにしちまつたんじやないか？」

「え？ いやあ、そんなもつたいないことしませんって。そんなんするのは捨てる前だけですよ」

「そりやそうだ。お前の場合は百万だが、それだつて十分大金だもんな」

「ええ。しばらくは今のヤツを楽しませてもらいますよ」

一度、ひしやげるまで人形をぶち壊した牛山だが、どうやら無駄な出費はもうしたく

ないようだ。

少し残念に思いながらも、店長はカウンターの終わつた250枚の紙幣から50枚を抜き出して少年に返却した。

「帰るときは気をつけろよ。絶対にヒーローには見つからないようにな」「もちろんです！　また来ます！」

「そりやどうも。お前さん、名前は？」

「白鷺要です！　絶対！　また！　来ますから！」

「楽しみにしとくよ」

喜び勇んで出口に向かう白鷺少年を見送り、店長はその後を追う牛山に声をかける。

振り返つた牛山に数枚の諭吉を差し出した店長は、驚く彼の手を取つてそれを握らせた。

「今日はいい紹介だった。これで美味しい飯でも食つてくれ」

「え？　いいんすか？」

「ああ。あんな感じで金払いのいい、ついでに何度も利用してくれそうな性欲塗れのガキは大歓迎だ。だが、秘密をベラベラ喋るような阿呆を連れてきたらお前ごと殺すからな」

「き、肝に銘じます……あいつにも言つときます。作間さん」

（サクマ

「それでいい。じゃあな」

完全に怯え切った様子で去つていく牛山を見送つた後、店長の作間は紙幣カウンターに入れたままだつた二百万を手に取つた。

常連候補ができて内心はウキウキだ。

鼻歌を歌いながら自室のある二階へと上がつた作間は、金庫へと金を入れるとゴミ袋を持って一階へと戻つてきた。

そして裏口を出てゴミ捨て場に向かう途中、それを見つけた。

「……なんだ？ 行き倒れか？」

制服の上にコートを着た長い赤髪の少女が道端に倒れている。

生体も死体も見飽きるほどに見てきた作間は、その女がまだ生きていることに一目で気づき、足で蹴つて仰向けにしてその顔を確認することにした。

「結構美人だな。連れて帰ろう」

即決した作間はその場でその少女を拾い上げると、ゴミをその場に投げ捨てて店に戻ることにした。

その頭からは既にどうでもいいゴミの事は消えている。

彼の頭は既に次の新しいプランの事を考え出していた。

「どういう人間かわからんがこんなところで倒れてるくらいだ。どこかの学校の生徒だ

ろうと口クな人間じやないだろう。顔もいいから雇つて店員として使おう。金もあるんだ文句は言わないはずだ』

作間はそんな思惑をブツブツ呟きながら歩いていたが、自分の拾つた女が色々な意味で騒動を引き起こす疫病神女だと知つていればこんな事はしなかつただろう。

しかし彼女の個性も含めて知つていたのなら、やはり彼女を雇おうとしたのかもしれない。

それほどに彼女の個性と作間の個性は相性が良いものだつたのだ。

こうして、後に『最悪のコンビ』と呼ばれる二人は薄汚い路地裏で運命の出会いを果たしたのである。

第2話 新店員と新事業

時は流れ、世界は変わった。

中国にて光る赤子が生まれた時を境に、人々は漫画やアニメの中に出でてくるような超常能力を持つようになつていった。

そして世界中の人々がそうした『個性』^{（ヴィラン）}を持つ事は、世界に大きな変革を齎す。自らに備わった個性で悪意を振りまく悪人に對し、コミックスながらに個性を奮つて戦う人々が登場したのだ。

それこそまさしく『ヒーロー』、人々を超常や悪意から守るヒーローたちの活躍する今の世は、正しくヒーロー社会と言うべきだろう。
「そんな輝かしい活躍をするヒーローを自分の好きにできる。これで売れなきやよっぽど商才のないアホですよ」

「違ひねえな。だが、他に色々やり方あるにも関わらずにそれに拘るつてのは十分アホだぞ」

「ははは。面白い冗談ですね、師匠」

「師匠なんて呼び方はやめろ。先に言つとくがさん付けもすんなよ」

「あー、はい。了解です。義爛」

作間がゴミ捨ての途中で少女を拾つて一週間後。

彼は自分が裏社会に足を踏み入れて以来ずっと世話になつてゐる恩人、大物ブローカーとして広く知られる義爛という男を店に招いていた。

今も二人の間には繋がりがあり、偶にこうして直接会つて話をしているのである。

「それで、報告つてのはなんだ？」新しい事業はどうとかつて話だつたな

「ああ。それなんですが。実は今度、アダルトビデオ業界に手を出そうと思いまして

「……はあ？」

真面目な顔で妙なことを言い出した作間に、義爛は自分の耳を疑つた。

そんな義爛の様子を見ながらも、作間はそのままの調子で口を開く。

「知つての通り、俺の個性『人体創造^{ライフメイカ}』は目で見た人体を自在に作り出せる個性です」

「知つてるよ。それであんなラブドール作つて売つてんだから意味不だけどなあ。だが、『作った人体に意識と個性は付随しない』だろ？ どうビデオに収めるつもりだ？」

今も作間の個性を臓器や四肢の売買に利用している義爛は、その個性についてよく知つてゐる。

ヒーローの肉体を作つてラブドールとして売り出すなんてトチ狂つた商売を始める前に、店舗の調達をしてやつたのも義爛なのだ。

しかしだからこそ、その意図がさっぱりわからない。

いくら本物と同じ肉体とはいえ、意識がない状態のそれとやるだけじゃビデオとして成り立たないのは自明の理だ。

「ええ。でも、そこを補う人材が超偶然に手に入りました」

「それでやる事がアダルトビデオか？」

「別に稼げりや何でもよかつたんですけどね。そいつがアダルトビデオを作りたいなんて言うもんで、考えた結果それもありかなと」

「そりや……変わったやつだな」

「そうでしょ。というわけで……おーい、入つてこい！」

義爛がアダルトビデオのカラクリに少々納得した様子になつたのを見て、作間は店の奥に向かって声を張り上げた。

するとすぐに「はい、今行きます」という声が聞こえ、店の奥から一人の女性が姿を現した。

その女性の姿を見た義爛は一瞬硬直して手に持つたスマホを落としけ、慌ててそれを掴みなおして口を開いた。

「オイオイ、わかつちやいたが驚かせるなよ」

「こういうドッキリの方が効果的だと思いまして。どうです？」

「どうもこうもねえだろう。なあおいそこの『リュー・キユウ』もどき」「何でしよう。義爛さん」

「声までか……なるほど、声帯も一緒だもんなあ。こりやヤベエ」

その場に姿を現したのは、リュー・キユウという名の女性ヒーローだった。

彼女は国内のヒーローの順位を様々な方法で決める『ヒーロービルボードチャートJP』というランキングにもランクインするほどの超人気ヒーローである。

当然テレビでの露出も多く、義爛もその姿だけでなく声も聞いたことがある。

いくら事情を知つてゐるとはいへ、いきなりそんなヒーローが歩いてきたら動搖しそうなものだが、一瞬でそれを立て直して煙草を吸い始めた義爛は流石と言えるだろう。「で、どういうカラクリだ？ 説明してくれんんだろ？」

「ええ。もちろん。庵、本体でこつち来てくれ」

「わっかりましたー。それじやこつちは解除しますねー」

本人とは似ても似つかぬ口調で返事をしたりリュー・キユウは、すぐにその目から光を失つて近くのソファに倒れこんだ。

そしてすぐ、作間に庵と呼ばれた存在が店の奥から姿を現した。

長く伸びた赤髪が印象的な、制服を身に着けたかなりの美少女である。

「どうもー。憑城庵でーす。つきじらいおり新しく「理想郷」の店員になつた拾われ系JKでーす」

頭のネジが二、三本抜けてるかのような調子の挨拶をかました少女を見て、作間は深くため息を吐いた。

そしてそんな挨拶を受けた義爛はといえば、今まで色々な人間ヴァイランと接してきた経験か、白けた目をしながらも普通に対応した。

「嬢ちゃんの個性で動かしてたのはわかってるぜ。なんて個性だ？」

「店長、本当に言つちゃっていいんです？」

「その人は大丈夫だ。秘密を漏らすような人じやない」

「了解でーす！ 私の個性はあ～『憑依』！ 以上！」

「以上じやねえもつと説明しろ！」

「冗談なのに！」

作間に怒鳴られた庵はぶーたれながらも説明を始めた。

個性『憑依』。

意識を失っている肉体と手を繋ぐ事で、その肉体に憑依して動かすことができる。

憑依中に元の肉体の意識が目覚めるか、自身の肉体がエネルギー不足を起こして気絶すると憑依が解除される。

彼女が作間に拾われた時は、ちょうど個性の使い過ぎで気絶したタイミングだったのだ。

「でもおかげで店長と巡り会えたんですからこりやもう運命ですよ！ 運命！」

「そういう単語はメチャ嫌いだが……まあそういう事です。こいつの『憑依』は俺の作った肉体を『意識を失った肉体』と認識し、それに憑依することができる」

「なるほど、そういう理屈か」

作間の『人体創造^(ライフメイカ)』は目で見ただけでどんな肉体でも作り出すことができるが、そこに意識と個性は付随しない。

逆を言えば、意識のない肉体を作り出す個性もある。

だからこそ庵の個性で『憑依』できたのだろう。

「もつたいねえなあ。この個性の組み合わせなら他にいくらでも使い道があるだろう」

「趣味も兼ねてないとこんな町で仕事なんてできませんよ。それに、元々はこのバカのアイデイアですから。俺が悪いんじやありません。このエロ娘が悪いんです」

「エロ娘とは言ひえてミヨーですね。まあ実際他人の体でする無責任プレイは最高に気持ちいい！」と思つてる私ですからなんとも言えませんけど

「お前そんな事してたのか……」

「今度はヒーローの肉体でプロの男優とパコれると思うと胸が高鳴ります！ 演出はヒーローなのにヴィランにやられちゃーうつて感じにしてほしいですね。どう思います？」

「知るか」

口から欲望を垂れ流す庵に辟易する作間をしばらく見ていた義爛だが、その手の中にいるスマホが振動したのを感じて立ち上がった。

どうやら別の用事のために移動する時間が来らしい。

「それじやあ俺は帰るぞ。作間、その庵とかいう嬢ちゃん上手く使えよ。あと、ビデオができたら一枚回せ。ヒーロー嫌いの連中に流す」

「わかりました。期待して待つてくださいよ」

カラランカラランと入り口の扉についた鐘を鳴らし、そうして義爛は去つていった。

「面白いおっちゃんでしたね。あのが大物ブローカーですか」

「そうだ。気安くしてもいいが礼儀は忘れるなよ。俺の恩人なんだからな」

「うえーい！」

適當だが一応返事をした庵を少し睨みながらも、作間はタブレットを取り出してソファへと腰かける。

すぐにはタブレットを操作した作間は、隣に座る庵にも見やすいようにその画面を傾ける。

そこには、仰々しい字体で描かれた『R O D』のロゴが映っていた。

「ナニコレ？」

「潰れかけてるアダルトビデオ会社だ。昔はそれなりに人気作を作つてたらしが、今は鳴かず飛ばずらしい」

「ふーん……へえ！　ヒーローのコスプレものじやん！　こんなのがあつたんだあ！」タブレットを操作してその会社の過去のラインナップを見た庵は、大はしゃぎで飛び跳ねる。

彼女は知らなかつたが、『ヒーローのコスプレAV』は現在のヒーロー社会におけるアダルトビデオの中でも安定した人気を誇つている。

現代のヒーローはヴィランとの戦いや災害からの救助だけを行うのではなく、商品のCMやテレビ番組出演などの芸能人的活躍を行つてているため、ビジュアル面を重視した女性ヒーローの活躍が増えてきたからだ。

故に作間は、アダルトビデオに出たいという庵の提案を聞いた時、すぐに合法的に金を稼ぐ方法に気づいたのである。

「俺たちが作るのは『コスプレもの』なんて低次元な商品じやない。『ヒーローそつくりさんモノ』だ」

「ああ、なるほどー！　ていうかそつくり率100%じやん！」

「そうだ。見た目が同じ、声も同じ、そしてお前が憑依すれば操り人形ではなく『生きた人間』としての反応も行う……売れないはずがない！」

個性を用いたアダルトビデオは数あるが、中でもリアな変身系個性を用いた『ヒーロー変身AV』は常に高い人気を誇る。

もちろんその個性のリアさや練度の問題で殆ど世には出ないのだが、そんな業界に全女性ヒーローのAVを用意できる状態で殴りこもうというわけである。

「既にこの会社との交渉は終わってる。社長がウチの店の客だから話は早かつた」「じゃあもうすぐやれるってこと！ やつたー！」

「一週間後に撮影予定だ。それまでは無駄に体力使わず、ついでに色々我慢しどけ。撮れ高がよくなるだろう」

「オナ禁しろってこと？ セクハラじゃない？」

「その発言の方が女子高生的にまずいだろう」

「それもそつか。じゃあ私ちよつとジュース飲んでくるね」

「楽しみ楽しみ♪♪と変な歌を歌いながら店の奥へと歩いていく庵を見送り、作間はまたため息を吐いた。

少女につられてテンションが上がってしまった自分はまだまだ義爛のようにはいかないと自嘲し、そして冷酷かつ冷徹な態度でビデオ会社の社長に電話をしようとした所で少女が戻ってきた。

「ビデオできたらヒーローの裸姿で宣伝とかしてもいい!?」

「ダメに決まつてゐるだろ！」

第3話 招かれざる客

ビデオ撮影を三日後に控え、作間はビデオ会社『R.O.D』の社長である夜見という男から送られてきた今回のビデオの企画書に目を通していた。

ヒーローのそつくりさんモノという強みを、このビデオ会社が持つ特色を生かして仕上げる、かなりハードなものになる予定である。

「裏に流してもかなり売れそうだな。義爛が喜びそうだ」

ヴィランになつてゐるような連中がただイチャイチャするような作品を好むことはない……というのは流石に偏見ではあるが、ヒーローを辱め虐げる内容の方が売れるのは事実である。

今回のビデオではヒーローランキング上位で活躍しているヒーロー、つまり多くのヴィランに周知され憎まれている存在を使う予定であるため、この内容はより大きな効果を生むだろうと作間は踏んでいた。

「しかし、随分と遅いな……何やつてるんだあいつは」

腕時計に目を向けてそう呟くと、作間はタブレットの電源を落としてその場に立ち上がる。

店員、憑城庵が給料として渡された金を持つて買い物に出かけて既に数時間が経つている。

ネットやラジオをチェックする限り女子高生ヴィランが捕まつたなんてニュースはないから心配はしていないが、何か面倒な事になつたんじやないかと作間は思つていた。

そんな時、店の扉についている鐘の鳴る音が響いた。

「いらっしゃ」

「ただいまでーす！」

「なんだお前か」

入つてきたのは大量の買い物袋を腕に下げた庵だつた。

よほど楽しんできたのか、満面の笑みを浮かべた彼女は全身から喜びのオーラを振りまいている。

「そうでーす。お前でーす。でもその反応は酷くない？」

「店員なら裏から入れ。買いたいものは買ったのか？」

「それはもう！　いやーもうこれだけお金貰えちゃうとコンビニバイトなんて二度としあくないです！」

買い物袋を見せつけるようにくるりと回る庵。

しかしその時、彼女の背後の扉が勢いよく開き、何者かが彼女を羽交い絞めにした。

「おい、金を出せ！」

そこにいたのは巨大な熊の姿をした強盗だつた。

毛深い手からは鋭い爪がのぞいていて、それを庵の首筋に突き付けている。

まさかの展開に作間は深くため息を吐く。

「…………このあたりにまだこんなバカがいたのか」

「ああ!?」

「うわあ。店長、あんまり挑発しないでくださいよ。捕まつてるのは私なんですよ？」

既に裏社会において『理想郷のヒーロー人形』はそれなりに知られたものとなつてゐる。

当然、店があるこの町の裏社会における知名度はかなりのものだ。

そんな場所に殴り込みをかけるのは色々な意味で命知らずなのか、まだヴィランとなつて間もないか、情報を得て突然的に動いたのだろうという事が伺える。

「なんでこんな路地裏の小さな店に金があると思うんだ？」

「こんなガキがこんだけ高いもん買いまくつてりやすぐわかるんだよ！　金はあるはずだ！」

「ああそういう……でもやめといたほうがいいぞ。いろんな意味で。俺もやめてほし

い

強盗が何も考えず行動していると判断し、作間は少し宥めてみる気がした。

なんとなく金に困っている雰囲気は察しているため、今なら血迷つたというだけで見逃してもいいつもりだった。

もちろん強盗を起こすほどに追い詰められた人間がそれで引くわけがない、というのも作間はわかつていたが。

「うるせえ！　さつさと金をよこせ！　さもないと……！」

「この女を殺す！　っていうつもりでしょ！　絶対そうでしょ！」

「なんだこのガキ!?　舐めてんのか！」

「……熊個性の人のは舐めた事ないですねー」

「ああ!?

強盗と庵のアホみたいなやり取りの中、自分への意識が切れたのを見て、作間は動いた。

やる事は簡単、自らの個性を発動させながら、右手を素早く振りぬくだけだ。

相手が引き際を間違えた以上、こちらが譲歩する必要はない。

拘束した庵に気を取っていた男が作間に目線を戻した時には、既に白い棒のようなものを持った作間が腕を振り切った後だった。

「一応聞くが、大丈夫か？」

「ぎやー！　買い物袋に血が！　ひどいです店長！　この熊さんの首を飛ばすなら先に言つてくださいよお！」

「問題なさそうだな。ああ、面倒なことになつた」

頭から真っ赤な血液を浴びる羽目になつた庵だが、自分が捕まつていたことなど覚えていないかのよう、せつかく買つてきたバッグや化粧品がおじやんになつた事に嘆いている。

しかし嘆きたいのは作間も同じだつた。

血液という汚れは落ちにくい。血塗れになつた店内を掃除するとなると、憂鬱な気分になるのも仕方がないことだろう。

それでもいつまでも嘆いているわけにもいかず、二人は片づけを行うことにした。

そんな中、庵は買い物袋内の無事な商品を発掘しながら、ちよつと気になることを作間に聞いてみることにした。

「ところで店長。いつの間にそんな物騒な武器みたいなもの持つてたんです？」

「事前に記憶しておいた『骨の剣』だ。それなりに知られるまでは強盗も結構多かつたから、色々準備が必要だつたんだよ」

先ほど作間の掌から出現し、熊男の首を一刀両断した後、今は壁に立てかけてある『骨

の剣』。

それは作間が事前に作り出して記憶しておいた、人体加工武器の一つだ。

特に『骨』は強度も高く、研けば凶器にもなるため重宝しているのである。

「へえ～。じゃあもつと色々あつたりします?」

「あるが……面倒だから見せはしないぞ。それよりさつさと手を動かせ。お前には次に床を拭いてもらうからな!」

「ええ～!」

「そもそも後を尾けられたのはお前の責任だ。もつと警戒するんだな」

「はーい。気を付けまーす」

本当に反省しているのかしていないのかわからないような庵の声を聴きながら、作間は男の死体を袋に詰めて店を出た。

そこに人の姿がないのを確認して死体袋を担ぐと、作間は普段は利用しない『特殊なゴミ捨て場』へと向かう。

市のゴミ収集車が回収しに来るような場所ではない、裏社会の人間が後ろ暗いものを捨てに来る場所だ。

誰にも見つからないように素早くそこに死体を捨てた作間は、急いでその場から店に戻った。

「あつ店長。お客様です」

「どうも。お邪魔しています」

作間が戻った店にいたのは、ソファでくつろぐ庵と、店の中央に立つ新しい客だった。

その客の口調は丁寧で、来ている服もスーツとまともであるが、しかし。

頭部が黒い霧状の、異様な姿をした客だった。

「ウチの商品を買うようなタイプには見えないが、本当に客か?」

「ええ。黒霧と申します。今回は仕事の依頼に参りました」

「おつとそうか。そりや、見た目で判断して悪かつたな」

「お気になさらずに」

そう言いながらも作間は警戒を解かない。

色々なヴィランに触れ合ってきた作間は、今回の相手はなかなかにヤバい相手である事を感じ取っていた。

それでも仕事を依頼する以上は客であるため、表面上はにこやかに接客を行う。

「で、ウチの商品の事を知ってるみたいだから聞くが、誰が欲しいんだ?」

「ウチの商品は素晴らしいですよ! なんだつたら私が一緒に体験コースであいたあつ

！」

「今眞面目な話してらからちよつと黙つてろ」

「はーい。ごめんなさい」

割と眞面目に庵を叱りつつ、頭を叩く作間。

黒霧にはそのやり取りを見て軽く笑い声を零し、そして依頼内容を告げた。

「オールマイトを」

「……何だつて？」

「オールマイトの人形を作つていただきたいのです。本物と全く同じの。それがこの店の商品なのでしよう？」

「おーっと、こいつは驚きだ。ホモかよ」

「いえ、私は純粹に彼の肉体に興味があるだけです」

動搖を隠すためにふざけるもマジで返され、作間は黙り込んだ。

オールマイトは現在のナンバーワンヒーロー、正義の象徴とも称されるムキムキの男性ヒーローだ。

おそらく本当の意味で『誰でも知つてゐる』レベルの有名人である。

これだけ怪しい雰囲気の人間がそんなヒーローの肉体を欲しがるなんて、絶対にマトモな目的じゃない。

作間はそのことを察しつつも、首を横に振つて応えた。

「残念だが、今は無理だ」

「……何故でしようか」

「落ち着けよ。今はつて言つたろ？ 実は俺、直接オールマイトを見たことがないんだよ」

訝しむ黒霧を信用させるため、作間は正直に理由を説明する事にした。

「ウチの商品は俺の個性で作つてる。それは知つてるんだろう？」

「ええ……素晴らしい個性ですね」

「だが、人をそのまま作るならそいつを直接見たことがなきや無理なんだ。俺が一度も直接見たことがないオールマイトは……」

「作ることはできない、と」

「その通り。だつて男のヒーロー欲しいなんて事言うのは相当珍しい客だけだし、今まで需要なかつたからな。仮に見てもとっくに忘れてるよ」

『理想郷』にやってくる客はある程度の金を持つヴィランや金持ちが大半で、そういう連中はほとんど女性ヒーローを目当てにしている。

一応男性ヒーローの人形を買いたいという客もいるが、それにしたつてイケメン系狙いの金持ちババアだけ。

そんなわけでわざわざオールマイトの姿を記憶するような機会に、作間は恵まれな

かつたのである。

「だから今は無理なんだ。だが、ちゃんと金を払ってくれるなら依頼は受ける。なんとか姿を見つけて作成してやるよ」

黒霧はヤバい相手ではあるが、それでも作間にとつては客である。

人々、男性ヒーローもそのうち目にしておく必要もあると思つていた作間は、仕事を

受けることを黒霧に告げた。

そして黒霧もまた、作間の話に納得したらしい。

「……わかりました。いいでしよう。依頼させていただきます」

「連絡先は？」

「こちらに」

そう言つて渡されたメモ書きには、いざこかの電話番号が書かれている。

作間はそれをポケットにしまい込むと、仕事にかける日数を考える。

オールマイトは神出鬼没だが、彼の情報網はそれなりに広い。見るだけならそこまで時間はかかるないだろうと思えた。

「ちょっと忙しいから二週間は貰うぞ。文句ないよな？」

「ええ。それくらいがちょうどいいでしよう。期待していますよ」

「うおっ！」

黒霧が言葉を言い終わると同時だつた。

彼の頭部の霧が一瞬で広がつたかと思うと、その姿が店内から消えたのだ。まだ近くにいるかもと警戒した作間だが、ワープのような個性を用いたと当たりをつけると、ようやく安堵の息を吐くことができた。

「あー、もう。なんでいきなりああいう客来るかな。疲れた。本当」「言われた通り私空気に徹してましたよ！ というか隠れてました！」

「知ってるよ！ さつさとソファの裏から出ろ！」

一度作間に叩かれて以降、ソファの裏でじつとしていた庵がのそのそと出てくる。その手には開封済みのお菓子の袋が握られていた。

「……」

「あつ。食べますか？ あとちょっとだけですけど」

「……いや、なんかもう疲れた。ちょっと休憩してくるから、お前も片付け終わつたら自由にしていいぞ」

「ええ～！ 私が片付け!?」

「頼んだぞ」

一気に気が抜けた作間は全ての片づけを庵に任せ、二階にあるベッドに倒れこんだ。下の階では片付けを任された庵が騒いでいるが、それもすぐに聞こえなくなる。

疲れからあつという間に意識を手放した作間は、しばしの間仮眠を取ることにした。

第4話 『ヒーローミ●コのガチエロ三番勝負！』

「あー気持ちよかつたー！」

「お疲れさん。どうだつた？」

「みんな結構乱雑に扱ってくれるからもうさいつこう！ 午後が楽しみでしようがな
いって感じ！」

「だと思った」

午前中のビデオ撮影が終了し、作間は元の体に戻った庵と共に昼休憩を取っていた。
案の定というべきか。庵の顔には疲れた様子はまるでなく、今からでも午後の撮影に入
りたいという欲望に満ちた表情をしている。

本体の方は動いていないのだから疲れていないのは当然ではあるが、割と酷い方法で
やられまくった精神的疲労というものも庵にはないらしい。

「俺も見ていたが、随分と余裕そうだな。首を絞められても平気なのか？」

「え？ そりや苦しいですけど……別に自分の体じやないし、仮に死んでも元の体に戻
るだけってわかつてますからねー」「……死んだことあるのか？」

「もちろんありますよ？ 一番印象に残つてるのは新幹線かなあ。なんというか、体がバラバラになつて吹つ飛んでいく感覚がすつごく独特でー」

「あー、やめろ。飯がまずくなる。聞きたくない」

聞いてるだけで嫌な気分になる話を平氣で始める庵にドン引きし、作間は大げさに耳を塞ぐ。ポーズを取つて顔を背ける。

作間自身、その話の内容そのものに何かを言えるような人間では決してないが、飯時に聞くような話ではない。

そこで会話を打ち切つて無事に食事を終えた二人は、休憩室を出て撮影用のスタジオへと向かつた。

「さて、午後は午前よりハードだから頑張れ……と言つても意味がないかな」

「むしろ楽しみです！ あのうさ耳を掴んでバツクとか、鍛えられた肉体を殴られながらとか、もう興奮しつぱなしです！」

「一応言つとくが、キヤラは崩すなよ。ビデオの意味がなくなるからな」「完全になりきつてくつころプレイを完遂しますよ！」

「……そうか。頑張れよ」

テンションが上がりすぎて作間の声も右から左に抜けている庵。

そのままの勢いでずんずんと進んでいく彼女を追いかけるように作間が歩いている

と、その途中にあつた扉が開いて二人の男が姿を現した。

彼らは、作間の姿を見るなり勢いよく頭を下げる。

「こんな所でミルコとヤレるとかマジ感謝ツスよ作間さん！　ありがとうございます！」

「おれも嬉しいです！　ありがとうございます！　夢が叶いました！」

「いや、別にアレミルコじやなくて、それっぽいだけだからな」

「でも体は本物と一緒になんすよねえ！　こんな体験できんの間違いなく初めてつスよ！
なあ馬淵！」

「は、はい。犬山さん。おれも、そう思います」

犬山と馬淵、彼らはこのビデオに出演する男優たちだつた。

犬の個性を持つたチャラい見た目の犬耳男が犬山で、馬の個性を持つた頭部が完全に馬の巨漢が馬淵だ。

二人とも真逆ではあるがヒーローという存在に思うところがあつたらしく、今回の撮影には非常に熱意をもつて取り組んでいる。

「とりあえず午前中はいい感じだつた。午後も頼むぞ。あいつに容赦は必要ないからな」

「本人からもそれ言わされましたよ。まつ、俺もそういうのは大好物つすけどね！」

「普段、あまり力を出せない分、思いつきりやります」「頼んだぞ」

そんなやりとりをしながらスタジオに入ると、部屋の隅にある移動式のロングチエアの上に庵の体があるのが目に入る。

どうやら既にミルコの体に憑依したらしい。

既に準備を始めているスタッフの一人に居場所を聞くと、牢屋のようなセットの中で機嫌よく兎耳を揺らす彼女の姿があつた。

「ミルコ！」

「ああ!? んだよクソヴィランの親玉が！」

「よし、さつそくなりきつてるな。ちよつと口が悪すぎる気もするが」

正しく本物のミルコらしい剣幕と口調で怒鳴る庵にそう評価を下す作間。

それを聞いた庵はすぐに演技を崩して小首を傾げた。

「え、そう? 資料みた限りはこんななんだつたよ?」

「別に悪いってほどじやない。それにビデオの内容からして特に問題にはならんだろう。それでいけ」

「りよーかいー。ささ、お二人さん……じやなかつた。おいテメエら! 私を屈服させたいならさつさとかかつてこい!」

再び威勢よくミルコの真似を始めた庵は、男優二人を手招きしながら怒鳴り声をあげた。

しかし、何故かその二人が微妙な表情をしたまま動かない。

それどころか、スタッフたちもまた同じような表情になつていてる。

既に観戦モードでソファに腰かけていた作間は、そんな彼らの様子に気づいて声をかけた。

「どうした？」

「いや、あのミルコの姿での口調と笑顔はすげえ違和感つすね」

「ギャップがすごいです。でも結構いいかも」

「気持ちはわかるが……とにかくお前らも準備をしろ。ところで夜見ヤミはどうだ？」

「ボクはここだよ」

ちょうど部屋に入ってきた小柄な男はそう言つて作間の横に腰かけた。

少年と見紛う姿をした彼こそ、このアダルトビデオ会社『R.O.D』の社長兼監督を務める夜見ヤミという男である。

「どこに行つて……つてこの匂い」

「ちょっとラーメン食つてきただけ。準備は先に終わらせといたから問題はないよ」

「どうか。なら任せる」

「任せられようじやないか」

そう言つてテキパキと指示を出し始める夜見の横で、作間はスタッフの一人に差し出されたコーヒーを飲みながらスマホを取り出す。

そして顧客の何人かからの依頼の確認と返事を済ませると、いつの間にか撮影の準備が終わっていた。

「さて、確認だけど。午後は午前よりハードになるから注意してね、庵ちゃん」

「うぜえんだよガキ！ ごちやごちややつてねーで始めたらどうだ！」

「あー、ほら。見ての通り本人はノリノリだ。ハードな展開は願つたり叶つたりだとさ」

「そうだね。後はこっちの腕の見せ所だね。まあ上手くやるよ」

自信満々にそう言つて見せる夜見に領き、作間はプロである彼らに後は任せることにした。

既にミルコになりきった庵の怒鳴り声や、ヴィランになりきった犬上たちの口上が聞こえる中、作間はソファに背を預けてゆっくりと眠りに落ちていった。

「店長、起きてくださいよ店長」「あん？」

再び目を覚ますと、そこにはボロボロになつたコスチュームを纏つたミルコの姿が

あつた。

体のところどころには痣もできており、一部には噛まれた後もついているが、それを痛がつている様子はなさそうだ。

「撮影は終わりましたけど、この体つてどうなるんです?」

「あとで廃棄するから持つて帰るぞ。それがどうかしたか?」

「そんなのもつたいないじやないですか! せつかくなんですからもつと凄い事しますよ!」

どうやら憑依を解かずにつっていたのはそれを言うためだつたらしい。

周りに片付け最中のスタッフが近づいていないことを確認した後で、作間は庵に返事を返した。

「例えは? 何をしたいんだ?」

「え? そう言われるとなー。このままの姿で外に出て一般人とセツクスとか?」

「だからそれはダメって言つただろ」

「そんな事されたらビデオ売れなくなつちやうよ。庵ちゃんは次のビデオも作りたいんでしょ?」

「んー、それは確かに。反省しまーす」

駄々をこねていた庵だが、夜見が今後のビデオ撮影のことについて触れると大人

しく引き下がった。

よほど今回の撮影に味を占めたらしい。

庵がその場から去つていくのを見届けると、今度は夜見が作間へと頭を下げてきた。
「ありがとうございます。作間さん。今回のはかなり売れると思うよ。たぶん過去最高クラスだ。こ
れで破産しないで済む」

「そうでなきや困る。せつかくウチの商品を使つてるんだからな。ちゃんとヒーロー対
策もしつけよ」

「わかってる。ちゃんと『このビデオの内容や登場人物はフィクションです』つて入れと
けば大丈夫だよ。タイトルも伏字を使えば罪には問えないさ」

「そうか。まあ、俺はプロじゃないから任せゆ。完成したらまず一報を入れてくれ
「なるべく急いで完成させるよ」

夜見がせかせかとその場から立ち去つたため、作間も元の姿に戻つた庵を連れてその
場を離れることにした。

そしてミルコ人形の入つた袋を担いで店へと戻る途中、庵はその目をキラキラと輝か
せながら作間に言つた。

「次の撮影が楽しみですね店長！ 次は誰になりきつて凌辱されたらいいかなあ！」
「……次を作るとしたら数か月先だぞ」

「ええ～!? なんでなんで！ もつとハイペースで撮りましょよ！」
 「ビデオがどの程度影響を生むかわからぬからな。仕方ない」

「そこをなんとか！ そこをなんとか～！」

それからしばらくが経ち。

『R.O.D』社によるアダルトビデオ、『ヒーローミ●コのガチエロ三番勝負～褐色発情エロウサギがヴィランにボロ負け屈服調教～』は無事に発売されることになった。
 発売初日から異常な売り上げを見せたこの作品は、あつという間にネットのビデオ配信サイトの売り上げランキングで1位に上り詰めた。

特に話題になつたのは、女優があまりにもミルコ本人にそつくりだつたことだ。

もちろん誰もが変身か何かの個性だろうと思い、本人だとは思わなかつたが、ヴィラン役の男優たちに辱められ、痛めつけられる姿は真に迫つたものがあつたのだ。

そして同時に、無修正かつおまけのついた裏ビデオが何者かの手によつて裏社会に流通するようになる。

本編の他に男がミルコをボコボコに殴りつける映像のついたそれは、一部のヴィラン

たちの間で人気を誇ったとか。

第5話 情報収集 in 田等院

ビデオが発売して一週間ほどが経つたある日。

顧客の一人から新たな女性ヒーローが活動を開始するという情報を得た作間の姿は、『田等院駅』という都心から少し離れた駅の中にあつた。

「頼むから騒ぐなよ。遊びに来たんじゃらないからな」

「え？ でもせつかくだから美味しいレストランとか良さげなカフェとか探ししましょうよ！ もつたいなくない？」

「……やつぱり置いてくればよかつたか」

そして彼の隣には以前買ったブランド服を着た庵の姿もあつた。

当初、作間は一人で行動するつもりだったのだが、ビデオ発売以降テンション高めな庵が何をやらかすか見当がつかないため、自分の目の届くところに置いた方がいいと判断したのだ。

しかし移動中もずっと喋りかけてくる庵のせいで、既に作間はうんざりとした表情を浮かべていた。

朝早くに始発電車での移動だつたため、本当なら移動中にも仮眠を取るつもりだつた

のだ。

「まあ、いい。情報によれば、こちらで何か騒動が起きないか張つてるらしい」

「じゃあトラブル待ちつてこと?」

「そうだ。それまでは適当に時間を潰してもいいから、絶対に騒動になるような事はするなよ」

「やつたあ! それじゃあ行きましょう!」

かくして折れた作間が妥協した事により、二人は買い物をしながら街を歩くことになった。

しかしそれも長くは続かない。

というのも、二人が町の方に向かつて歩き始めて幾らかもしないうちに、ついさつきまでいた田等院駅に巨大な人影が出現したからである。

おかげで彼らはUターンして駅に戻ることになった。

「タイミング最悪すぎますよー。空気読めませんよねーヴィランつてやつは」

「それをお前が言うのか……」

既に集まっていた野次馬の後ろにつくと、戦闘が始まっていた。

ただし、お目当ての女性ヒーローの姿はない。

そこにいたのはシンリンカムイという若手のヒーローを始めとする数人のヒーロー

たちだつた。

「……巨体の相手には慣れてないのか？ まあ好都合だ。これだけの騒ぎならその新人ヒーローとやらも姿を現すだろう」

何かしら巨大になる個性を持つてゐるらしいそのヴィランは、ヒーローに囮まれながらも周囲の建物を破壊したりして多くの被害を出し続けている。

上手く止めなければ更なる被害が出る可能性があるため、ヒーローたちはなかなか思い切つた行動に出ることができないようだ。

暴れている駅では当然ながら電車が止まり、しばらく帰れなくなつた事を悟つた作間はその場にいるサラリーマンたちと同じようにため息を吐いた。

「お目当てが現れても帰れそうにないな。しばらくは買い物に付き合つてやつてもいい……ぞ？」あれ？」

そこで振り返つた作間は、いつの間にか庵の姿が消えていることに気付いた。

周囲に目を向けるが、そこにあるのはヒーローとヴィランの戦いに目を向ける民衆の姿だけだ。

焦りながらもスマホを取り出した作間だが、そこで電話の邪魔をするように周囲から歓声があがる。

非常に目を引く、新たなヒーローがその場に現れたのだ。

「キヤニオンカノン！」

必殺技の名を叫びながらヴィランに飛び蹴りをかましたそのヒーローは、作間が事前に得た情報通りの『巨大化』個性を持つ女性ヒーローだった。

そのスタイルの良さがよくわかるタイツ型のヒーローコスチュームを身に纏つており、ビジュアル面での受けを狙っているのは誰の目から見ても間違いないだろう。

そんな彼女は巨大化した状態で尻を強調するようなポーズを取り、カメラを構える民衆たちに向けて自己紹介を行った。

「本日デビューと相成りました！ M^{マウント}t・レディと申します！ 以後お見シリおきを！」 巨大なヴァイランを更に巨大化して倒すという鮮烈なデビューを飾ったマウントレディ、そんな彼女の姿を作間はしつかりと捉えていた。

間違いなく人気が出るだろう。実力は不明だが、巨大化の個性はそれだけで強力だ。それはつまり、『理想郷』においても良い商品になりうるということである。

予想以上のアタリを引き当てた喜びに笑みを浮かべながら、作間はその場をさつさと離れて庵を探そうとした。

そんな時である。

「わあ～お姉さんかっこいいです！ ファンになっちゃいます！」

「ホント？ ありがとーっ！ これからも応援してね！」

「―――っ!?」

興奮が一気に吹き飛んで、作間は声のした方向へ――巨大化を解除したマウントレディがいる方向へと振り向いた。

聞き違いであつてくれと願つた作間だが、そこにはマウントトレディへと話しかけている庵の姿があつた。

「何やつてんだあのバカ!?!」

幸い、二言三言交わして軽く握手しただけですぐに会話は終わつた。

安堵するのもつかの間、会話を終えた庵がまつすぐに駆け寄ってきたため、作間は怪しまれない程度の早足でその場を離れるのだつた。

「頼むから勝手な行動をしないでくれ。寿命が縮んだ」

その後、もうこれ以上ヒーロー絡みのごたごたに巻き込まれたくない作間は、庵と一緒に近場のファミレスに避難していた。

当然作間が問いただすのはさつきの勝手な行動の事だ。

庵がメニューに目をやつていたため答えは期待していない作間だが、そこで返ってきたのは割とマトモな返答だつた。

「え?。でも、どうせなりきるんだから知つておきたいでしょ?　直接話したらだいた

「いわかるよ?」

「たとえば?」

「ほら、何考えてそーとか、なんとなくの性格とか」

行動 자체は突飛だが、一応考えての行動ではあつたようだ。

口から出まかせを言つて誤魔化している可能性もあるが、とりあえず作間はそれを信
用することにした。

作間たちにとつてヒーローは避けるべきものだが、別に接触するだけで一気に危険に
なるわけでもないのだ。

「……わかつた。確かにそうかもしれないが、一言くらい言つてから行動しろ。いいな
?」

「了解でーす! じゃあ好きに頼んでもいいですか?」

「じゃあつてお前……たかがファミレスでの注文くらいで遠慮するな。俺が普段何万の
商品売つてると思つてるんだ」

「それもそうですね! じゃあ……」

モーニングセットだけを頼んだ作間の前で、メニュー表を眺めながら好き勝手に注文
し始める庵。

朝からそんなに食べて腹は大丈夫なのかと思いながら、作間はコーヒーを口にするの

だつた。

それからしばらく経ち、正午を過ぎた時間になつても二人は田等院を離れていなかつた。

とつくに再開している電車が問題なのではない。

庵が歌いつかれるまでカラオケに籠つた後でショッピングに付き合つていたところ、この町でオールマイトが発見されたという話を聞いたからである。

黒霧という怪しげな男からの依頼ではあるが、これを機会に達成してしまおうというわけだ。

問題は、ある理由によつて駅から離れられなくなつてしまつた事である。

「おなかいたい……」

「朝にあんだけ食つといて昼にパフエ食えばそりや腹も壊すだろうよ」「正論言つてないでなんとかしてくださいよう！」

見た目だけは完全に美少女かつお嬢様っぽい服装の庵だが、お腹を押さえながらよたよたと歩いていては台無しだ。

別に見た目なんかどうでもいい作間ではあるが、そんなのと並んで歩いているのは周囲からの視線が面倒な事になつていると感じ始めていた。

「胃薬やるから。それ飲んで駅のトイレにでも行つとけ。俺はまだ探すから」

「うう……店長がいつになく優しい」

「いいからもう黙つとけ。そこまでは送るから」

漏らされでもしたら溜まつたもんじやないと駅のトイレまで庵を送り届け、作間は再び町へと繰り出した。

そうしてなるべく人の多い方に向かつて歩いていると、どこかで爆発音が聞こえたような気がして作間はそちらに足を向けた。

もしもまだ町にいれば、No.1ヒーローなら騒動を見過さないはず。

そう思つての行動だった。

そして作間が辿り着いた田等院商店街は、戦場さながらの荒れっぷりとなつていた。その中心にいるのは目玉のついた泥のようなものに覆われた学生らしき子供で、藻掻きながら周囲に爆発を振りまいっている。

既に何人ものヒーローが到着しているが、子供を気にして誰も有効な行動をとれていない。せいぜいが周囲の人間の避難誘導だけだ。

マウントレディも駆けつけていたが商店街が狭くて入つてこられないらしく、入り口で待機するにとどまつている。

オールマイトがいない事に落胆した作間は、しばらくは頭上にあるマウントレディの

尻が揺れるのを眺める事にした。

「流石に胸や股間部分は生地が厚いか……」

そんな事を呟きながら待機していると、民衆の中から子供が飛び出してきて泥ヴィランに捕まっているらしき子供へと駆け寄った。

それには大して興味を抱かなかつた作間だつたが、次の瞬間マウントレディの尻ではなく商店街の中央に目を向けることになつた。

「やつぱりきたかオールマイト！」

それからはあつという間だつた。

誰も手出しできなかつた泥を拳を地面に叩きつけて起こした風圧だけで子供から剥がし、劇的勝利を決めてしまつたのだ。

天候まで変えるほどのパワーはもはや反則だ。初めてオールマイトを生で見た作間はそんな事を思つた。

「ただまあ、目的は達したしな。庵を回収してさつさとこの町から離れよう」

作間はオールマイトの全身をしつかり目撃した。これで後は店に帰つてオールマイトを作れば黒霧からの依頼は達成だ。

慣れないことをして疲れた作間は、まつすぐに駅に向かつて庵を回収すると、飛び乗るようにして電車に乗ると目を閉じようとした。

「店長、眠いんですか？」

「見りやわかるだろ……」

「私、お腹痛いのは治りましたけど、今度は普通に気分が悪いんですよね」

「……なぜそれを俺に言う？」

眠そうに片目だけ開けて言う作間に、本当に少し顔色を悪くしながら庵は言う。

「何か気分をよくするような話してくださいよー！ お願ひしますよー！」

「無茶苦茶かお前……次に撮るビデオの内容マウントレディに決めたからそれで妄想でもしてろ。俺は眠いから——」

「ほんと!? やつたー！ 一目見てティンツと来てたんです！ ヘフヘフヘーこいつは次のビデオにいたきたぜーみたいな！」

「……」

「やつぱりあの人はあるのお尻がいいですよね！ 私ちよつとお尻中心でやつてみたいんですけど……ねえ店長！ 聞いてますか？」

「言うんじやなかつた……頼むから寝させてくれ」

黙らせようとした結果もつと騒がしくなってしまった庵のせいで、帰りの道中でも眠ることができなかつた作間。

彼が安らかな眠りにつけたのは、夜になつて帰り着いた店でベッドに倒れこんだ瞬間

であつたという。

幕間 悪の会話

オールマイトの肉体を作るという依頼を達成してしばらく後。

作間は店でビデオ会社の社長である夜見からの電話を受けていた。

『いやー素晴らしいとしか言いようがないね!』

「随分上機嫌だな」

『こんだけ売れて上機嫌にならないはずがないさ! 笑いが止まらないってやつだよ!
!』

二週間ほど前に発売したミルコのビデオは、ちょうど今日で週間売上ランギング連続
1位を達成していた。

既にその売り上げ数は一万本に達しており、通常三千本売れればヒットと言われる業
界の中では正しく異常とも言える売り上げである。

作間が『理想郷』の客に向けて情報を発信した影響も多少はあるだろうが、これだけ
売れたのはミルコというヒーローに人々話題性があつた証拠だろう。

おかげで経営難だつた夜見の会社は一気に黒字になつていて、かつての栄光を取り戻
した夜見は笑いが止まらない状況だつた。

『ファンメールもどしどし送られてきててね。次はどんなビデオを作るんですかっていう期待の声も高まってるよ』

「だが、アンチの意見もすごいんじやないか？ 何しろ女性のトップヒーローだ。ファンも多いだろう」

『そつちもすごいよー。でもまあ、ちゃんとファイクションとして楽しむ人の方が多いんだろうね。ファンたちの反応も半々といったところかな』

「ウチの客も満足する出来だ。義爛も裏じやかなり儲けたと言つてたし、やはりミルコにしたのは正解だつたな」

夜見の言う通り、ネット上に見られるミルコのファンたちの反応はだいたい半々に分かれている。

かつこいい彼女に憧れる女性を中心としたファンは、ビデオの発売が噂になつた当初から非難を続けている。

しかし、その強さに憧れつつも彼女のある種煽情的なコスチュームに惹かれた男性を中心としたファンは、偽物だと割り切つた上で背徳感を抱きながらもビデオを楽しんでいる者も多いのだ。

『だからこそ！ この流れを途絶えさせないうちに！ 早急に次を作る必要があると思うんだよ！』

「そうだな。当然そう言うと思つて次のヒーローも決めてある。この前にデビューした新人だ」

『新人?』

「新人という言葉を聞いて疑問の声を上げる夜見に向かつて、作間は手元のタブレットを操作しながら言う。

「知名度は確かにないが、間違いなく今後売れるだろうビジュアルと良い個性を持つていた……今、資料を送つた」

『確認するよ……へえ、M_t^{マウント}・レディか! ニュースで見たよ。そうか、彼女か。いいかもね!』

タブレットから送られたM_t・レディの資料を見た夜見は、それを見て賛成の声をあげた。

まだデビューしたばかりの新人ヒーローではファンの影響を利用した集客はあまり見込めないが、今はミルコのビデオを出したことで既に流れを作つている状況だ。

それを考えれば後はヒーローのビジュアル、キャラクター、そして今後ヒーローとして人気が出ることを見据え、二本目以降の作品が出しやすいように先取りする価値があるかどうかだ。

デビュー当初から積極的に目立とうとし、ファンの獲得のためにセクシー・ポーズをす

ら取るM.t. レディは、夜見にとつてその価値があるように見えたのだろう。

「じゃあ決定だな。内容はどうする?」

『んー、ウチはヴィランものでも別にいいけど……やつぱり別パターンも今後欲しいから、別のがいいかもね』

「だが、裏で流す時にあまり温い内容だとこつちが困る。何かちようどいいのはあるか? 俺はそういうのにはあまり詳しくないんだ』

『そうだねえ……』

うーんうーんと電話越しに悩む声をあげる夜見。

彼にとつて作品を作る際に必要なものは、ある程度の馬鹿馬鹿しさと、同等のリアリティだ。

ありえない、ありえそう、それらを両立させてこそ売れる作品に仕上がる。

そんな夜見がやつとひねり出したアイデイアは、作間にとつても驚くべきものだった。

『ナンパ＆ハメ撮りモノなんてどうだろう?』

「いやお前……前にリアリティが全然ないヤツは売れないって言つてなかつたか?」

思わずツッコミを入れる作間に、ちつちつちとわざわざ声で言いながら夜見は理由を説明する。

『確かにリアリティは必要だけどね。別にそれを順守する必要はない。それに、ある程度の説得力があれば馬鹿馬鹿しい内容でも問題ないんだよ』

『そういうものなのかな?』

『うん。それに今は「明らかにファイクションだろ】ってのをちゃんと作らないといけないからね』

「あー、なるほど」

流石にそれについて言われたら作間も頷かざるを得ない。

ミルコが人質を取られて調教される、なんてアホみたいな内容でも文句が出たのだ。
ここでまた同じ展開のものも作りたくないし、かといってリアリティがあるものも作りたくないということだろう。

『それに彼女、建てたばかりの事務所を巨大化で壊しちゃつたみたいだからね。資金繰りで困っているのは事実だから、その線でビデオについて流れならこっち側も台本を作りやすい』

「普通に考えればそんなんで出るわけないんだがな」

『ま、そこはファイクションだからって事でね』

そう言い切る夜見の言葉を受けて、作間はその案で行くことに頷くことにした。
プロである夜見が言うのだ。素人である作間が考え付く不安は織り込み済みだろう

と判断したのである。

『名前を隠して本名で出演。でもヒーローコスは似てるからって理由で着てもらう。そんな感じでいこうか』

「ひつでえ台本だな」

『大事なのは【ヒーローとヤツてる】って絵であつて、そこの過程は見てる人はあまり気にしないものだよ』

『そういうもんか……ま、売れる作品を作つてくれるならそれでいい。台本が完成したらまた連絡をくれ』

『わかつた。それじゃあまた』

作間は夜見との電話を打ち切ると、スマホを懐へとしまい込んでタブレットの操作を行つた。

画面に映るのは、先日黒霧から送られた一件のメールだ。

「新しい依頼、ねえ」

先日の依頼達成時の金である五百万円はちゃんと表の口座に振り込まれていた。

その点で見れば、黒霧からの依頼は受ける価値があるし、成功報酬もちゃんと期待できるものなのだろう。

しかし、今回ばかりは内容が内容だった。

前回のオールマイトの肉体を踏まえて考えると、大して学のない作間でも、黒霧の裏にいる人間の狙いは見えてくる。

「困ったな。どうしようか」

本気で頭を抱える作間は、庵が買い物から帰つてくるまでずっと悩み続けた。

タブレットの画面に映る依頼対象物は、『雄英学園教師の肉体』。

誰を作つても一体五百万円で買い取るというものだつた。

「結果が出たよ先生。やはり予想は正しかつたようじゃな」

暗闇で、何かを操作し続ける老人の声が響く。

上機嫌に体を揺らしながら、その老人は食い入るように操作する機械の電子画面を見つめていた。

「呼吸器官はボロボロ、胃袋は無し。手術痕をもつと調べればより多くの事がわかるじやろう」

「そうか。やっぱりあちらも満身創痍だつたわけだ。朗報だね」

暗闇に、もう一人の男の深みのある声が響く。

男は椅子に座つたまま、老人が解剖結果について話すのに耳を傾けていた。

「それで、例の特性の方は？」

「結論から言うと、彼の作つたこの体は『個性因子以外を再現した完全な肉体』じや。実際に興味深い！既に彼の作つた作品は何体か手を回して入手したが、いずれも同じ結果がでておる！」

「ほう……それは異形型もなんだろう？」

「もちろんじや！」

興奮しながら語る老人は、既に解剖を行つた何体もの人形を画面に映し、その解剖結果を声高に男へ語る。

「本来なら個性があるからこそ持つている体质が、個性なしの状態でも再現されておるのじゃ！ 実に興味深い！」

火を放つ個性を持つ人間が、自分の放つ火ですぐ死んでしまわないように。

翼を生やす個性を持つ人間が、その翼に神経を通わせて動かす事ができるように。

個性は体の在り方に影響を及ぼす。

しかし老人が手に入れた幾つかの『作品』には、個性が無いにもかかわらずそういう

た常人との体质の差異が発見されていたのだ。

「聞けば聞くほどに惜しいね。僕の目が見えれば迷わなかつたものを」

「うむ。しかしまあ、勝手に動いてこつちに役立つてくれる方が便利とも言える。先生も一々ヒーローの顔など見に行きたくはないじゃろ?」

「そうだね。そんなことに時間を使つていい余裕は僕はない」

解剖が一段落した老人は、再びウキウキしながら機械を操作して画面を切り替える。そんな老人の背に、男は今思いついたと言わんばかりに一つの提案をした。

「ところでそのオールマイト、脳無には使えるのかな?」

「元の個性が無いから最上位には使えんが……下位、中位には問題ないじゃろ。意思なき人形なのは変わらんのじゃし」

「なら、それを最初の一体としてあの子にプレゼントしようか」

暗闇の中で男は嗤つた。

老人はその提案を受け、さつそくプレゼント作りに取り掛かつた。

幕間 正義の裏側

「な、なにこれ……」

ある朝、いつも通りの時間に目を覚ましたMt. レディ。

彼女が身だしなみを整えながら自身のSNSをチェックしていると、一晩のうちにフォロワーの数が急増していることに気が付いた。

不思議に思いながらもその原因を探るためにエゴサーチを行った彼女は、数分もしないうちにその原因を発見した。

しかしその原因是、彼女が予想だにしないものだつたのである。

「なんのよこれ～～～～！」

Mt. レディが見つけた、とあるまとめサイトのトップ記事。

急速にアクセス数を伸ばしているその記事のタイトルには、こう記されていた。

【R.O.D社の最新作】『マ○ントレディのハメ撮り初体験！　まさかの元カレチンポで本気受精セックス開幕！』本日発売！

「いったいどうしたんだ。今日はずっと元気がなかつたようだが」

まるで死人のような目でヒーロー活動を行つていたM t. レディを気にかけ、シンリンカムイは彼女を労わろうと飲みに誘う事にした。

彼の真摯な気持ちが伝わつただろう。 M t. レディはその誘いに頷いて飲み屋へとやつてきた。

そして現在、個室で向かい合つて座つたM t. レディは、普段とはかけ離れたしおらしい態度でシンリンカムイの問い合わせに答えたのである。

「……本当は言いたくないんですけど、聞いてもらつてもいいですか？」

「ああ。これも先達の役目だ。愚痴でも何でも聞いてやる」

「じゃあ……やつぱ言いたくないんでこれ見てください」

「何だ？ ……こ、これは」

M t. レディが差し出してきたスマホを受け取つたシンリンカムイは、例の記事を目撃して呻き声をあげた。

その反応を見たM t. レディは、既に注文済みだつたビールジョッキを片手に怒鳴り声をあげた。

「こんなの飲まなきややつてられないですよ！ なんなのこれ！ ふざけんじやないつての！」

「おいおい、怒りは尤もだが少し落ち着け。店に迷惑だぞ」

酒をあおる様に飲みながら、Mt.レディはヒーロー活動中は口にできなかつた感情を吐き出していく。

普段、露骨なまでに人気集めに勤しみ、他のヒーローの活躍の場を横取りする事もある図々しいMt.レディだが、新人であることには変わりはない。

そんな彼女が弱みを見せる姿を見たシンリンカムイは、酒もほとんど飲まずに彼女の愚痴に付き合い続けた。

その後しばらくして、Mt.レディがやつと落ち着いたのを見たシンリンカムイは、そのまま彼女の気分が沈みこんでしまわぬように自分から話を振ることにした。

「それで、どう対応したんだ？ 何もしなかつたってわけじゃないんだろう？」

「当たり前じやないですか！ 速攻で警察に連絡しましたよ！」

「それでどうなつた？ あまり芳しい答えは得られなかつたようだが……」

「それが酷いんですよあいつら！ 他人事だと思つて！」

朝、記事を確認してすぐに警察へと連絡をしたMt.レディは、当然すぐにビデオの販売を取り締まるものだと思つていた。

しかし彼女が電話相手から通達されたのは、ビデオに違法性はないという信じられない言葉だつたのだ。

「それは酷いな」

「聞いてくださいよ先輩！」

警察が言う取り締まれない原因つてのを！」

Mt・レディが警察に説明された今回の件の黙認の理由は二つ。

まず第一に、かつて同様の件を警察としては問題なしと認めたことがあるからというもの。

かつてヒーロー時代の黎明期だつた頃、今回と同様にヒーローをネタにした作品は数多く作成されていた。変身などの個性を持つ人間は少なかつたが、それでもなかつたわけではないのだ。

その時、判断を迫られた警察はそれらの作品を黙認する事としたのだ。

ヒーローという存在の周知が何よりも重大だつたこともあり、どのような形であれヒーローとして多くの人々に知られる機会が増えるのは歓迎すべきだろう、と。

そして理由の二つ目が、本人が出演しているわけではない事がきちんと明記されている事だ。

パッケージはもちろん、ビデオ内でもファイクションである事や別人である事が表示されている。

それにパッケージのヒーローネームだつてちゃんと伏せ字で隠されているし、作品

内でも呼ばれる時はP音できちんと聞こえないように加工されているのだ。

そして何より、本人がそれに出演していない事は当然事実なのである。

見た目が似ている人物がビデオに出ることも、そのビデオでどんな格好をしてどう呼ばれようとも、それは罪に問わるべきことではない。

それを創作物（ファイクション）として発信し、過去に警察がそれを黙認した事実があるのなら尚更だ。

「それで、警察は黙認するというわけか。本当に酷い話だ」

「そうでしょ!? しかもちよつと調べたらあのミルコさんまで同じ目にあつてるみたいだし！」

「それはまたなんというか、命知らずにもほどがあるな」

シンリンカムイはその話を聞いてミルコがビデオ会社に突撃していくシーンが頭に浮かんだが、それは半分当たつていた。

実際、既のところで警察からストップがかからなければそうなつていた可能性が非常に高かつたのだ。

しかし怒りが頂点に達しているとはいえ、ミルコはヒーロー。

一応ヒーローよりも上位の組織にあたる警察がそれを黙認した以上、ただビデオを発売しているだけの会社を敵（ヴァイラン）認定して捕まえるなんて事はできないのだ。

「うう……そりや私だつてお尻突き出したり色々したけど、それとこれとは話が別よ！ 確かにファンの人数も増えたっぽいけどこんなのが理由で増えるなんて！ そう思

わない!?」

「うむ。わかるぞ。不本意な理由で増えても嬉しくないのだろう?」

「嬉しいには嬉しいけど! でもそうじゃないのよ! もつとこう……あるでしょ!」

ヒートアップするにつれて酒が回ったのか、口調が荒くなりよくわからない事を口にしだしたM t. レディ。

再び勢いよく酒を飲みだした彼女を宥めつつ、シンリンカムイはその話を黙つて聞き続けるのだった。

『ヒーロー公安委員会には色々と尽力していただいたようで、感謝します』

「いやいや、普段から君の店には随分と世話になつてるからねえ。これくらいはさせてもらうとも」

よく日の光の当たる広い部屋で、50代も半ばになろうその男は革張りの椅子に座つて電話をかけていた。

電話の相手は、1年ほど前に紹介された非合法の店の店長。

男にとつては本来捕まえる対象である存在だが、今ではその店のお得意様としての関

係を築いていた。

『本来なら警察だけ抑えてもらう予定だつたでしよう? だから、今度接待か何かさせていただきますよ』

「接待?」

『ええ。ビデオはもちろん見ていただいてますよね? そこで活躍してゐるウチの店員が、接待プレイとかやつてみたいとか言つてゐんで……まあどうせすぐ飽きるから一回だけでしょ?』

「おお! それはぜひお願ひしたいですなあ』

店長の言葉に、男はビデオの内容を思い出す。

生意気な口を利くミルコを容赦なく辱め、新人のM・t・レディをこれ以上ないほどに屈服させる光景。

それを己で体験できるかもしれないのだ。

「流石、私の事をよくわかつてゐるようだ……他にもまだ何かあるのでしょうか?』

『話が早いと助かります。現在、雄英高校に在籍している生徒のデータを頂きたい。そして来年度の生徒が入学したらそのデータも』

「ほう。理由をうかがつても?』

店長からの要請はかなり興味深いものだつた。

例の店では、今までプロのヒーローだけを対象に取り扱ってきた。

もしもこのタイミングで雄英の生徒の人形ドールを作るのだとしても、何故このタイミングなのだろう。

『絶対に口外してもらいたくはないのですが……』

「もちろん言わんよ。二度とそちらの商品を買えなくなるのはごめんだからね」

『そうですか、それではお教えいたしましょう。実は今後、雄英高校が注目される可能性が高そうだと思いましてね。そうなる前に準備を進めておこうかと思いまして』

注目される理由。

きっとそれに触れれば関係が断ち切れると思った男は、それを意識から外して口を開く。

「つまり今後は雄英の生徒も商品として取り扱う、と？」

『ええ。ま、状況次第では雄英以外も扱う予定ですが、とりあえずは』

『それはまた……ヒーローの卵を一足先に頂ける日が楽しみでなりません』

雄英学園ヒーロー科。それは将来トップヒーローになる可能性を多く持つ学生たちが集う場所。

そんな優秀な学生たちのドールが、今後は店に並ぶというのだ。

弱い個性しか持てず、優秀になれなかつた者たちはきっとその鬱憤を晴らすためにそ

のドールを買い求めるだろう。

将来有望な女生徒たちの似姿を、己の欲望で汚すために。

『それでは、また何かあつた時はお願ひします』

「任せておきなさい。それより、接待の件はよろしく頼むよ」

『もちろんです。それでは今度は店で会いましょう。副総監殿』

一章 狂氣の坩堝

第6話 狂える少女

「ふああ、よく寝たー」

朝、憑城庵はいつも通りに『理想郷』の地下にある一室で目を覚ました。

その部屋は元々は倉庫として使われていた部屋で、それなりの広さがある室内には、まだ箱詰めにされた幾らかの荷物が置かれている。

彼女が眠っていたのは、そんな部屋の中央に置かれた季節外れの炬燵の中だった。
「ちょっと夜更かししそぎちやつたかなー」

眠そうに眼をこすりながら立ち上がった庵は軽く身だしなみを整えると、シャワーを浴びるために階段を上がる。

そしてさっぱりとした気分になつて『理想郷』の店内に行くと、そこには既に作間の姿があつた。

いつも通りのスース姿で、タブレット片手にソファで寛いでいる。

「随分と遅かつたな。何かあつたか?」

「最近の撮影を思い出すと胸が高鳴つて疲れなかつたんですねー。プツシーキヤツツ

の人たちつて全員性感帯違うからもう楽しくて楽しくて」

「そ、うか、いつも通りみたいだな」

春になり、庵が出演したビデオの数は5本に増えていた。だいたい一ヶ月に一本のペースである。

おかげで彼女の欲望はほどよく満たされており、今ではビデオ撮影以外の退屈な仕事もきちんとこなすようになっていた。

それでも、現在の彼女にとって一番の楽しみがビデオ撮影である事に変わりはない。

「だから次のお仕事も気になつてしまふがいいんですよー。次の企画はまだなのですか？」

「ビデオはまだまだ先だ。我慢しろ」

そう言つて再びタブレットに目線を戻した作間を前に、庵はむうと腕を組みながら考える。

庵が『理想郷』の店員として任されている仕事は留守番と掃除だ。接客には未だ不安があるということで殆ど任せてももらえていない。

それ以外には体験コーナーで客相手にプロモーション活動を行つたりもするが、基本的に彼女は暇なのである。

幸い多額の給料はもらつているため娯楽用品やファッショ用品には事欠かないが、

生憎と彼女はそれで満足できるような人間ではなかつた。

だからというわけではないが、いい機会だと思つた庵は少し前から考えていたことを作間に頼んでみることにした。

「店長！ 私、ボーナスが欲しいです」

「はあ？」

「ほら、私がここにきてもう半年くらい経つわけじゃないですか！ ボーナスが欲しいです！」

あまりにも唐突な申し出に驚く作間に、庵は畳みかけるようにボーナスボーナスと連呼する。

最初は流していた作間も横に座つて耳元で喚かれ続けるのを嫌がつたのか、庵を押しのけながら口を開いた。

「わかつたわかつた！ 何が欲しいんだ？ お前の事だしどうせ金じやないんだろ？」

「あれ？ わかつちやいますか」

「金で買えるようなもので満足する奴じやないだろ。何が欲しいんだ？」

「えつとですねー。実は——」

そうして庵が言つた言葉を聞いて、作間の表情は驚愕に変わつた。

庵の願いはとあるイベントに参加するにあたり、作間の許可とバツクアップを願うも

のだつたのだ。

「それについてお前には話してなかつたはずだが？」

「……えつへへー」

「笑つてごまかすな。まつたく……」

元々、そのイベントについての参加依頼は作間に来ていたものだ。

どうやら庵はそれを盗み聞きしていたらしい。

作間はその事実に少しだけ悩む様子を見せたが、すぐに結論を出した。

「まあ、そうだな。別にいいだろう」

「おおー！　まさかオッケーが出るとは」

「どのみち情報を集めるつもりではあつたからな。だが、お前が直接見てくるのならそつちの方が早いだろう」

どうやら庵の『ボーナス』は作間の思惑と合致する内容だつたようだ。

庵はそうと決まれば話は早いとばかりにスマホを取り出し、作間に向かつてもう片方の手を差し出した。

彼女が何を求めているのか察した作間は、ため息を吐きながら立ち上がり、その手にメモを握らせる。

「電話番号はそれだ。くれぐれも無理はするなよ」

「りよーかいでーす」

「……自分の身と店の秘密は守れよ。わかつたな？ アレを使えよ」「わかつてますって！」

生返事しか返さない庵に辟易しながらも、作間は再び手元のタブレットへと視線を落とした。

そんな作間の隣で浮かれる庵は、すぐさまメモにあつた電話番号へと電話をかける。数回の着信音の後、庵は電話に出た音が聞こえるなり話しかけていた。

「ここにちは黒霧さん！」

「あなたは？」

「店長にお話しして断られてたお話、私が受けます！」

「……は？」

電話を受けただろう黒霧が困惑する声を聴きながら、それに一切構うことなく庵は浮かれた声で宣言する。

「オールマイト殺しとかすつごい面白そうじやないですか！ 私もご一緒させてください！」

遡ること一週間ほど前。

黒霧は作間に對して電話をかけ、自分たちの『オールマイト殺し』計画への參加を依頼した。

以前に依頼していた雄英ヒーローの人形作成もきちんとこなしてくれたため、作間の経歴も調べた結果、雄英に行くなら役に立つだろうと判断されたのだ。

作間にとつては雄英生徒を記憶する機会になり、黒霧たちにとつては生徒の人形を有効利用したり、単純に戦力になるだろうと交渉を行つたのだが、結果は失敗。

どうせ雄英体育祭で見る機会なら幾らでもあると言われば、黒霧には何も言えなかつたのだ。

そんな失敗に終わつた話だつたはずだからこそ、その作間の部下である庵から計画への参加を持ちかけられるのは意外だつた。

しかし、協力してくれるというのなら願つてもない事だ。

上からの指示で『理想郷』の関係者を歓迎するように指示を受けていた黒霧は、快く憑城庵を拠点であるバーへと転移させた。

「うわあ～！ ウチのお店も結構暗いんですけど、こっちのお店はまたなんか違う雰囲気ですね！」

「ありがとうございます。死柄木弔、こちらの方があの『理想郷』の店員の方です」「うつわ超すつごいファッション！ 私は憑城庵です！ よろしくお願ひしやーす！」

店内を見回しながら、いつも通りに満面の笑みを浮かべながら挨拶をする庵。

そんな彼女に対し、^超_{すっごい}大量の掌を纏つたような姿をした男——死柄木弔の返事は不満と苛立ちに満ち溢れたものだつた。

「おい黒霧、このバカをさつさと放り出せ」

「いきなりバカなんて酷くない?」

「黙れ。だいたい何しに来たんだ。何しにつれてきた黒霧」

「落ち着いてください死柄木弔。彼女は前に言つた『理想郷』の者です」

『理想郷』……?」

見るのも嫌だとばかりにしつしつと腕を振つていた死柄木は、黒霧の声を聴いてようやく庵の方を見た。

他人の事なんて微塵も興味がない彼も、その店の事は自らの師との会話の中で何度か聞いたことがあつたのだ。

「ああ! 今までにないやり方でヒーローを虚偽にしてる店だな。話は聞いてる。笑わせてもらつたよ」

「え? ただ単にラブドール売つてるだけだよ?」

「それは結果的にヒーローを貶めている事に変わりはありませんよ。あのビデオも同じです。胸がすぐ思いをしたヴィランは多いでしょ?」

店長である作間の思惑が何であれ、店の趣旨を死柄木や黒霧の言う通りの方向で捉えている人間はかなり多い。

というか実際、下卑た目的で人形を買つている客が大半なのだから間違つてはいないので。

「先生から聞いた。本物と同じオールマイトの肉体を提供したのもお前らなんだろ?」

「あー。店長がそんなことやつてましたね。そういえば」

「お前みたいなガキは大嫌いだが、あの店のやり方は面白いと思つてる。だから参加を許してやるよ」

「やつたー! ありがとうございまーす!」

きやーきやー飛び跳ねて喜ぶ庵を見ても、死柄木は何も言わない。
そんな珍しい姿を見て、黒霧は思わず口を出した。

「よろしいのですか死柄木。まだ個性の確認もしていませんが」

「参加したいならすればいい。『理想郷』とはつるんでおいて損はないだろ……それに」

「それに?」

「有象無象の雑魚ばつかじやつまらないと思つてたんだ。ちようどいいだろ」

そう言つて黒霧を見る死柄木の目には有無を言わせぬ光があつた。

実際、この計画に際して黒霧が集めたヴィランは数を多く見せるためだけの雑魚ばか

り。

目の前の少女がどの程度使えるかが不明でも、数合わせ以上の役に立つならそれでいいのだ。

二人がそうやって話している間、暇そろにしていた庵は二人の注意を引く様に大げさに手を叩くと、腰に手を当てて一人の前に立つた。

「それじゃ改めて自己紹介しますね。憑城庵、個性は憑依！ 趣味は憑依した後で取り返しがつかない事をする事！」

「憑依……ですか」

「そう！ 他人の体で自殺とか！ ドラッグやつたり指落としたりとか！ 色々できちゃいますよ！」

お得なセールスポイントを紹介するサラリーマンのように言う庵に対し、二人の反応は案外冷めたものだった。

黒霧はその個性の有用性について考えているようだし、死柄木に至つては既にそっぽを向いて聞こえないふりをしていた。

「無視しないでくださいよ！」

「お前の紹介になんて興味はない。本番当日にちゃんと役立つことを証明しろ。それくらいできるだろ」

「ああなんだ！ それくらいならお安い御用ですよ。なんたつて……いやまあ準備は万全ですかね！」

何かを言いかけて口ごもりつつも、庵はそう言つて胸を張つた。

そんな彼女を一瞥して、死柄木は黒霧に合図を出した。

個性発動のために霧に包まれていく庵に、機嫌がよかつた死柄木は一つだけ問い合わせた。

「最後に聞いとこう。オールマイト殺しに参加するのはなんでだ？」

死柄木は本当に、なんとなく気まぐれでそう聞いた。

黒霧から電話の時の事は聞いていたが、それが全てなのかという事に少しだけ興味があつたのだ。

そしてそれを聞いた庵の答えは、果たして死柄木の期待通りのものだつた。

「楽しそうだからってこと以外に理由つているの？」

なぜそんなことを聞くのかわからない。

霧の中へと消える刹那、そんなきよとんとした顔の庵が出した答えを聞いて、死柄木はほんの僅かに唇の端を上げて彼女を見送るのだった。

第7話 U・S・J襲撃 前編

オールマイト殺し。

それは雄英高校で教師を務めるようになつたオールマイトを、その高いセキュリティをかいくぐつて殺す事を目的とした計画だ。

作間はこの計画への参加を依頼された時にすぐに断つた。そんなものに参加するのあまりにもリスクが高すぎると思つたからだ。

そして今、リスクなく参加をする事ができる庵から計画の概要を聞き、作間はやはり参加しなくてよかつたと安堵のため息を吐いていた。

この計画のメインでもあるオールマイト殺しは、脳無とかいう改造人間を用いてオールマイトの拘束を行い、黒霧のワープゲートへ引きずり込んで体を引きちぎる事で為すのだという。

実際は他にも考えはあるのだろうが、とりあえずはそれがメインらしい。

黒霧が集めたらしい有象無象のチンピラたちの役目は、黒霧のワープによつて分散させた生徒たちを殺す事なのだとか。

そんな行き当たりばつたりかつまともなサブプランすらない杜撰なやり方が、今回の

計画の全てである。

脳無がなんのか作間にはわからないが、確かに黒霧のワープなら侵入は簡単だろう。どうやつてか事前のカリキュラムの把握もできており、侵入後の連絡網を遮断できる個性の持ち主を用意しているらしく、準備もしつかり行われてはいる事はわかる。だが庵から概要を聞いた作間にしてみれば、まるで失敗する事を前提としているかのような計画に思えたのだ。

実行側の自分たちの準備だけやって、相手側の戦力把握をやっていないのは、正しく片手落ちというべきだろう。

「……まさかな」

作間は軽く頭を振つて、ふつと浮かんだ考えを振り払う。

どこの誰が失敗を前提に、雄英なんて危険地帯への襲撃を行うというのか。

黒霧がいればいつでも逃げられる、なんて考えてやっていい事ではない。

「しかも、リーダーは失敗する気ないらしいしなあ」

そう呟く作間の脳裏に浮かぶのは、死柄木弔という男の名前だ。

庵曰く、黒霧に指示を出しているのはその死柄木という若い男であり、彼は計画の成功を微塵も疑っていないように見えたらしい。

もちろん庵の言葉にどこまで信憑性があるかは疑問の余地はあるのだが、作間は彼女

の観察力には一定の信頼を置いている。

それを踏まえれば、死柄木という男が計画に自信を持つてゐる何かがあるという事になるのだが――

「ま、終わった後でどう動くかを聞けば目的も見えてくるだろ」

今回の事は全て庵に任せると決めた作間は、窓の外を眺めながらそう呟く。
彼は今、義爛経由で来た成功報酬20万ドルの大きな依頼を受けて飛行機で海外へと向かっていた。

その内容は、ある二名の人物の**人形**作成。

以前のオールマイトの時と同様、厄介な事に使われること間違いない重要な人物たちが**標的**である。

『当機はまもなくI・アイランドへの着陸態勢に入ります』

「おつと、もうすぐか

飛行機内にアナウンスが流れ、作間はシートベルトを締める。

学術人工移動都市『I・アイランド』は世界中の研究者・科学者が集まる場所であり、その分セキュリティも非常に厳重だ。

故に本来なら作間が入れるはずもないのだが、顧客のコネと自らの個性を用いることでこの問題をクリアーしていた。

具体的に言うと、作間と同じ身長を持つ『科学者』を用意してもらい、その『科学者』の顔』を自らに張り付けることで。

「こんだけの労力をかけさせたんだ、きつちり仕事して金をもらわないとな」

今回の依頼の標的である親子が映つた二枚の写真を懐へとしまい込み、作間はグラスに残つた酒を一気に飲みこむのだつた。

その日、雄英高校1—Aの生徒たちは救助訓練レスキューを行つたために学園の敷地内にある『嘘ウソの災害と事故ルーム』へとやつてきていた。

初めての救助訓練に誰もが胸を躍らせ、担当のスペースヒーロー『13号』の話を聞いて氣を引き締める。

そして1—Aの担任である相澤が指示を出そつとした所で、異変は起きた。

「一かたまりになつて動くな！ 13号は生徒を守れ！」

一番最初にそれに気づいたのは相澤だつた。

入り口付近で生徒たちと共に13号の話を聞いていた彼は、一人だけU・S・Jの中

央広場を見下ろせる端の方に立つていたのだ。

だからこそ、宙にじわりと滲み出るようにして出現した黒い霧と、そこから覗いた手に氣付くことができたのだろう。

そして全身に掌を纏つた一人の男が完全に姿を現したのを皮切りに、広がつた霧の中からは次から次へと惡意に満ちた者たちが姿を現していく。

「何だアリヤ!?」（バイラン）また入試ん時みたいなもう始まつてんぞパターン?!

「動くな! あれは敵だ!」

状況を把握しきれていない生徒を背にした相澤は、姿を現したバイランたちの中でも特に異様な雰囲気を纏う者たちに警戒を抱く。

全身に大量の掌をしがみ付かせた男。

黒い霧のような頭部を持つ男。

脳を露にしている黒い巨体を持つ男。

そして——全身にツギハギの跡が見える女。

「13号に……イレイザーヘッドですか。先日頂いたカリキュラムとは違いますね。オールマイトがいるはずなのですが……」

「つたくどこだよ……せつかくこんなに大衆引き連れてきたつてのに……」

「んんんんん? んん! んふふーん?」

「ハア……チヤックを外せよ馬鹿」

「んん！　ぶはっ！　そうでしたあ！　全くいくら私がおしゃべりだからって物理的に口にチャツク付けるとか酷すぎません？」

「良い判断だと思います」

「全くだ」

「あれエ～!?」

ツギハギ女の口にはチャツクがついていて、それを開いた女は現状をも気にせずにベラベラと喋り続けている。

そんな女の口のチャツクをもう一度閉じた掌の男は、入り口附近に立つ生徒たちを見上げながらこう呟いた。

「オールマイトがいない……なら、子供を殺せば来るのかな？」

狂気に満ちた笑い声による宣言に、その場にいる全員が総毛立つ。

侵入者用のセンサーは作用せず、少人数しかこの場にいない状況を狙われたのは明らかだ。

そんな状況でも冷静に判断を下し、速やかに行動する事ができたのはやはり二人のプロヒーローたちだつた。

「1・3号は生徒を連れて避難開始。学校に連絡を試せ。センサーの対策もしている敵ならそつちも妨害されている可能性もある。上鳴お前も個性で連絡を試せ」

的確に指示を出した上で、相澤はプロヒーロー『イレイザーヘッド』として敵に攻撃を仕掛けるためにゴーグルをかける。

「先生は!? 一人で戦うつもりですか!?」

その生徒はイレイザーヘッドの個性や戦闘スタイルについて、本来はこのような場で戦うものではないと知っていた。

「あの数じやいくら『個性』を消すつて言つても…… イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕縛だ! 正面戦闘は……」

「一芸だけじやヒーローは務まらん。13号! 任せたぞ」

生徒の心配を押し切る様に、イレイザーヘッドは中央広場へと飛び降りる。

そんなヒーローの姿を見た敵たちの中で、射撃を行える個性を持つ者たちが迎撃を行うとしたが、既に個性が消されていたのか発動せず。

逆にイレイザーヘッドが首元に巻いている布によつて引き寄せられ、頭同士をぶつけさせられて氣絶することになった。

その後はただ一人で大衆の中に降り立ち、四方八方から仕掛けられる攻撃をいなし、捌き、逆に隙を見て行動不能にさせていくイレイザーヘッド。

そんなヒーローの活躍を死柄木は忌々し気に眺め、そしてその横に立つ女はいつの間

にかのチャックを開けた状態で楽しそうに眺めていた。

「嫌だなプロヒーロー。有象無象じや歯が立たない」

「うん……うん……動きに無駄が全然ないねえ。やっぱりすごいね本物つて」

感心するように頷いているが、実のところあまり良い状況ではない。

このまま足止めされ続け、生徒たちにあつさり逃げられましたでは困るのだ。

そう思つた黒霧が死柄木へと声をかけようとした所で、女が黒霧に声をかけてきた。

「ねえ黒霧さん」

「何ですか？ ジエスター」

「遊んでもいい？」

「……ええ。私が動くために気を散らしていただけると助かります」

「りょうかーい♪」

空気を読んだ……わけではないのだろう。

ここ数日の間にあの少女……今はジエスターと名乗つている女性の気まぐれな所は黒霧と死柄木の知るところとなつていて。

だから今回も、ただなんとなくウズウズしたとか、そんな理由のはずである。

「あつはあーつ！」

狂つた笑顔を浮かべたジエスターが奇声をあげながら突撃し、イレイザーヘッドに向

けてまるで男のような太い腕を振り上げる。

その異常な速度の攻撃を何とか回避したイレイザーヘッドだが、同時に黒霧の姿が中央広場から消えたことに気付いて舌打ちをした。

絶えず気を配っていたはずの相手をまんまと逃がしてしまい、案の定その姿が生徒たちの前にワープしていたからだ。

「まずいな……」

本来なら救援に行くべき状態でも、今のイレイザーヘッドは足止めを担つてゐるためそれはできない。

ここで一瞬でも隙を見せれば、それは状況をより悪化させることであるとわかつているのだ。

故に、いくら不安であつても同僚の13号と生徒たちを信頼するしかない。

「あははははっ！」

そんな胸の内を察して、ジエスターは嗤う。

唇の端についたチャックの金具を揺らしながら、左右で色の違う頬を引きつらせながら笑い声をあげる。

そのあまりの不気味さに周りのヴィラン達すら鳥肌を立たせる中、ジエスターはレイザーヘッドに再びの攻撃を仕掛けた。

「そらそらく一らえつ！」

「ぐつ……！」

短いジーンズから伸びたツギハギだらけの足から恐ろしい速度で蹴りが放たれ、回避しきれなかつたイレイザーヘッドの肩を打ち抜く。

そこで体勢を崩したイレイザーヘッドもなんとか蹴りを放つて距離を取るが、彼の受けたダメージは甚だ。

何よりも問題なのが、既にジエスターに対して『個性を消す』個性を発動しているということ。

それなのに異常なほど速度とパワーを発揮し続いているジエスターは、素でそれだけの能力を持つてているという事になるのだ。

そんなのを相手にしながら周りのヴィランも抑えきらないといけないというのは、戦闘経験豊富な彼にとつても初めての経験だつた。

「つらそうだなあイレイザーヘッド。個性が通じなきやそんなものか」

戦闘経験の差では圧倒しているにも拘わらず、単純なスペック差のみで躊躇されそうなヒーローを見て死柄木は嗤う。

ジエスターの中身が戦闘技術なんて欠片も持たない少女だと知っているからこそ、余計におかしくてたまらない。

そうやつてひとしきり嘲笑つた後で、出入り口付近で行われる黒霧の様子を伺つた死柄木は目元を擦つてから口を開いた。

「さて……そろそろトドメといくか」

オールマイトというメインが来ていない以上、生徒の抹殺が第二目的。

故に愉しむのもこゝらで終わりにしようと、死柄木は自らの隣に立つ黒い巨漢に向かつて指示を出す。

「行け、脳無」

蹂躪しろ。

そんな合図が出されると同時に、意思なき改人が既に手一杯のイレイザーヘッドに向かつて飛び掛かつた。

第8話 U・S・J 襲撃 中編

ヴィラン襲撃を受けて施設から退避しようとしていた1—A生徒たち。

しかし退避する前に黒霧と名乗るヴィランからの妨害を受けてしまい、個性によつて生徒たちの半数がU.S.J内の各災害エリアへと散り散りに飛ばされてしまう。

そうして飛ばされた生徒たちは、事前に配置されたヴィランたちとの戦闘を余儀なくされていた。

その内の一人、緑谷出久は同じ水難エリアへ飛ばされた蛭吹梅雨と峰田実と協力することで、いち早くヴィランたちを行動不能にする事に成功していた。

彼らはまずは救援を求めるべきだと判断し、イレイザーヘッドが戦闘を行つてゐる広場を避け、水辺に沿つて出口まで向かうつもりだつた。

しかし、初めてのヴィランとの戦いで勝利した事で得た驕りと、大勢に囮まれてゐる自分たちの担任を助けられないかという思いが、彼に『広間で起きている戦いの様子を窺う』という選択肢を取らせてしまう。

その結果、緑谷たちの目には淡い希望を塗りつぶすほどの絶望が映ることになる。

「相澤、先生……」

緑谷たちが水中に身を隠れながら少しだけ距離を詰めるまでの間、イレイザーヘッドはヴィラン達を捌くことができていた。

ただ一人、全身ツギハギの女ヴィランの攻撃だけは何度も受けていたが、それにしたって致命的と言えるほどのものはない。しかも何度も攻撃を受けている内に動きか速度に慣れたのか、攻撃を避けながら反撃を行うといった対処も行えるようになつてていた。

「ケロ……」

問題は、全身に掌を纏う男が『脳無』と呼んだ黒い巨体の大男が動き出してからだつた。

ツギハギ女を更に超えた速度とパワーを持つ脳無は、女の攻撃への対処を行つて体勢が崩れかけたイレイザーヘッドに猛然と突進し、その巨大な腕でイレイザーヘッドの頭を殴りつけたのだ。

「お、おい緑谷……これもう、逃げなきや……」

それからは戦いですらない、処刑が行われる事になつた。

地面に倒れ伏したイレイザーヘッドの上に大男がのしかかり、抵抗をしようとした瞬間に右腕を掴んでへし折つたのだ。

ツギハギ女はそれを見て笑い声をあげ、猛烈な勢いの蹴りをイレイザーヘッドの左足

に放つて鈍い音を響かせる。

続いて頭を地面に再度叩きつけ、今度は腹に蹴りを入れ……そんな破壊を楽しんでいるようにしか見えない彼らに緑谷たちは恐怖し、動く事ができないでいた。

そんな時、黒霧と呼ばれていたヴィランが彼らの前に姿を現した。

緑谷が思わず入り口の方を見れば、そこに漂っていた黒いモヤが消滅している。

何かあつたかと思つた緑谷たちの耳に聞こえてきたのは、『生徒たちの一人が逃げた』『ゲームオーバーだ。もう帰る』という言葉だった。

「やつ、やつたあ！ 助かるんだ俺たち！」

「ええ。でも……気味が悪いわ緑谷ちゃん」

「うん……これだけの事をしといて、あつさり引き下がるなんて……何を考えてるんだ？」

危機が去ることに喜び暴走した峰田を抑え込みながら、ヴィランの意図を不気味に思う緑谷と蛙吹。

そんな彼らの前で、事態は悪い方向へと進んでいく。

「死柄木さーん。私ちよつとやりたいことあるんですけどいいですかー！」
「……手短にしろよ」

「はーい！」

呑気な声をあげてレイザーヘッドの前に屈みこむツギハギ女。

様子が気になる緑谷だつたが、既にそんな事を気にしている状態ではない事に彼はまだ気付いていなかつた。
 「うん……少しくらいは傷跡を残して帰らなきや。平和の象徴、その矜持に、少しくらいは——なあ？」

緑谷はさつさと逃げる判断をするべきだつたと、この全てが手遅れになつた状態で悟つた。

この死柄木と呼ばれた男の個性は不明だ。

しかし今、不穏な言葉と共に瞬時に近づいてきた死柄木は、蛙吹の顔に手を伸ばして触れようとしている。間違いなく、手で触れることで発動する何らかの個性を持つているはずだ。

後悔も行動も何もかもが間に合わないままに死柄木の掌が蛙吹に触れ……何も起きなかつた。

「おい、レイザーヘッドで遊んでるのか？」

「あ、すいません。ちょっと頭を持ち上げたらまだ意識残つてたみたい。すごいねー」

「……用があるならさつさと済ませろ」

「はいはーい」

ツギハギ女の声と共に、レイザーヘッドの頭が地面に叩きつけられる音がする。

それを聞いて仲間を守るために拳を振りかぶった緑谷だが、その攻撃は死柄木が呼び寄せた脳無によつて防がれてしまう。

そしてレイザーヘッドの前にただ一人残つたツギハギ女の声が、遠くにいるはずなのに妙によく聞こえた。

「ねえ知ってる？ 眼球の裏側つて神経で脳みそと繋がつてんだって。私、教科書でそれの絵は見たけど実際にどうなつてのか見たことないんだあ」

唐突にそんな事を言い出した女の指が二本、再び頭を持ち上げられたレイザーヘッドの右の眼窩へと差し込まれている。

よく見れば、女の指が左右でどれも長さや太さがバラバラなのに気付いただろ。

しかし、現在進行形で死柄木と脳無に襲われている緑谷にそんな余裕などなかつた。

「だからね、レイザーヘッド。あなたの目の裏側をちょっと見せて？ 個性を消せる目なんでしょう？ 私、それがすっごく気になるの」

ツギハギ女は既に視神經近くまで指を差し込んでいる。
鉤状に曲げた指に力を懸けようとしている。

それでもレイザーヘッドは——相澤は、間抜けなヴィランが再び頭を上げたのをいいことに、その目で死柄木と脳無を見つめ続けていた。

次の瞬間、多くの事が起こつた。

脳無に腕を掴まれそうになつた緑谷が個性を発動して腕を振り回した事で、その腕に当たつた脳無が数メートル吹き飛んだ。

それを見て再び個性を消されている事に気付いた死柄木は舌を打ち、飛び退りながらツジエギハギス^{タ」}女を睨みつけた。

死柄木の怒りを感じたジエスターは、急いでイレイザーヘッドの右目をくり抜くと、その頭を再び地面へと叩きつけた。

そして——U.S.Jの入り口の扉が大きな音と共に開き、ヒーロー^{オールマイト}が姿を現した。

「もう大丈夫——
私がきた！」

U.S.Jの入り口に姿を現したオールマイトは、中央広場に飛び降りると同時に残つていたヴィラン達を一瞬で蹴散らした。

そして死柄木たちが吹き飛んだ脳無の元に集合している間に、水辺にいた緑谷たち三人を回収してしまう。

すぐに生徒たちをかばうように前に出てきたオールマイトを前に、死柄木は苛立ちを

隠しきれない様子で首元を搔く。

「速いなあ。一瞬でみんなやられた。流石だよ」

目で追えないほどのスピードで動いたオールマイトを見てそう呟く死柄木に続き、ジエスターもまた感心するように口を開いた。

「ホントに速かつたねー。あれがオールマイトなんだ。すごいすげー！」
「……ジエスター。随分軽いですが、アレが標的ですよ^{ターゲット}」

「そんなのわかってるつて！ うん、でもあのくらいならなんとかなりそうじゃない？」
「そうでしょ死柄木んんんふ？ んん！」

「うるさい。チャックを閉じとけ」

「んんんーむ！」

ジエスターの口を無理矢理閉じた死柄木だが、彼女の言葉は聞いていた。

確かにオールマイトは速い。だがジエスターがあのくらいと形容するくらい、特別速すぎるというほどでもないスピードだ。

この襲撃の前に『先生』から教えられたオールマイトの後遺症の重さを、ここにきて死柄木は実感していた。

しかし、その弱体化しているはずのオールマイトが死柄木へと向かって猛然と突進してくる。

オールマイトは腕を十字にクロスした状態から、×印を描く様に一気にその腕を解き放つた。

「CAROLA INA……」

「脳無」

「S_スM_{マッ}A_シS_シH! —— ムツ!? マジで全然効いてないな!?」

自分の攻撃を受けても完全にノーダメージの脳無を見たオールマイトは、それでも執拗に何発もの拳を叩き込んでいく。

そんなオールマイトの無駄な足掻きを見た死柄木は、まるで自慢するかのように脳無の個性の事を口にする。

「効かないのは『ショック吸收』だからさ。脳無にダメージを与えたいたいなら、ゆうつくりと肉をえぐりとるとかが効果的だね……それをさせてくれるかどうかは別として」

「わざわざサンキュー！ そういうことならやりやすい！」

死柄木の言葉を聞きつけたオールマイトは、すぐさま脳無の背後に回り込んで投げを放つた。

その強烈なバツクドロップにより、凄まじい衝撃と土煙が爆発が起きたかのように巻き起こる。

しかし土煙が晴れた所で見えたのは、地面に開いた黒霧のワープゲートを通り、

バックドロップの体勢をしたオールマイトの脇腹に指を食い込ませる脳無の姿だつた。
投げられる寸前に黒霧が動き、本来の計画を実行する機会と見て個性を発動したのだ。

本来の計画、即ちオールマイト殺しのために。

「ジエスター」

「んふ?」

「脳無は拘束、黒霧が実行。お前の役割はなんだつけ?」

「んーつぶは。りょうかいー」

ジエスターの役割はオールマイトに個性を使つてゐる最中の黒霧を守ることだ。

死柄木の言葉を聞いてやつとそれを思い出したジエスターは、すぐさま黒霧の近くに駆け寄る。

そしてオールマイトの危機を見て駆け寄つてきた、顔にそばかすのある少年を殺そ
うと拳を構える。

しかしその拳を放つ前に、横合いから飛び込んできた生徒に蹴りを入れられることになつた。

「つしやらあつ!」

「どつけ邪魔だテメエ!」

「ぐえつ!?」

横合いから攻撃を受けたジェスターはふらついている間に爆発による更なる追撃を受け、あつという間に吹き飛ばされてしまった。

その隙に黒霧は掌から爆発を起こす生徒に押さえ込まれ、どこからか広がつてきた氷によつて脳無も凍結され、オールマイトの脱出も許してしまう。

あまりにも不甲斐ない手下の有様に苛立つ死柄木だが、まだ余裕を崩してはいなかつた。

脳無を倒す手段をオールマイトと生徒たちが持つていなら、一度逃がしてもまだ殺せると思つてゐるのだ。

その証拠に、凍結された体を砕きながら起き上がつた脳無は、既に『超再生』の個性によつて元通りの体に戻つてゐる。

死柄木は脳無に黒霧の上にいる生徒を攻撃させ、それがオールマイトによつて防がれたのを見て口を開いた。

「仲間を助けるための行動さ。お前らヒーローがいつもやつてることだぜ? 他が為に振るう暴力は美談になるんだ。そうだろ?」

そんな事を死柄木が宣う裏で、ジェスターはむくりと起き上がつた。

爆発によつて体の前面のツギハギが解れて無残な有様だが、それを気にすることもな

い。

黒く焦げ血塗れになつたその姿に生徒たちが恐怖するのを見ながら、ジエスターは死柄木の隣に並び立つ。

「俺はなオールマイト！ 怒つてんんだ！ 同じ暴力がヒーローと敵ヴァイランでカテゴライズされて善し悪しが決まる世界に！」

「……」

「何が平和の象徴！ 所詮は抑圧のための暴力装置だろう！ 暴力による解決は暴力しか生み出さないと、お前を殺して世に知らしめるのさ！」

「メチャクチャだな。そういう思想犯の眼は静かに燃ゆるもの。自分が楽しみたいだけだろ嘘吐きめ」

「……なんだ。バレてるのか」

適当な言葉でオールマイトが惑わされるなんてことは勿論ない。

死柄木はただ言つてみようとなんとなく思つただけだが、それでも準備するには十分な時間稼ぎだつた。

救援がいつ来てもおかしくないと黒霧に助言を受けた死柄木は、最後の攻勢に打つて出ることにした。

「脳無、黒霧、オールマイトを殺せ。ジエスターは俺を手伝え。ちゃんとクリアして帰ろ

う

「せつかくアドロップもゲットしたしね！」

胸の谷間からレイザーヘッドの目玉を取り出して一舐めしてから、ジエスターは地を這うように駆ける死柄木に続いて動き出した。

そんな二人のすぐ横で、脳無とオールマイトによる凄まじい殴り合いが始まった。
「オイオイ……ショック吸収つて、さつき言つただろ？」

「そうだな！」

オールマイトが放つあまりの気迫に飛び退つた死柄木の背中に追突し、ジエスターもまた足を止める。

全ての目を引き付ける中で、超パワー同士の戦闘は更に苛烈さを増していく。
「だが。『無効』ではなく『吸収』ならば！ 限度があるんじやないか!? 私対策!? 私の100%を耐えるなら！ 更に上からねじ伏せよう！」

体のモヤを通してワープを発動させる黒霧は、殴り合いで発生する凄まじい衝撃のせいで近づくことができないでいる。

元々脳無がオールマイトを拘束する事が殺す条件だったとはいえ、これではサポートすら不可能だ。

まるで嵐のような戦いの中心で、オールマイトは周りの全員に言い聞かせるように言

葉を紡いでいく。

「ヒーローとは常にピンチをぶち壊していくもの！ ヴイランよ！ こんな言葉を知つているか！」

そして、敵ヴィランを畏怖させ、ヒーローが脳無レフへと突き刺さつた。

自分を鼓舞させるような言葉と共に、今まで最強のパンチ

「P更l u s U向l t r a !!」

第9話 U・S・J襲撃 後編

理不尽な強さを発揮して脳無を撃破してしまったオールマイトの前で、死柄木は恨み言を呟きながら喉元を搔きむしっていた。

「確かに衰えてる……そのハズなのに。よくも俺の脳無を……チートがあ……！」『超再生』と『ショック吸収』という対オールマイト特化と言つていい個性を備えた、素の力も怪物級の脳無。

その脳無を失うという想定外のせいで、死柄木は判断を迫られていた。

もう無理だとさっさと諦めて黒霧のワープで逃げるか、諦めずにオールマイト殺しにチャレンジするかである。

「どうした？　来ないのかな!?　クリアとかなんとか言つてたが……出来るものならしてみろよ!!」

そんな死柄木の迷いを見て取つたのか、オールマイトはそう言つてプレツシャーを掛けてくる。

既に限界であることを悟らせるわけにはいかない彼にとつては、これが時間を稼ぐための精一杯の虚勢だつた。

そんな煽りを受けて更に苛立ちを募らせる死柄木だが、彼の横に立つ二人は至つて冷静であった。

「あんな事言つてるけど……どうするの？ それなりに楽しめたし、もう撤退でもいいと思うけど？」

「ジエスター、確かにあなたの意見にも一理あります。オールマイトが脳無からダメージを受けていることは明らかです。我々が連携すればまだ殺すチャンスは充分にあるのでは？」

「なら……ゴニヨゴニヨ」

「なるほど。それでは……死柄木もいいですね？」

「ハア……いいよ。それでいこう」

何事かを小声で話したヴィランたちの中から、ジエスター一人だけがオールマイトに向かつて歩み出る。

オールマイトはその彼女に對して注意を向けつつも、ワープを持つ黒霧からも目を離さない。

既に満身創痍、口クに動く事すらできない彼には、そうやつて注意を向けるしかできることはなかつた。

しかしジエスターがゴキブリ顔負けの地を這うようなダツシユで近づいて来た瞬間、

オールマイトは黒霧たちから目線を切つてしまつた。

そして、後ろから全てを見た緑谷出久の叫び声が放たれた。

「オールマイト上だ!!」

「ぬっ!?」

声を聴いてオールマイトが地を這うジエスターから視線を戻すと、死柄木が黒霧の背中に向けて右腕を突き出していた。

彼らはちょうどオールマイトからは死角となる位置でワープゲートを開いていたのだ。そしてそのワープゲートの先は、緑谷の言葉の通りオールマイトの頭の上に開いている。

そしてゲートを通つて現れた死柄木の右掌は今にもオールマイトに触れようとしていた。

現状を維持するので精一杯のオールマイトの回避も、彼を救おうと飛び出した緑谷出久の助けも間に合わない……そう思われた時である。

「案外あつけな……ぐつ!」

「あいたアツ!」

その時、U.S.Jの入り口方向から飛んできた銃弾が、オールマイトの頭上に現れた死柄木の右腕と、這い寄る様に接近中だったジエスターの右膝を撃ち抜いた。

ヒーロー

ついに雄英高校の誇る教師陣が救援へとやってきたのだ。

その中でも遠距離からの銃撃を得意とするヒーローであるスナイプは、次々に銃撃を行い、ヴィラン達の行動を縛ろうとする。

しかし、その足止めが上手くいくことはなかつた。

ヒーローたちの姿を確認するなり、黒霧は即座に己の体をワープゲートに変えており、ジェスターは膝を撃たれているにもかかわらずそちらに向かつて全速力で駆けだしていて、死柄木に至つてはもう体半分がゲートの向こう側に消えている状態だったからだ。

「ほら！ やっぱりダメだつたじゃん！ 逃げよ逃げよ！」

「そうだな。今回はゲームオーバーだ。帰ろう」

「しかし驚きました。『いつでも逃げられる状態で嫌がらせをしよう』とは、意外と考えが回るのですね」

「いや、それほどでも」

「……喋つてないでさつきと走れ」

死柄木は一足早く姿を消し、それを追うようにしてジェスターもまた飛び込むようにして黒霧のワープゲートの中に姿を消す。

最後に一人残つた黒霧も、まるで霧散するかのようにその場から姿を消した。

「逃げられた……」

誰かが呟いたその一言が、妙に大きくその場に響き渡っていた。

「いやー楽しかった！」

死柄木たちが拠点とするバーにて、元の姿に戻つた憑城庵ジエスターはオレンジジュース片手に満面の笑みを浮かべていた。

オールマイト殺しは失敗したわけだが、それはそれ。

作間に用意してもらつた『特別製の体』を全力で動かし、ついでに視線を集める中でヒーローを虐めるという体験ができたため、概ね満足していた。

とはいえ、もちろんそれは彼女だけだ。

「へラへラ笑うなよ……手下どもは子供相手に瞬殺。脳無は弱くなつてのはずのオールマイトに吹つ飛ばされた。どうなつてるんだよ先生」

『そうだねえ。一言で言うなら聊か見通しが甘かつたかな』

『うむ……舐めすぎたな。ヴィラン敵連合なんちうチープな団体名で良かつたわい』

死柄木は痛む右手を抑えながら、テレビ越しに『先生』と『ドクター』に報告を行つていた。

その顔は苛立ち、不満、様々なネガティブなものに満ちているが、それでもきちんと

報告するのは彼が報告相手を慕っているが故だろう。

そしてオールマイト並にパワーのある少年の事や、庵がイレイザーヘッドの目玉を抉り取つた事まで話したところで空気が変わつた。

『ふむ……子供……オールマイト並ねえ』

『目玉じやと!? ワシはそつちの方が気になる! 見せてくれんかジエスターちゃん!』

「うわーおじいちゃん大興奮。はいこれ」

既にジエスターとしての肉体から目玉を回収していた庵は、小瓶に入れていたそれをポケットから取り出すと黒霧に手渡した。

黒霧がその小瓶を懐にしまうのを見て、ドクターは急かす様に声をあげる。

『黒霧! 早くそれを持ってこつちに来るんじや!』

「わかりました。ジエスター、あなたはどうしますか? 先にあちらの店に戻した方がよいでしようか」

「え? んくと……」

現在、理想郷には作間がいないため、ぶつちやけ戻つたところで暇でしようがない。

それでも一応自室に行けばゲーム機などで時間を潰せるのだが……ここで死柄木の方を見た庵はある提案をすることにした。

「じゃあ店に戻つて死柄木さんの手当をしてあげますよ」
「……は？」

「ほら、私誰も殺せなかつたしそこまで役に立つてなかつた感じでしょ？　だからその掌の手当をしてあげますよ！」

憑依した状態で膝を撃たれた庵と違い、死柄木の怪我は今も死柄木の体に残つている。

死柄木としてもさつさと先生のところに戻つて治療させてもらおうと思つていたことであり、わざわざなんで庵に手当してもらわないといけないのかと思つていたのが、ここで予想外の所から彼女の発言を後押しする言葉が放たれた。

『そうだね……せつかくだ。お世話になるといい、弔』

「先生！？」

『ジエスター。理想郷にある手術室か何かを使うのだろう？』

「え？　はい。よくわかりましたね」

『わかるとも。弔、きつと面白いものも見れるはずだ。ここはジエスターの招待を受け
るといい』

「……わかつたよ、先生」

何かの思惑があることを匂わせる先生の言葉を聞いて、死柄木は黙つてそれに従うこと

とにした。

黒霧がワープゲートを作り出し、それをくぐる前に死柄木はジエスターに言う。

「おい、マトモな手当てくらいできるんだよな?」

「もちろん! 人の体を切つたり繋いだりはもう何百回もやりましたから!」

「……ジエスター、切るのはやめてください。死柄木をお願いしますよ」

「はーい」

あつという間に理想郷の店内に到着した庵と死柄木。

黒霧がワープゲートを通つて消えていくのを見送ると、庵は先導するように地下への階段を下りていく。

庵の部屋を通り過ぎて更に奥へと進むと、そこには厳重な扉に守られた実験室があつた。

「到着でーす!」

「……へえ、こりやおもしろい」

死柄木は部屋の中を見回して、思わずそう口にしていた。

最初に彼の目を引いたのは、壁際に設置された装置の中に並ぶヒーローたち。エンデヴァー、ベストジーニスト、ミルコ、エツジショット、リューキュウ……ランキンギに載っている者たちの姿があるが、どれも片腕を切り取られたり皮膚を剥がされ

た無惨な姿を晒している。

逆側の壁には死体安置所のキャビネットのようなものがあり、引き出しの一つ一つにヒーローの名前が書かれている。中身を見ずとも想像ができるというものだ。

そして部屋の中央に設置された手術台に置かれているのは――

「オールマイト、か」

「あ、ごめんね。すぐにどかすからそこに座つて……」

「いや、俺がやる」

「あつ」

U.S.Jでは結局個性を使う機会に恵まれなかつた死柄木は、手術台に横たわるオールマイトの人形を掴むことで個性を發揮した。

五指が触れたその瞬間から、鍛え抜かれた肉体に崩壊が広がつてボロボロと崩れ落ちていく。

そして幾らかもしないうちに、手術台の上に存在していたオールマイト人形の姿は消え去つていた。

「思つたより気分がいいな。これ」

「わかつたから手当てしましようよ死柄木さん。そこ座つてください」

邪魔なものを片付けた手術台に死柄木を座らせ、庵は死柄木の右腕に雑に巻かれた包

帶を解いて治療を開始する。

撃たれたとはいえ、銃弾は骨からは逸れており、傷跡は肉が抉れて深い切り傷のような状態になつていた。

そんな傷を、庵は手際よく処置し、縫合を行つていく。

「なんだ。ただの馬鹿じやなかつたのか」

「うつわ酷い！ そんなこと思つてたんです!? こう見えてできる子なんですよ私！」

「ハハハ、そりや悪かつたな」

機嫌がよくなつた死柄木とお喋りをしながら手を動かした庵は、二十分もしないうちにその治療を完了させた。

そして消毒を行つて包帯を巻いている最中、ふと大事なことに気付いた。

「……死柄木さんがオールマイトの人形を壊しちゃいましたけど、これ私が後で怒られるんじやないですか？」

「そうだな」

「ええ〜!? ちょっと理不尽すぎません!! 壊したのはあなたでしょ！」

怖いだけでなく面白い印象を死柄木に見た庵は、その後も部屋で行われた実験についてなどをネタに楽しくお喋りをして時間を過ごした。

しばらく経つて黒霧が迎えに来てお開きになるのだが、そこで庵はカレンダーを見て

何事かの確認を行う。

そして最後に、死柄木へと一つの提案を行うのだつた。

第10話 報告会

I・アイランドでの仕事を終えた作間が帰ってきたのは、庵が敵連合の一員として雄英高校に襲撃を行つて十日後のことだつた。

「やっぱりオールマイトを殺すのは失敗したわけか」

「そーなんですよ。やっぱNo.1ヒーローは違いますね」

作間はまず最初に庵から襲撃についての顛末を聞いていた。

失敗することは予想できていたので特に驚くことはないのだが、それでも気になることは幾つもある。

まずは自分の作品についての事だ。

「それで？　お前が憑依した試作品3号はどうだつたんだ？」

「すつごい快適でしたよ！　あれだけ気持ちよく体を動かせたのは久しぶりでした！」

雄英高校襲撃時、庵がジエスターと名乗つて憑依していたツギハギの肉体。

あれは端的に言えば、複数のヒーローの肉体からより優れた部位を寄せ集める事で作間が作り出した合成人形である。

作間には特別優れた医学の知識などないのだが、個性を用いる事で神経や筋肉などの

接合を行うことができるのだ。

表面上に見えたツギハギは、それをより強固にするための補強跡だった。
「だが、ヒーローをゴリ押しで倒せるほどではない、か。まあ中身が戦闘経験ゼロじや無理があるか」

「でもパワーもスピードもすごかつたと思いますよ？」

「そりやまあ今回のベースはミルコを使つてるからな。動物系の個性を持つてゐる奴は肉体も強固で使いやすいんだが……根本的に見直す必要があるのかもな」

庵から聞いた脳無のスペックを聞いた作間としては、自分の作品に力不足を感じざるを得なかつた。

ベースをミルコに据え、オールマイトを始めとしたヒーローの優れた筋肉を体内に圧縮して詰め込んだ事で高めた身体能力は、トップヒーローにも通じると予想していたものだつたのだ。

たとえ中身が庵であるとはいゝ、抹消という個性が機能していないレイザーヘッドに苦戦するのは想定外であり、そんなレイザーヘッドを身体能力のゴリ押しで瞬殺した脳無もまた想定以上のものだつた。

「俺もヒーローを甘く見てたつて事だな。今度は脳無とやらと同じくらいのスペックは目指さないと通用しないってわけだ」

「見た目があの筋肉達磨みたいになるのは嫌なんだけどなー」

「贅沢言うなよ。ま、あまりデカくても邪魔になるから少しほは考えるが……脳無が持つてた個性は『ショツク吸收』と『超再生』でいいんだよな？」

「さつきも言つた通り、私が知つてるのはそれだけだよ？」

「脳無の驚異的なスペック以上に、強力な二つの個性を併せ持つてることについて、作間はどうしても気になることがあつた。

「ぶつちやけその二つだけでもおかしいんだけどな……」

「オールマイトイに相性良すぎですよね！ 負けちやつたけど！」

「それなんだよなあ」

脳無の身体能力は改造か何かしたにしても、二つ持つている個性はどう考えてもおかしかつた。

『ショツク吸收』と『超再生』は相手が肉弾戦に頼るヒーローなら正しく最高の相性となる個性だが、そんな都合のいい個性の複数持ちがいるはずがない。

仮にいたとしても、それをこんな計画で使い捨てるような真似はありえないのだ。

つまり、個性を後から付け加えた事が考えられる。

作間もヒーローの優れた肉体を組み合わせて人形を作つてゐるため、その考えに至るのは早かつた。

しかし単純に肉体をツギハギしただけの作間と違い、個性を取つたり付けたりするの
はまた別次元の話だ。

そして作間は、そんな事ができる人物についての噂を義爛から聞いたことがあった。
「思つた以上にヤバい連中かもな。目玉についての交渉もよく考えないとまずいか
……」

「ねえ店長。そんなことより体育祭の事で聞きたいことがあるんですけど」

「そんな事つてお前……いやまあ体育祭も重要か」

そこで庵から体育祭の話が出たため、作間は一度思考を切り替えることにした。

作間が雄英高校の生徒を見る事のできる機会である『雄英体育祭』はもう四日後に
迫っている。

いつまでも敵連合の黒幕について考へてゐるわけにもいかない。

「庵、お前は雄英体育祭についてはどのくらい知つてる？」

「でつかいお祭り？」

「……まあ正解だ。その通り、日本最大級のイベントだな。俺たちにとつて重要なのは、
そのイベントに大勢の人間が集まるつてことだ」

雄英高校の体育祭は、日本においては今や衰退したオリンピックに変わるほどの一大
イベントだ。

在籍する生徒にとつては、多くの人々とヒーローからの知名度を得ることができる絶好の舞台である。

とはいへ、そこらへんの事情について作間に興味はない。

作間にとつて重要なのは、一般人が雄英高校の敷地内に入つて生徒たちの姿を直に見ることができる数少ない機会であるということだ。

「なるほど！ そこで一般人に紛れて潜入して、学生のドールをいっぱい作っちゃうんですね！」

「大正解だ。それでまあ潜入方法についてだな」

作間は庵に雄英体育祭への潜入方法について説明した。

とはいえてここまで特別な事をしなければならないわけではない。

庵は一般人の肉体に憑依し、作間は一般人の顔を作つて自分の顔に張り付けるだけだ。

「ただ今回は敵連合のおかげでセキュリティが強化されてるだろうからな。それに加えて身分証などもキツチリ用意していくつもりだ」

「そんなものどこで用意するんです？」

「庵、お前が思つてる以上に雄英高校の生徒つて存在には価値があるんだよ。その人形ドールを作るためには協力も惜しまないっておっさんが名乗り出てくるぐらいにはな」

作間は以前からこういう潜入を行う際の保険として、顧客から偽造された身分証を受け取っていた。

今回もそれと同じだ。

雄英高校のドールを欲しがる顧客から、予備も含めて五つの身分証を用意してもらつていた。

「まあ庵だけが潜入するなら憑依すればいいからこれもいらぬいんだろうが、こればつかりは俺が直接見ないと意味がないからな」

「当日は私もついていくんでしょ？ 好きにしてていいの？」

「一度セキュリティを通れば後はよほど変な事しなきや大丈夫だろうし、普通に体育祭を楽しんでいいぞ。出店もあるみたいだからな」

「いやつたー！ 店長大好き！」

飛び跳ねて喜びながらそんな事を言う庵だが、屋台について思いを馳せている内に何かを思い出したらしく、作間へと向き直った。

「そういえばさつき言いかけてた事なんだけどー」「

「なんだ？」

もじもじと言いづらそうに言葉をつまらせる庵に、作間は猛烈に嫌な予感がしていた。

思わず顔を歪ませる作間に向かって、庵は既に約束してしまった事を申し訳なく思いながらそれを口にした。

「あのね。死柄木さんも連れて行くつてことになっちゃつた。体育祭に」

「……はあ!?」

「雄英体育祭……こんな糞みたいな祭を見る意味なんてないだろ」

「そうでしょうか。今回の失敗は子供を甘く見て情報収集を怠つた事でした。そういう意味では無駄ではないと思ひますが……」

「そんなもんテレビで十分だろ。だいたい、あのイカレ女にまともな侵入手段なんて考え付くのか?」

「そこは店長の作間が用意していると思ひますが……」

拠点であるバーのカウンター席に座り、死柄木は黒霧に対して愚痴を漏らしていた。

結果的に庵からの誘いに乗ることにはなつた死柄木だが、彼本人としては直接体育祭を見に行くことの意味はよくわかつていない。

ただ、そうした方がいいと言わされたから従うだけだ。

「だいたい——」

『意味はある。そういうたはずだよ、弔』

「……先生」

そんな死柄木に声をかけてきたのは、彼の体育祭見学を決定した本人である『先生』だった。

最初に庵からの誘いを即座に断つた死柄木は、拠点に戻つてすぐ先生にその誘いに乗る様に言われたのだ。

『幸い、襲撃の際に負った怪我は軽傷だ。暇つぶしと思つてでも行くといい』

『あんなの見てて不快になるだけだ。先生だつて……』

『見たくないものと見なければならぬものは別だよ。あれは今、君が見なればならないものだ』

尚も不満を漏らす死柄木に、先生は諭すように告げる。

『今回、襲撃を失敗した事で君が覚えた苛立ちの正体、それを探るために必要な事だ』
「……』

『弔、己が躓いた存在がどういうものか。直接目で見て、肌で感じてくるといい。君ならそれを飲み込み、糧にしてくれると私は信じている』

偽りなく信頼を向けるようなその言葉を聞いて、ふてくされる様に考え込んでいた死柄木が顔を上げる。

その顔には先ほどまでの不満はなく、澀んではいるが確かな輝きが瞳に宿っていた。

「わかつたよ、先生。まあ、つまらなかつたらストレス解消はするかもしれないけどな」「それもまた一つのやり方ではある。でも、仲間に迷惑はかけないようにね。これからも付き合いは続くのだから』

「ああ……それもそうか。作間つてのには会つた事ないけど、あの馬鹿よりマシかもしれないからな」

死柄木が知る作間の情報は、理想郷の店長であり、あのふざけた商売を始めた男であるという事だけだ。

その時点でなかなか面白そうなイカレ野郎とは思えるのだが、ジエスターの上司であるという点でちよつとマイナス補正がかかっている。

現状、作間という人物は死柄木の中では割と微妙な評価だった。

「社会のゴミとクズが集まる博覧会だ。そう思つて楽しもう。それでいいんだろ？ 先生」

『……ああ。それでいい。楽しんでおいで』

気持ちを切り替えた死柄木は、こうして理想郷の二人と共に雄英体育祭の場に赴くことになつた。

果たしてこの行動は、敵連合の行く末にどのような変化を齎すのだろうか。

それはまだ、誰にもわからない。

幕間 レアアイテムの行方

U.S.J.襲撃事件が起きた翌日、雄英高校の会議室では先日の事件の報告会議が行われていた。

会議の場には事件の当事者である雄英高校の教師たちと、警察関係者としては刑事の塙内が出席していた。

「ヴィラン連合と名乗るものたちについて警察の方で洗つてみましたが、主犯格であろう死柄木弔、黒霧、ジェスターの三名に関する情報はあまり得られていないというのが現状です」

塙内が手元の調査資料に目を落としながらそう言い、席についているヒーローたちも同じように資料を見る。

彼らの手元にある資料には、対峙した生徒たちや三人のヒーローからの聴取から得たヴィランたちの情報が記されている。

ただし、U.S.J.内のセキュリティシステムが妨害を受けていた影響か、そこにヴィランの姿を映した写真などはない。

「死柄木とジェスター、この二名の個性は不明のままであるため、黒霧の持つ『ワープ』

の個性について個性登録を洗つてみましたが、該当はありませんでした。おそらくは戸籍、かつ偽名の個性届を提出していない裏の人間でしょう」

本来なら義務教育である小学一年と中学一年時に個性の一斉診断が行われるため、その際に『個性届』を提出して、国にその情報が保管されているのが当たり前だ。

その個性届がない以上、戸籍などがなく義務教育すら受けていない裏の人間である事が考えられる。

これは非常に厄介な事だ。

ある程度の年齢になつてからザイランとなつた人間と違い、あらゆる情報を得る事が難しくなるのだから。

「厄介だな……結局奴らには口クに怪我も負わせられなかつた。ジエスターと名乗つた女は膝を撃てたが、死柄木とかいう主犯は腕だけだ。またすぐに動いてもおかしくないぞ」

そう言つたのは優れた射撃能力を持ち、敵連合へ銃弾を浴びせた張本人であるスナイプだつた。

元々逃げ腰だつた相手とはいえ、不意打ち気味の射撃でそこまでダメージを負わせられなかつた彼は責任を感じていた。

とはいえる、そこは仕方がない部分もある。ワープという侵入・撤退に最適な個性を持

つヴィラン複数への対処なんて、そう簡単にできる事ではないのだ。

「スナイプが膝を撃った、そのジェスターというヴィランの事だけど。資料によると、まるで他の人間の体を繋ぎ合わせたように見えたらしいね。これは本当なのかい？」

続いてそう疑問を呈したのは校長の根津だった。

調査資料のジェスターの項目について、幾つか気になる事があつたらしい。

そんな疑問に対し、塚内はすぐに答える。

「はい。意識を取り戻したレイザーヘッドから少し、彼との戦闘を横から見ていたと
いう生徒からも聞き取りができました」

「この資料がそうだね。顔の肌色が左右で違う、腕の太さが左右で違う、指が一本一本太
さがバラバラ……うん、これは異常としか言いようがないね」

「聞くだけでもうゾーっとしちゃうわね……いや、ちょっと待って？ それって……」

根津が読み上げた資料の内容を聞いてミッドナイトは露骨に嫌な顔をするが、途中で
何かに気付いたように資料に目を走らせた。

そんな様子を見て頷いた根津は、きつとミッドナイトが気付いたであろう懸念につい
て口にする。

「問題はジェスターの戦闘能力と、そこから予測できる個性さ」「
と、言いますと？」

「資料に書いてある相澤くんの所感では、『間違いなく素人だが身体能力で押された』とある。となれば、その姿から考えても体を組み替えるなどの個性を持つてていることが考えられるね」

「確かにそれは予想できましたが、それが……あつ！」

根津が自分の考えを明らかにすると、隣に座るオールマイトも何かに気付いたかのように声をあげる。

同様に他のヒーローたちが何かに気付くような様子を見せる中、オールマイトはついにその懸念を口にした。

「まさか、レイザーヘッドの眼を自らに!?」

「……可能性はないとは言い切れないね」

「シット！ なんてことを！」

資料では、ジエスターは脳無に捕まつたレイザーヘッドへと執拗に攻撃を繰り返し、意味不明な言動をしながら彼の眼を奪つたと書かれている。

その行動が衝動的なものかそうでないのかは不明だが、予測される個性の通りなら非常に危険だ。

「もちろん目を移植しただけで個性を使えるようになるとは思えない。でも、そうやって気に入った体の部位を奪つていくようなヴィランなのだとしたら非常に危険だよ」

「確かに……ただ、危険度で言うならあの死柄木という男の事が私は気になります」

その危険度を言葉に表して注意喚起をする根津に続いて、オールマイトもまた資料を手に主犯として考えられている死柄木の事を口にする。

「死柄木自身は結局個性を使うことはなかつたが……それは結果論。この大胆な襲撃そのものも、そして死柄木が見せた言動や行動も、あまりに感情的な部分が多い」「確かに。対ヒーロー戦でわざわざ脳無とやらの個性を明らかにしたのは、ただ自分の駒を自慢したかつただけのように思えるね」

「それでいて思い通りにならないと露骨に苛立ち、気分を悪くする。以上の事から考へるに、死柄木という人物像は……幼児的万能感の抜けきらない『子ども大人』だ」

オールマイトの出した結論を聞いて皆が納得するように頷いた。

調査資料に載っている死柄木の情報を見れば、教師でもある彼らにもそれが間違つているとは思えなかつたからだ。

そして同時に、ジェスターもまた同じような子ども大人だろうと誰もが思つていた。

終始楽しんでいるような口調に笑顔、他者を痛めつける事にまるで躊躇いのない様は、ある種残酷な遊びをする子供を思わせるものだ。

「問題なのはそんな連中に賛同するヴィランが多い事だ。どれも路地裏に潜んでいるような小物ばかりでしたが、72名ものヴィランが今回その『子ども大人』について来た

「という事になる」

ヒーローが飽和した現代、抑圧された惡意はそういう無邪氣な邪惡に惹かれるのかかもしれない。

そんな塚内の言葉はある真理をついていたのか、その言葉に反対するヒーローの姿はない。

もしかしたら、彼らは今回の事件が始まりでしかない事に気付いていたのかも知れない。

「おお……これは素晴らしい！　こんな実験材料サンプルを手に入れてくれるとは！　全く期待以上の働きじゃ！」

液晶画面の光だけが辺りを照らす中、老人の歓喜する声が響く。

カタカタとうるさいくらいにキーボードが鳴り、せわしなく体を揺らす老人はこれ以上なく上機嫌であることを全身で表していた。

そんな老人の背後に現れた男は、それを気にせず画面に没頭する老人に声を投げかける。

「随分と嬉しそうだね。ドクター」

「先生か！ そりやそうじやろう！ かねてから欲しいと思つとつたサンプルじや。超再生なんか目じやないほどのレア個性じやからな！」

ジエスターの持ち帰つたイレイザーヘッドの眼球。

視界に映つた対象の個性を抹消するという個性の大本であるそれを手に入れたドクターは、それからずつとデスクに囁り付きで研究を行つていた。

現在彼が行つているのは、なんとかして眼球に個性を発動させるための電気信号のパターンを把握する実験だ。

「やることは脳無と同じじや！ 目だけというのは難点じやが、既に人工頭脳に視神経を繋いで信号を送れるようにはしてある！ そう長くはかかるんわい！」

「あとは発動させるために脳からどのような信号が送られているかの割り出し、といったところかな？」

「その通りじや！ その他にも解明すべきことが多すぎる。複製して脳無に組み込むのもまだまだ先になるじやろうな！」

「ふむ……それなら間に合いそうだね。その調子で頼むよドクター」

先生からのその言葉を当然のように受け止めて、ドクターは更に目の前の研究へとのめり込もうとし……その前に何か思い出したかのよう振り返つた。

「そういえば先生に一つ言つとくことがあつたわい」

「何かな？」

「このプレゼントを持つてきてくれたジエスター、その上司の作間の事じや。生意氣にも黒霧を通して報酬を要求してきおつたわ」

「へえ……」

オールマイトの肉体を始め、数多くの検体を提供してきたドクターのお気に入りのことは、当然先生の記憶にも残つている。

その男が報酬を要求した……となればあまり良いイメージはないが、ドクターの顔が喜色に溢れているのを感じた先生はその考えを撤回する。

「僕に言う前にもう対応したんだろう？」 どうしたんだい？」

「その報酬の内容がアドバイスが欲しいなんてかわいいもんじやつたからな。二言、三言だけ改善点を書いて送つてやつたわい」

「それはまた珍しいねドクター、キミのお眼鏡に適う何かがあつたのかな？」

「うむ。今回ジエスターの体じやつたものを貰つたからのう。まだまだ技術不足とはいえないなか面白いものを見せてもらつたわい」

そう言つて右を向いたドクターの視線の先には、数日前にジエスターの肉体として使用されていたツギハギの体がカプセルに保管されていた。

その体には早くも解剖した跡があり、ドクターの興味をそれなりに引いた事が窺える。

そうして解剖することによつて得た改善点をあつさりと教えるあたり、ドクターも『次』を楽しみにしているのだろう。

「これで進歩が窺えるようならなかなか使えるヤツじやと認めてもいいんじやがな」「思つたよりいい子みたいだね。これで弔とも仲良くしてくれるなら僕としても文句はないかな」

ドクターの言葉に同意するかのように、先生もまた頷く。

彼らの考える未来図において、死柄木弔は衝動を持て余す様々な人間を統括する立場になる事が確定している。

だからこそ、それを支えるための『力』が一つでも多く必要だ。

その力の中でも特に、自分にとつてのドクターのような協力者が彼にもできるのならば――

「いずれ確かめよう。今はまだ……」

かつての悪の支配者は、死柄木弔を中心とした未来を思い描く。

その未来が確かにやつてくることを彼は確信していた。

二章 信念の在り様

第11話 一般客の三人組

雄英高校の体育祭当日。

体育祭用に新たに設置された入場検査ゲートの前は、大勢のマスコミと一般の観客たちでごった返していた。

単純にそれだけ規模が大きく人気のあるイベント、というだけではない。

先日の敵ライバル連合による襲撃事件を受けて、入場検査がより厳しく行われるようになつていたからだ。

その場に集まつた人々は多少不満な顔をしつつも事情を聴いて納得し、無事検査を終えた曉には浮かれた顔で屋台が立ち並ぶ敷地内へと足を踏み入れていく。

そんな浮かれた人々の中には、周りの雰囲気にしつかり溶け込んだとある三人組の姿があつた。

「ほらな。特に問題なかつただろ？」

三人組の先頭に立つ男はそう言つて後ろの二人を振り返る。

それは潜入のために自身の顔を別のものへと変えていた作間だつた。

服装もいつものくたびれたスーツではなくジーンズにジャケットというありふれたものへと変え、完全に別の人物へと成り代わっている。

「ああ。案外ザルなんだな。また何かに使えそうだ」

作間の言葉にそう返したのは死柄木弔。

彼の姿もまた、掌マスクを全身に纏つた悍ましい姿ではなくなっている。着ている服こそ上下ともに黒色のパーカーにズボンと怪しげだが、特徴的な白髪は黒髪へ、乾ききつた肌も健康的なものへと変わり、『ちょっと陰気な青年』ぐらいの見た目になっていた。

ただ作間の個性では他人の目を変える事は難しいため、死柄木の赤い目だけはそのままである。

「店長！ 私ちょっと行つていい!?」

「好きにしろよ」

「いやったー！」

そしてマイペースに屋台へと駆け出して行つたのは憑城庵。

今日の庵は目鼻立ちのはつきりした金髪美人の体に憑依しており、半袖のシャツにミニスカートという非常に活動的な姿をしている。すらりとした体は非常に動かしやすいようで、屋台へと向かう足取りはとても軽やか

だ。

そうして歩くたびにスカートから覗く健康的な太ももに視線を集めながら、庵は目をキラキラさせながら屋台の食べ物を物色していた。

そんな彼女を見た死柄木は思わず呟く。

「……いいのか？ 結構目立つてるぞ、あいつ」

「いいんだ。あくまで客として目立つてるのはだからな。むしろ俺たちの隠れ蓑になつてくれる」

「そうか？」

「そうとも。あいつが嘘偽りなく楽しんでる雰囲気を出してくれると、こつちはあいつに連れてこられた二人組を演じるだけで良くなるからな」

今回の潜入における作間の心配事は、もちろん死柄木弔だつた。

事前に話した限りではちゃんと理性的で暴走するなんて事は無いようと思えたのだが、彼が纏つてゐる空気だけはどうにもならなかつたのだ。

そこで悩みぬいた作間が考えたシナリオは、あえてテンション高めの庵を好き勝手に行動させて、自分と死柄木はそんな彼女に連れてこられた友人という立場を取る事だつた。

実際それはこれまでのところ有効で、体育祭へと向かう人々で混雑する雄英までの道

を歩いている間、庵と共にいた死柄木や作間に懷疑的な視線が向けられる事は一切なかつたのである。

「まあゲートさえ通ればそういうのも気にしなくていいと思うけどな。襲撃事件の影響もあつて検査は厳しかつたが、だからこそ検査を通つた人間を疑おうつて思う人間は少ない」

「でも実際こうやつて俺たちの侵入を許してやる。笑えるよな」

「そこは俺を褒めてくれよ。まあ、こここの検査がザルであることは否定しないけどな」二人して雄英の甘さを虚偽にして笑い、弾む会話を楽しみながら目的の場所に向かつて足を進める。

彼らの目的地は『一年生ステージ』の舞台となる巨大なスタジアムだ。そこで今回見るべき対象である『1—A』の生徒たちが競技を行うことになつてゐる。

そうして歩き出した二人と同じ方向へと進む人は多く、それだけ今年の一年生は注目されているのだろう。

その事実に作間はほくそ笑み、死柄木は舌打ちを漏らす。

そんな二人の元へ、両腕に大量の袋をぶら下げた庵が戻ってきた。

「お待たせしました！」

「いや、別に待つてない」

「ええ!? そんな事言わずに見てくださいよ! たこ焼きでしょ? お好み焼きに焼きそばにかき氷にフランクフルトにチョコバナナに、あとサイダー!」

「完全にお祭り気分だな」

「どんだけ買つてんだ……」

「ほらほらちやんと二人の分も買つてありますから! さあ行きましょう一年生ステージ、ほら行きましよう!」

はしゃぐ庵に引っ張られような形で、作間と死柄木はスタジアムへと足を早めた。

一年生ステージの舞台となるスタジアムの中には、既に大勢の観客たちがひしめいていた。

その中にはカメラを持つてゐるマスコミ関係者やコスチューム姿のヒーローも多く、観客席の最前列はそんな人たちによつて大半が埋まつていた。

そして作間たちは、一般客でありながら最前列にいる少数派の集団だつた。

「んーかき氷美味しく!」

「ほどほどにしどけよ。また腹壊すぞ」

「それもそつか。じゃあはい、シガくんにこれあげる」

「いらねえ。店長に食わせろよ」

「えへ。店長食べます？」

「まあ俺は腸内もある程度調整できるからね。しようがない。食おう」

現在、作間たちは観客席の最前列に腰を下ろし、庵の買つてきた食べ物を消化中だつた。

今回は庵が腹を壊したら面倒な事になるため、作間も協力して焼きそばなどを口にしている。

死柄木はたこ焼きなどを差し出された際に口にはしたが、それ以降はサイダーのみ受け取つて知らん顔だ。

ちなみに、『シガ』とは今回の潜入における死柄木の偽名である。

作間は偽装証明書の通りなら『山田』だが店長呼びは変わらず、庵は『イオ』と呼ばれることになつていた。

『待たせたなお前らあ！ 雄英体育祭!! ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトルの始まりだあああ!!』

そして作間がサイダーを半分くらい飲んだ頃、スタジアム上空に大量の花火が上がり始めた。

それに伴つてスタジアム内にヒーロー『プレゼント・マイク』の声が響き渡り、体育祭の始まりを告げた。

そして、お目当ての登場を告げるアナウンスが流れる。

『さあお前ら！　こいつらを見たいんだろ？！ 敵の襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!! ヒーロー科！　1年！　A組だろおおお!!』

青地に白のラインが入ったジャージを着た生徒たちが、スタジアム内に姿を現していく。

アナウンス通り、観客たちの視線は入学早々に話題性抜群となつた彼らにくぎ付けていた。

そんな、視線を向けるのが当たり前という状況の中で、作間はじつくりと彼らを視界に収めていく。

作間は今年入学した雄英の生徒の名前を、事前に貰つたデータによつて把握している。

おかげで記憶上にある生徒たちのデータと、目の前にいる生徒たちの姿を記憶して照合させるのは簡単な作業だつた。

まず、一番に目に留まつたのは八百万百。

特待生の一人だというデータがあつたこともそうだが、作間の記憶に残つたのはその見た目だ。

高校生離れしたそのスタイルの良さとモデル顔負けに整つた容姿は、正しく衝撃的と言るべきものだ。

直接にその姿を見れば、その所作から垣間見える育ちの良さから、その実力からくる自信に満ちている態度もよくわかる。

作間の顧客は元から彼女を知つていてドールを欲しがつていたようだが、金持ちのお嬢様である彼女を以前から知つていたのかもしれない。

コスチュームのデータを貰つた際も、胸元から臍まで丸見えの露出度が非常に高いものだつたはずで、一部の顧客に売り出した時の事を思つて作間はほくそ笑んだ。

他の女子もまたハイレベルだ。

ジヤンルは違えど、みな一様に容姿が整つてゐる生徒たちである。

芦戸三奈という少女は、ピンク髪にピンク肌、頭に触覚というかなり特徴的な姿をしていて、作間はすぐに彼女の事を把握した。

事前のデータでは見た目以外は普通の少女のように見えた彼女だが、実際に見て記憶してみると結構引き締まつた体をしている。

また明るい表情も良く見せてゐる事から、人気が出るであろうことが窺えた。

蛙吹梅雨という少女は蛙という個性を持つ、蛙っぽい少女だ。

事前のデータ上では見た目的にマイナーと思っていた作間だが、実際に見てみれば愛

嬌のある容姿と優しい表情は、実際に見なければわからない魅力に満ちたものであるとわかる。

もちろん作間にとつてはそんなものの自分の商品が売れる要素の一つでしかないわけだが、彼女の評価が高い事は間違いない。

耳郎響香という少女は耳から垂れる長いプラグドールが特徴的だ。

それ以外は、小柄でスレンダーな体形のクール系女子といったところだろう。実際に見た場合とのイメージの差異はほとんどなかつたため、クールな少女を虐めたいという客には売れるだろう、というのが作間の私見である。

麗日お茶子という少女には特徴的な見た目はなかつた。

つまりは普通である。作間が抱いたイメージもまた『普通の少女』というものだつた。ただ、そういう普通の少女にこそ人気が出る事もある。そういう女の子が頑張る姿は人目を惹くものだ。

地味にスタイルが良い事も含め、作間は彼女のドールが案外人気が出るかも知れないと思つていた。

ただ、残念な事もある。

データでわかつていたとはいえ、透明人間の葉隠透という少女を見てもドールを作れない事が改めてわかつたからである。

元々作間には『アレは作れる』『コレは作れない』というのはなんとなくの感覚としてわかるのだが、今回彼女を何回見ても作れるとは思えなかつたのだ。

もつとも彼女のドールを作つたとしても、個性までは再現できない彼のドールでは『透明人間』という長所も消え失せてしまう上に元の葉隠少女と見比べる事も不明なため、需要は少なかつただろう。

一通り眺め終わつた作間は、隣に座る死柄木へとこつそり目を向ける。

隣に座る彼が感情の籠つた視線を生徒たちの誰かに向けている事を察知したためだ。

誰かはわからない。

だが、その視線が憎悪と嫌惡の入り混じるものである事に気付き、作間は急いで死柄木に話しかけた。

「どうだい、A組の生徒たちは。何か気になる事でもあつたかな?」
「……別に? そっちこそどうなんだ? 目的は達成したんだろ?」

「ああ。結果は大満足だよ。みんなヒーロー候補生じゃなくてアイドル候補生つて感じで、こつちとしては嬉しい限りだね」

死柄木の注意が自分に向いたのを確認して、作間は正直な感想を口にした。

最近の女性ヒーローに容姿の優れた人が多い事は事実であり、将来ヒーローになろう

という少女たちの容姿が皆優れているというのも事実だ。

周りに聞かれたら袋叩きにされてもおかしくない発言なわけだが、幸い今は周りの誰もが歓声を上げている。

「ハハハハハツ！ まあ、確かにこんな観客どもに見世物にされてるのはそうだな。言えてるよ」

「楽しそうですねえシガくん。やつとお祭り気分になりきりましたか？」

「ハハハ……そうだな。お祭り気分にはならないが、あいつらの楽しみ方はわかつたよ」「それはよかつた！ あ、たこ焼き食べますか？」

「いらねえよ」

庵に喋りながら生徒たちに再び目を向ける死柄木だが、その視線にあからさまな嫌悪感は見えなかつた。

安堵した作間はほつと息を吐くと、今度はB組の生徒たちにも視線を向けるのだつた。

第12話 唐突過ぎる接触者

体育祭が開幕し、第一種目が始まった。

第一種目は障害物競走ということで、様々な障害物が設置されたスタジアムの外周を走る種目であるとのこと。

そのため生徒たちはスタジアムから外へ向かって駆け出していき、観客たちはスタジアム内にある巨大なモニターを眺める事になつた。

そのモニターの中では、前方に現れた巨大口ボットの群れと戦う生徒たちの姿が映つてゐる。

「あんだけの巨大口ボ準備すんのにどんだけ金かかんだろうな。そんでそれを惜しげもなくぶつ壊す生徒は何考えてんだろうな」

「知るかよ。少なくとも金の事は考えてねえだろ」

「そりやそうだ！　ははは……ん？」

死柄木から思いのほかマトモなツッコミを返されて笑い声をあげる作間。

しかしそんな時、彼のポケットに入れてあつたスマホがブルブルと振動し始めた。

「……変だな」

「なんだよ。ただの電話だろ」
「それはそうなんだが……」

マナーモードで振動を続けるスマホを手に怪訝な顔を浮かべる作間。
このスマホは今回の潜入を決めた時に用意したもので、その電話番号を知っている人
間なんていないはずなのだ。

知つているとすればスマホを用意した裏の売人くらいだが、彼らはわざわざ電話を掛
けてくるなんて事はしない。

また面倒な事になりそうだと感じた作間は、仕方なく通話ボタンをタップしてスマホ
を耳に当てた。

「もしもし」

『あら、随分と時間がかかつたわね』

『そりや悪かつたな。いきなり電話がかかってきたもんでね』

『そうなの？ それはちよつとだけ悪かつたわね』

作間が耳に当てたスマホから聞こえてきたのは、聞き覚えのない女の声だつた。

理由は不明だが声からはその楽しそうな様子が透けて見えるほど。

そんな女の目的を探るため、作間は口にする言葉に注意をしながら問い合わせた。

「もしかして間違い電話だつたりしないか？ 僕はこのスマホを買ったばかりでな。あ

「んたみたいな美人の声に聞き覚えはないんだが」

『あらありがとう。でも間違い電話じゃないわよ。私はあなたに用があるんだから』
「……なんで俺だと？」

『簡単よ。あなたがここに来る前に色々と準備していたでしよう？　その準備を手伝つた人間の一人が私の仲間だつたの』

どうやら相手も雄英側に会話が漏れる可能性を考えているらしく、電話でマズい単語を出す事はしなかつた。

それにはつと安堵しながらも作間は相手の言うことについて考える。

作間の事を認知しているのはもちろん、彼が顧客に身分証を用意させたことについても知つている可能性が高い。

更に言うなら、その顧客たちの内の誰かが彼女の仲間か、もしくは顧客の部下に仲間がいるのか。

そんなところであり、自分の情報はかなり簡抜けだろうと作間は確信した。

『でもそんなに警戒しないで。今回は私の個人的な取材のために接触しただけだから』

「取材？」

相手の出した唐突な言葉に作間が驚いていると、女は畳みかける様に言葉を並び立てる。

『そう。取材よ。昔から私はずっとあなたと話してみたかったの。ここにきたのは体育祭の取材もあるけど、本命はあなたなのよ』

『そりや……ありがたい事だが。俺なんか取材してもつまらないだろ?』

『そう? とてもそうとは思えないけれど……とりあえず電話越しにやあ話したいことも話せないわね。私は今あなたのずっと後ろ、最後列の所にいるわ。そこで会いましょう』

「俺は取材を受けてもいいなんて言つてないんだが?」

『今後のあなたに色々と不都合な事態になつてほしくないなら、私の言葉に従つた方がいいと思うわよ』

間違いなく作間の商売の事を知つていて、そのことで脅迫を仕掛けてくる女。

この手の脅しは同じ裏社会の人間同士で使うと泥沼の争いになりやすいため使われることは少ないので、当然作間だつてもしも脅された時のためのコネは持つている。だが、今回はそれを判断するには難しい状況だつた。

何より相手が自分の事を知つていて、知らないはずの電話番号を調べられている事、そして相手の事を未だ知ることができていないのが厳しい。

結局作間はその女と直接顔を合わせる事になつた。

モニターの中の生徒をじつと見つめる死柄木と庵に一言告げて、作間は通路を最後列

に向けて上り始める。

そうしてやたらと長い通路を歩ききつて最後列にたどり着いた作間に声がかけられた。

「こんなには。『理想郷』の店長、作間さん」

声をかけてきたのは、青い肌に薄紫のロングヘアを持つ目の色が反転している女性。

作間にとつては見覚えのない女性だった。

「俺をよく知つてるようだが、俺はあんたを知らないんだ。いい加減に自分の名前を言つたらどうだ？」

「あら、めんなさい。私は氣月よ。^{きづき} 氣月置歲。^{きづきちとせ} さあ、こちらへ座つてもらえるかしら？」

聞き覚えのない名前に首を傾げつつも、作間は終始嬉しそうな表情を浮かべる女の隣に腰を下ろした。

警戒を解いたわけではないが、少なくとも危険はなさそうな事が女の雰囲気から感じ取れたのだ。

周囲がモニターの中の生徒たちの様子に一喜一憂して声をあげる中、先に口火を切ったのは作間だった。

「まず聞きたいんだが……なんだつてこんなところで会おうなんて思つたんだ？ 連絡

を取る方法なんていくらでもあるはずだろ？」

「それはそうね。でも、こんなところでもないと何されるかわからないもの。流石に雄英の敷地内で口封じはできないでしよう？」

「……俺がそういう事をする奴だと思つてるのは？』

「氣を悪くしたらごめんなさいね。でも、あなたは人を殺す事を面倒だとは思つても必要なら躊躇わない人でしよう？」

作間が今回用意したスマホの電話番号を調べられるなら、直接理想郷に連絡をつける方がずっと手間がかからない。

そう思つての作間の問い合わせたが、返ってきた言葉は予想以上に作間の事を理解してのものだった。

確かに、理想郷にきた初めての客が作間の事を知り尽くしているかのような発言をすれば、きっと作間はそいつの事をタダではおかないとだろう。

殺すというのは流石に言いすぎな気もするが、個性を使って脳組織をちょっとイジるくらいはやりかねない。

氣月の言つたことはかなり的を射たものだった。

「不思議かしら。あなたの考えが読めてしまうことが」

「ああ。不思議に決まってるだろ。初対面の人間がちよつと俺の考えを読んだくらい

で、俺の事を随分と訳知り顔で語つてゐるんだからな」

「フフ……酷い言われようね。でも、私があなたの事をよく知つてゐるのは事実。まあ、女の子を店員に雇つてあんな事をやり始めた時は驚いたけどね」

そう言いながらも、作間が庵を雇つてアダルトビデオを売り始めたことを楽しそうに喋り続ける氣月。

どうやらヒーローに対しあまりよくなない感情を持つてゐるらしい彼女の口からは、アダルトビデオのネタにされた女性ヒーローに対する侮蔑の感情が見え隠れしてゐた。

そんな彼女を見ていて、ついに我慢ができなくなつたように作間が口を開いた。

「ちょっと気になるんだが……」

「ああ、別にここでは禁止用語を口にしても大丈夫よ。近くにマイクはないみたいだか

ら」

「そんな事聞きたいわけじゃない。俺が気になつてるのはお前の事だ」

「私の事を？」

「ああ。なんでそこまで俺の事を知つてゐる風なんだ？ 流石に気になる」

先ほどからずっと、作間の事をよく知つてゐるように話す氣月。

しかし氣月とは今日が初対面である作間にしてみれば、そんな風に話される謂はれない。

なのになぜ、内面まで知り尽くした知人であるかのようになに彼女が話しているのかが気になつたのだ。

「そう。気になつてもらえたなら嬉しい。でもそんなに大した理由じやないわ」「と、いうと？」

「あなたは私の初めての取材対象なのよ」

「はあ？」

「あなたの『初めての事件』を目にして以来、そこで偶然あなたの姿を見て以来、ずっと私はあなたと話してみたかった。そのためにあなたの情報を集め、分析してきた。あなたの事をよく知っているのはただそれだけの事よ」

そう言い放つた氣月の言葉を聞いて、作間も彼女に対する認識を改めた。

彼女は決して何かの思い違いではなく、正しく作間の過去を知っている者だ。

この時点で、今後関わられないように距離を取るという方針は彼の中から消えた。

「ところで、私も一ついいかしら？」

「なんだ？」

「あなたの名前なんだけど……」

作間が氣月への対処法を考えていると、その彼女の方から声をかけてきた。

別の事を考えていた作間は適当に答えを返し、そしてすぐに氣月の口から聞きたくな

い言葉を聞くことになった。

「今後も作間と呼ばばいいの？ あなたの本当の名前は『間——うぐつ！』

作間が取ったのは反射的な行動だつた。

氣月が言いかけた言葉を遮る様に、作間は肩を組むようにして彼女の頭を引き寄せ
る。

「そこまでにしておけ」

「——ツ！」

そして至近距離から濃密な殺気を浴びせかけながら声をかけると、氣月は顔を青くし
て口を噤んだ。

とても言葉を発する事のできる雰囲気ではない状態がしばらく続くかとも思ったが、
そこで第一種目の競技中だつた生徒たちの一人がスタジアム内に入つてきて、周囲の観
客が歓声を上げる。

氣月はその歓声を聞いて、やつと再起動を果たした。

「あ……その、ごめんなさいね。こんな所で言うべきじやなかつたわ」

「その通りだ。少しデリカシーティーものがいいな」

「ええ。本当に、そうだつたみたい」

未だ少し青ざめた顔で頭を下げる氣月を見て、作間も周囲の様子を伺いながら軽く言

葉をかける。

幸い二人の方を気にしている観客はいない。どうやらあまり目立たずに済んだようだ。

それを確認した作間は、すぐにその場に立ち上がった。

「俺はそろそろ行く。ツレをあまり待たせるのもよくないだろうからな」

「えっ、そんな……もう？」

先ほどまで青ざめていた顔を、今度は焦りでいっぱいにして困り顔を浮かべる氣月。しかしスタジアム内に第一種目を終えた生徒たちが続々と到着し、もはや作間がさつきと立ち去りたいという雰囲気を露骨にしていたため、諦めたように顔を俯かせた。

「わかったわ。今日はこのくらいで潔く諦めます」

「今日、は？」

「今度はちゃんとお仕事として取材を依頼するわ。今回だけじゃあまりにも不完全燃焼だもの」

「なんて厚かましい……だが、仕方ないか」

氣月が作間を取材対象として今後も付き合つていきたいと思つているように、作間にも思惑はある。

結局氣月がどこまで作間の事を知つていてるかもわかつていなし、彼女の言う『仲間』

が顧客関連のものなのか、もつと根深く手広いものなのかもわかつていな

い。それを明らかにするまでは、作間は安心して今後の商売を続けることができないのだ。

故に、少なくとも氣月の裏に誰がいるのかを探るか、彼女が作間を売れないとやうにまでは取材に付き合う必要はありそだつた。

「よう。随分と遅かつたな」

「ちよつと面倒な事になつてな……というかシガ、お前どうした」

作間が最前列の席に帰つてこれたのは、第一種目を無事に通過した生徒たちが第二種目の騎馬戦のチーム決めを行つてゐる真つ最中だつた。

そこで作間が目にしたのは、もはや隠す氣のない悪意に満ちた表情を浮かべた死柄木の姿だつた。

ヤバいものを見たと作間が硬直していると、何も考えていない庵が解説を行つた。

「いやー、さつきもじやもじや君が一位でゴールしてからこんな調子なんですよ。お気に入りなんです?」

「お気に入りなんてフザけたこと言つてんじやねえよ。ただ、一番イラつく奴が一番目立つててイラついてるだけだ」

「んん？　あー、そういうえばあのもじやもじやくん、見覚えがありますね。すごく邪魔だつた子でしたか」

何やら納得するかのように頷いた庵は、死柄木のフォローもせずに再び前を向いてしまう。

それを見た作間は死柄木の隣に腰を下ろしながら、頬に指を立てようとした死柄木に急いで声をかけた。

「頬むからいつもみたいにガリガリ肌を搔くんじやないぞ。変装してることは忘れないでくれ」

「……ああ。わかってる。俺はこのバカみたいに間抜けじやない」

「そうか。うん、頼んだぞマジで」

わかってると言いながらもふと気づけば頬に爪を突き立てようとする死柄木に冷や冷やしながら、作間はもう絶対に彼のそばからは離れないようにしようと思うのだった。

第13話 一欠けらの覚醒

『さア上げてけ闇の声！ 血で血を洗う雄英の合戦が今！ 狼煙を上げる!!』

実況席に座るプレゼント・マイクの声と共に第二種目の騎馬戦が始まり、スタジアム内は再び熱狂に包まれていた。

四人一組となつた生徒たちが己の個性を活かして連携しながら派手に戦いあう姿は、観客たちのボルテージも自然と上げていく。

そんな中、死柄木弔は最前列でそれを見ているにも関わらず、まるで興奮することもなく生徒たちを見下ろしていた。

「シガさんはつまらなそうですねえ」

「実際つまらねえよ」

そもそも死柄木にとつてヒーロー目指して頑張っている子供たちというのは、不快に感じて仕方がない存在だ。

そんな奴らが競い合う姿を見たところでいい気分になるはずがない。

もちろん先生に言われた通り、生徒たちが活躍する場面を見る事でその力量はきちんと認めている。

おかげで先日の襲撃の際に自分が集めてきたチンピラ連中が負けた事に納得はできたが、それはそれだ。

隣で他の観客のように喜ぶ庵のようにはとても振舞えない。

そうして不機嫌そうな顔を隠そうともしない死柄木だったが、そんな彼の眼は先ほどから一人の少年を捉えていた。

「……あのガキ、また目立つてゐるな」

死柄木の視線の先にいるのは、もじやもじや頭の男子生徒。

名前は憶えていないが、死柄木の脳にはちゃんと記憶されている。

U.S.J.襲撃の際に死柄木の目の前で脳無を殴り飛ばした、オールマイトによく似た超パワーの個性を持つてゐるガキだ。

「あの子ですか？　えーっと、緑谷出久でしたつけ

「覚えてるのか？」

「ええもちろん。それより彼、確かに目立つてますよね。さつきも一位でしたし」

庵の言う通り、緑谷出久は先ほどからスタジアム中の注目を一身に集めていた。

第一種目の障害物競争で一位を取り、それによつて第二種目では多数の生徒から狙われる羽目になつたためだ。

今もチームを組んだ生徒の個性を活用してうまく立ち回つてゐるし、死柄木たちの近

くに座る観客たちも緑谷について話している。

彼は今、前評判を覆して最も注目される生徒となつていた。

「ハア……」

死柄木はそれが気に食わない。

ただでさえムカついて仕方がない対象がやたら生き生きと活躍を続ける姿を見るたびに、観客たちがそんな子供たちの姿に一喜一憂して歎声を上げるたびに、体中が痒くて痒くて仕方なくなつてくる。

そんな死柄木が我慢できずに自身の首を搔きむしろうとした時、競技を行う生徒たちに大きな動きがあつたのを見て作間が声をあげた。

「見ろよシガ君。例の子のチームがエンデヴァーのガキのチームとやりあうみたいだぞ」

作間がそう言つて指をさした先では、もじやもじや頭の緑谷出久を担いだ騎馬と、紅

白の髪をしたエンデヴァーの息子である轟焦凍を担いだ騎馬が向かい合つていた。

先ほどまでは標的にされた状態から上手くかわし続けていた緑谷たちは、残り時間が半分を切つたところで遂に轟たちに捕捉されたのだ。

もちろん周りの騎馬もそれを黙つてみているわけがなかつたが、轟たちの騎馬が打つた次の一手によつて動きを封じられることになつた。

「電気で動きを止めて一気に凍らせる。連携も上手いが、それを考えて実行する個人の実力も大したものなんだ。なあ？」

「ああ……面倒な力を持つた糞餓鬼どもでイラつくぜ。本当に」

憎々しげに生徒たちを睨みながら死柄木は言う。

もはや取り繕う気など全くないと言わんばかりのその顔を見た作間は、溜め息を吐きながら死柄木の顔に売店で買っておいたお面を取り付けた。

それは死柄木に有無を言わさぬ早業で、その行動を阻止できなかつた死柄木は半ば呆然とした様子で声を発した。

「何のつもりだよ」

「お前の顔が危険レベルに入つたから隠しただけだ。気にするな」

「ふざけてるのか？」

「ふざけてねえよ。そんな凶悪な面でじつと生徒を見つめたらヤバいってわかるだろ？」

そう言われた死柄木は少しだけ考える素振りを見せる。

彼にも一応負の感情が剥き出しになつていていた自覚はあるらしい。

作間は競技場へと目を向け、轟の騎馬から必死にハチマキを守り続ける緑谷の騎馬を指さした。

「あれが気に入らないのか？　あのやたら必死こいて頑張つてる子供が」

「見ててうざいんだよ。ああいうクソガキは」

「まあ、気持ちはわかる。俺だつてヒーロー目指して必死になつてるガキどもも、それをチヤホヤしてる観客だつて嫌いだよ。でも、ちよつとくらいは表情を誤魔化してくれる」と助かるね」

死柄木を爆発させないように細心の注意を払いながらの言葉だつたが、その言葉に嘘はない。

作間だつてヒーローは好きではないのだ。

もちろん商品として見た場合のヒーローは別だが、単純にその存在が好き嫌いかで言えば嫌いな方だし、それを目指す子供ももちろん嫌いなのである。

それを聞いた死柄木はしばらくじつと動かなくなつたかと思うと、身に纏つっていた剣呑とした雰囲気を霧散させた。

「そうだつたな。悪い悪い」

「……」いつ絶対反省してねえな」

死柄木はしらじらしく謝罪の言葉を口にすると、お面を外して作間に押し付け、すました顔で再び騎馬戦の様子を見始めた。

今度こそ、生徒たちを見ても表情を取り繕えているようだ。

目は負の感情を宿したままだが、死柄木がそこを完璧に隠せるほど大人ではない事くらい作間だつて察している。

故に作間はとりあえずこれで大丈夫だろうと考え、自分も騎馬戦の様子を見る事にした。

『さア残り時間は約一分！　お前ら最後まで気合入れて行けよ！』

マイクがそう告げると同時に、生徒たちの戦いはより激しさを増していく。

それぞれの騎馬が最後の頑張りを見せようとする中、突如として猛烈な速度でダッシュした轟の騎馬が、緑谷の騎馬に急接近してハチマキを奪い取った。

「ハツ」

同時に横から鼻で笑うような声が聞こえ、作間はそちらに目を向ける。

案の定といふか、そこにはご機嫌そうに笑みを浮かべる死柄木の姿があつた。

「あのもじや頭がハチマキ取られてそんなに嬉しいのか？　よっぽどあのガキが嫌いなんだな」

「ああ、嫌いだね。ガキは全部嫌いだが、あいつには特にムカついてる」

「一体全体何がそうムカつくんだ？　俺はこの前の事についてはあんまり詳しく知らないんでわからんないんだよ」

「あのガキに色々と邪魔された。あと個性がアツイを思い出させてムカつく。それだけ

だな」

「おいおい、そりや流石に……」

『TIME UP！ 競技終了だお前ら！ 早速上位4チーム発表していくぞ！』

作間が更に質問をしようとしたところだつたが、スタジアム内に騎馬戦の終了を告げるマイクの声が響き渡つたために断念する事になつた。

競技の結果はほとんど作間の予想していた通り。

実力の高さは明らかである轟の騎馬が一位を取つたが、それ以外の順位では少し予想外な事もあつた。

仲間の機転に救われる形で死柄木が目の敵にしているらしい緑谷出久の騎馬が4位入りして、最終種目に出場することが決まつてしまつたのだ。

「チツ」

「どんまいシガさん。そういう事もあるよ」

「お前は何様だよ」

「私？ 私は女子高生様だよ？ いや、元だつけかな？」

「いやそうじや……もういい。疲れる」

死柄木でさえ呆れる意味不明加減で場の空気を白けさせた庵。

そんな彼女が一見可愛らしげにこてんと首をかしげている間に、死柄木は腕を組んだ

まま目を瞑つてしまふ。

どうやら昼休憩が終わつて午後の部が始まるまでの一時間、何もせずに眠つて過ごすつもりらしい。

「一時間庵と話さなきやいけないのが嫌になつたなこいつ……」

「え？ なんですか店長」

「いやなんでもない……お前も寝ていいんだぞ？」

「嫌ですよ！ さつき見た女の子たちの性格分析とか、私が考えたシチュエーションとか、色々と話したい事があるんですからね」

「んなもんここで話す気なの？ 馬鹿なのかお前？」

現在は昼休憩。未だ熱気が残つているとはいゝ、既にスタジアム内はそこまで騒がしくない状況だ。

そんな場所で『雄英の女子生徒たちをAVに出すとしたら』なんて話題をしたら一発でアウトである。

結局、作間に怒られてしょんぼりした庵はスタジアムの外の屋台へと向かい、作間はその場から動かずに観客席のヒーローたちの姿を記憶したりなどをして時間を過ごすことになつた。

それから一時間が経ち、午後の部が開始された。

まずは全員参加のレクリエーション種目があり、それから第三種目を勝ち上がった16人による最終種目が行われるのだ。

そしてその一回戦は、あの緑谷出久だつた。

「またかよ……頼むからキレるなよ?」

「キレねえよ」

『レディイイイイ、START!!』

作間が死柄木の様子に冷や冷やしている中、試合は始まつた。

緑谷の対戦相手である心操という生徒は洗脳の個性を持つていてるらしく、開幕直後にそれに嵌つた緑谷が動きを止める展開になつた。

しかし、突如として緑谷の左手の指が衝撃を発すると共に弾け、それによつて洗脳が解かれた緑谷の勝利によつて試合は終わつた。

死柄木はそれを見てまた不満顔だ。

しかし作間の方は別のものに興味を持つていた。

「洗脳……どこの誰かの個性みたいに、他人の体を意識を奪つて操れるわけだな」「エロい個性ですよね！」

「……そうだな。何か思う事はあるか?」

「うん。やっぱ、せっかく操れても自分がそれを体感できなになら意味ないんじやないですか？」

『洗脳』は庵の持つ『憑依』という個性とは似て非なる個性。条件が緩く対象も複数だが解除もされやすいのが『洗脳』で、条件は厳しいし対象も一名だが何でもできるのが『憑依』だ。

しかし、自身が体験できる事が一番重要だと思つてはいる庵にとつては比べるようなものではないのだろう。

「ま、どっちにも利点はあるが、マトモな受け答えができなくなるのは俺としてはNGだな」

「なるほど。セックスで喘いでくれませんからね」

「違うけど、まあそれでいいよ」

それからもトーナメントはどんどん進んでいく。

強力な個性による一方的な展開の試合、意味のよくわからないセールストークが続いた試合、ただの殴り合いになつた試合。

その全てで生徒たちが懸命に実力を出し切ろうとしていた。

そうして一回戦が全て終わり、二回戦の第一試合。

そこで再び、緑谷出久の出番がやってきた。

対戦相手はエンデヴァーの息子の轟焦凍。一回戦では巨大な氷塊を出して相手を瞬殺した生徒である。

「……」

実力が一番高いだろう存在と、最も苛立たせる存在。

どちらにしても、今後間違いなく死柄木の邪魔になるだろう存在たち。

死柄木はそんな二人が対峙する様子を、静かに見つめる事ができていた。

『さあ一回戦第一試合、レディイイイイ、START!!』

マイクがそう告げると同時に、轟は一回戦と同様の氷結攻撃を放つた。

そして緑谷は、デコピンをするかのようなポーズを取つて指を弾き、発生させた衝撃波によつてその氷結攻撃を防いで見せる。

そのやり取りが何度も続くうちに、緑谷の右手は個性の反動を受けたのかぐちやぐちやに潰れたかのように真っ赤に染まっていく。

「指つて折れたら結構痛いのにすごい！ しかもめっちゃ痛そう！」

「お前の場合……普通に自分から折つてそうだな」

「当たり前じやん。ハンマー使つてぐちやつぐちやつて感じだつたよ。でも、私でも結構痛かつたのに、あの子はよくそんな状態で動き回れるよねえ」

「確かになあ」

実体験を交えてその異常さを語る庵の言葉を証明するかのように、接近してきた轟に左腕を振つて両腕共に血塗れになる緑谷。

彼は常に凄まじい激痛を感じ続けている事を証明するかのように顔を歪めていて、それでもなお個性を発動して戦い続ける。

そんな異常な姿に、死柄木の口からも思わず言葉がこぼれた。

「なんだ、あいつ……なんだ？」

理解不能な、気持ち悪い何かを見るような目でそう言う死柄木。

作間にも、そこまで痛い思いをして頑張る理由は理解できない。

しかし、対戦相手である轟は何かを感じたのだろう。何やら怒鳴り返しながら、氷結攻撃を繰り返していく。

言葉の内容も戦いの内容もヒートアップしていくのを確認しながら、作間は隣に座る死柄木に目を向けた。

「こいつら、あの時の……」

作間の意見は最初、『そんなに見たいならテレビで見ればいいんじゃないか?』だつた。

『直接見たところで何か違うところがあるのか?』と。
しかしどうやらそれは誤りだつたらしい。

少なくとも死柄木は、そして作間もまた、ただの子供同士のぶつかり合いに何か別のものを見出している。

特に、突如として轟が左半身から発した炎には、作間にそう感じさせるだけの何かがあつた。

「嫌な事を思い出させてくれるよ、本当に……」

鬼気迫る表情で腕を振った緑谷の衝撃波と、どこか吹つ切れたかのような轟が発した炎がぶつかり合う。

その瞬間の二人の子供の顔を、最前列に座っていた死柄木と作間は目にすることになつた。

そして、スタジアムを揺るがすほどの大爆発が起こり——

第14話 三人目のヤバいヤツ

雄英体育祭は特に事故が起きる事もなく無事に終了した。

最後まで死柄木が暴走する事はなく、全てを見届けた彼は不気味なほど静かに帰途へついていた。

「いやー、それにしても最後はすごかつたね！　でも1位を取ったのになんてあんなに怒つてたんだろ？」

「そりや舐めプされたからだろ。単に不調だつたかもしかんが」「え？　そうなの？」

雄英高校から離れ、周囲の人数がまばらになつたあたりで庵がそう言った。

体育祭一年の部で優勝したのは結局爆豪という生徒になつたわけだが、決勝戦の相手である轟焦凍が個性による炎を使わなかつた、要するに舐めプをされたという事に不満があるようで、表彰式でメダルを授与される時になつても暴れるのを止めなかつたのだ。

死柄木と作間はもちろんそれには気付いていたが、どうやら庵には気付けなかつたらしい。

しかしそのことで死柄木に呆れた目で見られても気にならないらしく、彼女は続けて表彰式の様子を口にしていく。

「それにあの子、暴れっぷりがもうヒーローってよりヴィランって感じだつたよね！ がつしゃんがつしゃんって鎖揺らして、目つきもこーんな感じで吊り上げて！ 二人はどう思います？」

「そうだな……」

自分の目元を指で斜め上に引っ張りながらそう言う庵に、作間は少し考える。表彰式の様子だけ見れば、確かにヴィランに見えなくもない。

あの形相で、あの凶暴性で、仮に周囲の状況を町中に置き換えて考えると、速攻でヒーローを呼ばれるのは間違いないだろう。

しかし。

「それは……」

「簡単には無理だろ。やるんなら徹底的に折つてからじやないとな」

庵の問いに応えようとした作間に代わり、割り込むようにそう言つたのは死柄木だった。

「えく！ だつてあんなに面白い顔してたのに？ 死柄木さんだけじやなくて店長もう思うんですか？」

「……そうだな。俺も死柄木に同感だよ」

作間には体育祭でヒーローを目指す生徒たちを見てわかつた事がある。

それは、本気の顔を見せた生徒たちに共通する意志の強さだ。

一度ヒーローを目指すと決めた彼らの心はちよつとやそつとは折れることはないのだと、彼がたかが体育祭と馬鹿にした催しの中で見せつけられたのだ。

そしてオールマイトと直接対面した事のある死柄木の場合は、その意志がどれだけ厄介なものなのかをより深く理解することができたのだろう。

まあ庵は駄目みたいだが。

「ところで徹底的に折るつて具体的にはどうやるんです?」

「……それ、お前が言うのか?」

「え?」

「待て待て首を傾げるな。死柄木まで呆れてるぞ」

「いや、もう慣れたよ」

そう言いながら呆れた様子を隠しもしない死柄木は、何かを思い出したかのように首元に手を伸ばした。

そしてガリガリと首元を引っかきながら、不満そうに顔を歪める。

「やつぱり肌の上に被さつてる感覚が気持ち悪いな」

「それは仕方ないだろ。せつかくバレずに済んだんだからあとちよつとくらい我慢してくれよ」

「わかってる。言つただけだ」

今更になつて変装方法に文句を言い出した死柄木に合わせて足を早め、それからすぐに彼らは黒霧との待ち合わせ場所である路地裏へと到着した。

そこには既にいつものスーツ姿の黒霧が待っていた。

「お疲れ様でした、死柄木弔。しがらきとむらそれに作間優さくまますぐる、憑城庵つきしろいおりも」

「御託はいい。さつさとゲートを開け黒霧」

「おつとわかりました。それでは……」

黒霧が身じろぎをすると同時に、その横に人間が軽々通れる大きさの黒いゲートが出 現する。

死柄木は急ぐようにそのゲートへ入つていき、作間と庵もまたその後に続いてゲートへと入つていった。

そして黒霧の姿もまたゲートへと消え、路地裏は静けさを取り戻すのだつた。

翌日。

ようやく店へと戻ってきた作間は、今回の依頼で貰つた報酬をしまい込むと、さつそ

く今後の商売についての企画をパソコンに纏めていた。

体育祭への潜入で得た生徒たちのラブドール、そのラブドールを用いた裏ビデオ、そして表で売り出しているアダルトビデオが一定の認知度を得た頃に発売しようと思つていた次の商売についての企画だ。

一気に商品の幅が増える事に喜びながらキーボードに指を走らせていた作間だつたが、そんな時に誰かが店のドアを開ける音がした。

いつたい誰だと思つてパソコンから顔をあげてみれば、そこにはあの義爛の姿があつた。

「久しぶりですね。でも見ての通り、今忙しいんですけど？」

「まあそう言うなよ。いい話があるんだ」

「なんですか？」

「お前、新しい従業員欲しくないか？」

「は？」

突然の申し出に驚きの声をあげる作間に、義爛は店内とぶらつきながら話し出す。

「最近随分と稼いでるだろ？　あと一人くらい面倒見れるんじやないかと思つてな」

「俺は別に慈善事業で女子高生の面倒見てるわけじゃないですよ。あいつはアレで有用な個性持つてて、俺の仕事に積極的に取り組んでくれるからこそであつて……」

「安心しろよ。俺がそんなお荷物を紹介すると思うか？」

「……わかった。わかりました。それじゃあ紹介だけ聞かせてもらいますよ」
作間が肩をすくめながらそう言うなり、義爛は入り口のドアを二回ノックした。
おそらくはそれが合図だったのだろう。

頭にすっぽりと紙袋を被つた男が、ドアを開けて店内へと入ってきた。

店内に入つてすぐに周りに立ち並ぶヒーロー人形に驚いた彼だが、すぐに立ち直つて作間の方へと足を進めてくる。

「こりやまた随分と変わつた格好の奴を連れてきたな。なんでまたそんなもん被つてるんだ？」

「こうしてねえと裂けちまうからだ。 裂けやしねエよ」

「……そうか。そりや大変だな」

なんとも不思議な事を言う紙袋の男を相手にスルースキルを發揮した作間は、目で義爛へと合図を送る。

その視線に促され、義爛は男の紹介を始めた。

「こいつは**分倍河原仁**。個性は『二倍』だ」

「二倍？」

「一つを二つに増やせる便利な個性だ。 そうだよな？」

「ああ、そうだ。ちげエよ」

「ふむ……まあ個性の内容については正しいんだろうが、その話し方はなんなんだ?」

「そいつについては後で本人から聞いてくれ。ともかく紹介を進めよう」

義爛は煙草に火をつけながらそう言うと、分倍河原に確認を取りながら彼の紹介を進めていく。

彼は全国各地で窃盗やら強盗やらを重ねまくったヴィランであり、今では全国で指名手配されているのだという。

今回作間に紹介した理由は、とある理由から精神の均衡を失った彼が役に立てる職場だと思ったからなのだとか。

「つまりあんた、こいつが気に入ってるんだな? 放つておけない、と

「ああ。いつかのお前と同じさ」

「……そうか」

過去、同じように義爛の世話をになつた事のある作間は、義爛がむやみに誰彼構わず世話を焼くような人間ではないと知っている。

逆を言えば、分倍河原という男はそんな義爛が世話を焼きたくなる人間であるという事だ。

その境遇に作間が共感を覚えて仕方がないと言えるだろう。

ただ、もちろんそれだけで作間が分倍河原を雇う理由になることは無い。

無いが、個性について聞いた時点で結論を出していた作間にとつては、分倍河原を採用する理由の一つになるのは確かであった。

「俺としては非常に有用な個性だからぜひ雇いたい……んだが、分倍河原はどうなんだ？」

「俺？ 誰の事だ？」

「分倍河原は何故ここで働きたいんだ？ 義爛のとこに来たつてことは、元々何か理由があつたわけだろ？」

作間が聞いたのは、あくまで義爛が作間へ紹介しようと思つた理由だ。

分倍河原が何故義爛に紹介を頼んだのか。その理由はまだ聞いていない。

作間にそう言われた分倍河原は少しだけ硬直したが、次の瞬間頭に被つていた紙袋を脱ぎ捨てて一息に話し始めた。

作間が初めて見た分倍河原の顔は、額の中央に大きく縦のツギハギが入つた、金髪の男性だつた。

「義爛はよくしてくれた。信用できる奴だ。信じちやいねえけどな！ その義爛が、あんたなら俺を必要としてくれると言つたんだ。だつたら俺はあんたの役に立つてやりてえ。サボりはするぜ」

キメ顔でそれを言い切るなり、分倍河原は再び紙袋を頭に被つた。

ところどころツツコミどころはあるが、間違いなく誠意を示したつもりなのだろう事は作間に伝わっていた。

故に作間は、どこか不安そうにしている分倍河原へと笑顔で手を差し出した。

「安心しろ。無事採用だ。これからよろしく頼むよ」

「お、おおお！　俺に任せとけよ店長！　絶対に任せんnaよ！」

本当に嬉しそうな声でチグハグな事を言う分倍河原に苦笑しながら、作間はすぐ側で煙草を吸っている義爛へと目をやつた。

彼も表情には出していないが、長い付き合いの作間には結構機嫌がいいのが見て取れる。

そんな義爛へと、作間は頼みごとをすることにした。

分倍河原が頭に被つて、見てくれの悪い紙袋のことについてだ。

「とりあえずこの紙袋を別のものに変えてほしいんだが、義爛に頼んでも？」

「ん？　ああ、そうだな……いつものおっちゃんに手配してやるよ」

「頼みます」

「流石にそこまでされると悪いぜ店長！　よろしく！」

「……まあ、そういうことなんで」

「任せとけよ。金は後で請求するからな」

そう言つてスマホを操作しながら、義爛は店から出ていった。

その後、作間は分倍河原へと商売の事について説明する事にした。

そのために一度立ち上がり周囲に立ち並ぶドールたちについて説明しようとした

……そこでふと立ち止まつて分倍河原の方を向く。

「さて、確か指名手配されてるんだつたよな」

「やつぱり駄目とか言わないよな？ 言つてもいいぜ」

「いや、流石にそんな事しないよ。ただ、呼び方が困るだろ？ 仮に顔を隠してたとしても、外で大っぴらに名前呼ぶわけにもいかない。何か適当につけていいか？」

作間が思い至つたのは分倍河原を雇う事に対するリスクについてだつた。

紙袋を被り、後に別の何かを被つて顔を隠すのなら、そこに関するリスクは薄い。だが、呼び名ばかりは変えないとまずいだろうというわけである。

「構わねえよ。どうとでも呼んでくれ。変なのはやめろよな！」

「そうだな……ま、わかりやすいのでいいだろ？」

そこで作間は深く考える事もせず、分倍河原の個性である『二倍』から連想できる簡単な単語を呼び名にすることに決めた。

元々表で大々的に仕事をさせる予定などないのでだから、きっと適当でも問題ないだろ

うと考えて。
「これからよろしくな。トウワイス」

第15話 個性を生かした健全なお仕事です

「ちゅつ……んふつ、んんんつ♥？」

「んつ♥？　ちゅつ、ちゅつ……んふふ」

「ちよちよちよつと待てよ庵ちゃん！　もつとやれ！　ちげえだらもう見てらんねえ！」

トウワイスを雇った次の日の事。

いつも通りの時間に同ビルの二階にある自室から降りてきた作間が目にしたのは、ソファの上で絡み合う二人の庵と、紙袋を被った頭を大きさに抱えているトウワイスの姿だつた。

「何やつてんだお前ら」

「あつ店長！」

「おはよう店長！　いい朝だぜ！　最悪の天気だ！」

「……うん、仲良くなつたのはわかつた。わかつたがちよつと待て。状況を報告してくれないか？」

庵たちは元気に挨拶をしたのだが、起きたばかりの作間には少々理解しがたい状況

だつたらしい。

どこか疲れたような顔で椅子に腰かけた作間へと、庵とトウワイスは現状の説明を開始した。

「先日紹介してくれたトウワイスさんと夜遅くまでゲームをやつたんです」

「一緒に楽しく遊びながらお話ししてたら、朝になつたら面白そうな個性を試してもらおうという事になつて」

「今日の朝、押し掛けてきた庵ちゃんの体のデータを取らせてもらつて、俺の『二倍』で増やしたわけよ」

「そしたらすつごい美少女が現れたから我慢できずに押し倒しちゃつた」

「すごい美少女に迫られたから押し倒されちゃつた」

「俺は止めたんだぜ。むしろ見たくて煽つたけどな。いやちゃんと止めたんだマジで！」

「わかつたわかつた。まつたく……」

代わりばんこに説明を行つた三人に、作間は深くため息を吐いた。

そしていつまでも絡み合つたままの二人の庵を引き剥がすと、押し倒されていた方の庵の首根っこを掴み、彼女をもう一つのソファに座つていたトウワイスの隣に移動させた。

「んもう！ もつと触りたかったのに～！」

庵は不満げな顔でそうぶーたれるが、作間が来ても乳を揉む手を止めなかつた彼女が悪いのだ。

作間はそんな彼女を一睨みして黙らせると、トウワイスの方へと向き直つた。

今日の予定は、トウワイスへの仕事の説明を兼ねた、今後『理想郷』で取り扱う新しい商売の紹介だ。

「さて、トウワイス。昨日簡単に説明したウチの商売についてはわかってるよな？」

「もちろん。この……周りにあるヒーローのラブドール売りつけんのと、それを使つたアダルトビデオの販売だろ？」

「概ねその通りだな。ただ今後仕事してもらう以上、この商売のことについてもつと知つておいてもらう必要があるわけだ」

昨日トウワイスを雇うと決めた時、作間は仕事についてはそこまで詳しく説明することができなかつた。

それよりも、ちよつと聞いただけでも有用なトウワイスの個性の事が気になり、本人からどういう事に使えるのかの話を細かく聞くことに時間を使つたからだ。

おかげでトウワイスが知つているのは『理想郷』の仕事の本当に基本的な部分だけだが、作間は一日の間に新しい商売を幾つか考え付く事ができたのである。

「いいか庵。眠そうな顔してるがお前も話を聞いておけよ。確認の意味を込めてな」

「わかつてますー。ちゃんと聞いてますー」

「それならいい。あと、そつちのコピーの方の庵は冷蔵庫から適当な飲み物を持つてくれ。人数分なー」

「りょーかいでーす」

コピー庵が店の奥へと消えていくのを見送ると、作間は一息吐いてからトウワイスヘ『理想郷』の仕事についての説明を始めた。

「さて。まず一つ目、ラブドールの販売についてだ。簡単に言うと、俺の個性を使って作り出した人形を売り捌いてるんだ。だからこつちの仕事に関してはそんなに手伝つてもらう事はないー」

「こいつらをその個性で作つたって事か?」

そう言つて店内に並ぶ人形を見回すトウワイスに、作間は領きを返す。

「そうだ。俺の個性なら直接目で見た相手の体なら、たとえ服を着た状態だろうが寸分違わずに作り出す事ができる。まあ、これだけのヒーローを直に見るのはかなり面倒だつたけどなー」

「それでも俺の『二倍』はコピー作るのに一々測定がいるんだぜ? 十分楽でいいじやねえか。チートだチート!ー」

「それに関してはその通りだが……昨日聞いた通りなら、『二倍』は本物とまるつきり同じものを作り出せるんだろ？ ならクオリティはそつちが上さ。俺のはただの肉人形だからな」

作間の個性である『人体創造^{ライフメーカー}』が作り出せるものはあくまで個性を除いた人体のみ。意識、個性、ついでに服を作り出す事は出来ない。

販売しているラブドールに着せているコスチュームの模造品も、義爛経由で裏のアイテム屋に注文して用意しているのだ。

それに対してトウワイスの『二倍』が作り出せるものは、耐久性以外は完全に本物^{オリジナル}と同じコピー。

作り出す条件や数などに細かい違いはあるため単純に比較はできないが、一体の質が上なのは『二倍』のコピーの方であると言えるだろう。

「とにかく、ラブドールの販売は俺しかできない仕事だ。まあ、やつてもらうとしたら人形に服を着せたり接客してもらつたりくらいかな」

「雑用だな！ 任せとけよ！ 面倒くせえ仕事だな！」

そう言いながらも上機嫌に親指を立ててサムズアップするトウワイス。

何故雑用にそこまで喜べるのかわからないといつた顔の庵が変な物を見るような目でトウワイスを見つめる中、作間はもう一つの主要な仕事であるアダルトビデオ商売に

ついての話を始めた。

「で、もう一つのアダルトビデオの販売の方。こっちにはしつかり手を貸してもらうぞ」「おう！ それで、具体的には何をすりやいいんだ？」

「簡単さ。お前が今日既にやつた事だよ」

「え？」

「お待たせー。飲み物持つてきたよー」

トウワイスが首を傾げていると、そこへお盆に人数分のコップを載せたコピー庵が戻ってきた。

彼女からコップを受け取った作間は、それをグイッと一息に飲み干してトウワイスに彼女を指し示す。

「庵を増やす。仕事つてのは主にそれだな。庵の個性についてはもう話しただろ？」

「……あつ！ はつははははは！ おいおい店長天才かよ！ 発想が馬鹿過ぎるだろ！」

どうやらトウワイスにも作間の考えている事がわかつたらしい。彼は作間の肩をバンバンと叩きながら大爆笑していた。

庵の個性が憑依である事も、彼女が作間の人形に憑依できる事も既にトウワイスは聞かされていた。

そして一緒にゲームをしている時に、彼女のアダルトビデオでの体験談も聞かされた。

そこに『庵を増やす』という仕事を教えられれば、当然答えには辿り着ける。「庵ちゃんを増やせば、一度に動かせる人形も増やせるつて事だよな！」

「そうだ。それはつまり、一度に複数のヒーローを出演させられるという事だ。チームアップで動く事の多いヒーローを、より効果的に利用することができるようになるはずだ」

プツシーキヤツツを始め、単体ではなく同時に出演させた方がビデオの売れ筋が向上しそうなヒーローは多い。

トウワイスの『二倍』があれば、そんなヒーローを同時に出演させることも可能となり、ビデオの種類に幅を持たせることができると作間は企んでいた。

しかも、彼にとつて更に都合がいい事があつた。

『二倍』で作り出せるコピーのネックは耐久力で、二つ目の耐久力は一つ目よりも更に低い。

ダメージが少し蓄積しただけで、すぐに崩れ去ってしまうだろう。

しかし庵の『憑依』なら、その耐久性の欠点を無視できる。

動くのもやるのも戦うのも、憑依した先の肉体で行うのなら本体の耐久力は関係ない

のだから。

「最近はちょっと売り上げが伸び悩んでてな。それでもかなり売れてるんだが、ここらで一つ起爆剤が欲しいと思ってたんだ。ちょうどいいタイミングだよ」

「ほー。そういうやどんなもん売つてんのか聞いてなかつたな」

「ああ、それは……こういうのだな」

トウワイスに商品の事について聞かれ、作間は机の引き出しの中からDVDケースを二つ取り出した。

そのパッケージに描かれているのは共にヒーロー、ミッドナイトとピクシーボブである。

ミッドナイトの作品の名前は『密着しながらの執拗な淫語で中出しをねだる美女女教師ミツ●ナイトのヒミツの個人授業』。

ピクシーボブの作品の名前は『欲求不満のピクシーピブ、隣に住んでる大学生と汗だくでヤリまくる昼下がりの既成事実作成セックス』。

ネットで大盛り上がりになり、何故かミッドナイトとピクシーボブのファン数が千人単位で増加したという逸品である。

「こりやすげえや。正気を疑うぜ」

「言つとくがタイトルを受けたのは俺じゃないからな。これは発売元をやらせてる『R

「OD』の社長の発案だ」

「ちなみにあの人、外見変えられるから子供姿の竿役とかできるんですよ。アレだけ大人サイズとかにできてですね……」

話が自分の出演したアダルトビデオの事になつたからか、つまらなそうにしていた庵が話に入ってきた。

彼女も今回のトウワイスの個性による自身の増殖に乗り気なようで、机の中から取り出した過去作のパッケージを見ながら嬉しそうにしていた。

「それにしても私が増えるなんて夢みたいだなあ……色々してみたかつたんだよね。3Pは当然でしょ？ 4Pもできるみたいだし、百合プレイも面白そудだし、なんなら私が竿役つてのもできるんでしょ？ すづごく楽しみだよね！」

口から欲望を駄々洩れにしながらはしゃぐ庵は本当に楽しそうで、しかしそれを見たトウワイスは若干引いていた。

「庵ちゃん、自分で自分を……？」

「気にするなトウワイス。こいつはそういう奴だから」

「あ、ああ……気にするに決まつてんだろう！」

いつまでも妄想を摶らせている庵を無視する事にして、作間は紙袋をずらして水を飲んでいるトウワイスに一つの提案をした。

「ビデオ撮影中の仕事についてだが、カメラを持つてみる気ないか?」
「カメラ?」

「ああ。増やすだけだと暇だろ? ならやる事が何かあつた方がいいと思つてな」
それは作間なりの気遣いだった。

せつかく一緒に仕事をするつて時に、庵を増やすだけで仕事が終わるなんてのは扱いが悪すぎると思つたのだ。

もちろん、一般に売り捌く撮影用のカメラを任せるわけではない。

後に義爛を通して裏に売り捌くためのカメラを用意しようと作間は思つていた。

「お、おお! 任せとけよ店長! バツチリ撮つてやるつて!」

「ああ。任せる。あと最後に……今後の商品展開についてちょっと話しつくか。庵もトリップしてないでちゃんと聞く様に」

「あふつ」

庵の後頭部を叩いて正気に戻した後、作間は店の奥から大きな段ボール箱を運んできた。

それをソファの前に下した作間は、箱を開いて片手で持てる大きさの直方体の箱を取り出した。

「エログッズですか？」

興味深そうに顔を近づけてくる一人に、作間はその箱を開いて中身を取り出す。

それは筒のような形をしていて、その片側は女性器を模した形状をしていた。

「庵は正解。これはな……再現オナホってヤツさ」

本来、絶対に知ることのできないヒーローの女性器の再現なんて、『本当に再現されているのか』と思う人間ばかりのはずだ。

しかし現在、既に異常に質の高いヒーローそつくりのビデオが世に出回ってしまっている。

そんな中で、そのビデオを出している会社から再現オナホールが発売されたらどうだろうか。

一定数はこう思うだろう。『本当に再現されているのかもしれない』と。

「既に売る準備はできてる。会社で手渡しの発売会をする予定だ。庵にはミッドナイトとM.t. レディに憑依してもらう。トウワイスにもさつそく働いてもらうからな」

「やつた！ すつごい面白そう！ 頑張りましようねトウワイスさん！」

「趣味悪いな庵ちゃん！ 頑張ろうぜ！」

任しとけよ店長！」

自分を信頼して仕事を任してくれる作間と笑顔で声をかけてくれる庵に応え、トウワイスはさつそくの仕事に気合を入れるのだった。

三章 新たな道筋

第16話 イこうぜ☆オナホ販売会

東京都八枷市。ハカセ

その日、都の西側にあるこの市の中心市街にあるイベント会場で、とあるイベントが開始されようとしていた。

そのイベント名は『R.O.Dブランド所属女優による再現オナホール手渡し販売会』。有名な女性ヒーローそのままの容姿をした女優二人が、彼女たち自身のアソコを再現したオナホールを一人一人手渡しで販売するというイベントだ。

そんな過激かつ興奮必死なイベント会場は、もうすぐ販売会の開始時刻ということもあって異様な熱気に包まれていた。

「いやあ、流石にすごい人数だね。ここまで人を集め事が出来たのはいつ以来だろう」そう感心するのは『R.O.D』社長の夜見。

彼は表に出れない作間に代わり、今回のイベント会場やスタッフの手配などを行つており、イベント当日の今日も全体責任者として働いていた。

今はイベントは開始直前ということで、休憩がてらイベント会場横の小部屋から会場

内の様子を眺めているのだ。

「確かにかなりの人数だ。一人何個買つてくかはわからんが、いい売り上げになりそうだな」

「こいつら全員オナホ買いに来たつて考えるとやべえな！」

会場内に設置されたカメラの映像を見てそう呟いたのは、ソファに座つて寛いでいる作間とトウワイスだ。

作間はいつも通りの着崩したスース姿。そしてトウワイスは紙袋姿ではなく、黒と灰色で上下の色が分かれたマスクを頭に被つていた。

彼らは表に出て仕事をする事は一切ないが、客層のチエツクや売れ行きの確認などを行うために『理想郷』の面々もこのイベント会場にやってきていたのだ。

ちなみに庵は現在、楽屋にて色々と準備中である。

「つーか店長、あれってヒーローだよな？　あの入り口に立つてのキモイ豚みたいな奴！」

そう言つてトウワイスが指さしたのは、会場入り口に立つピンク色のコスチューム姿の巨漢。

トウワイスが一目見てキモいといった要因はその顔だろう。

限りなくリアルな豚の顔をした彼は若干周囲から引かれている中、鋭い目つきで周囲

を見渡していた。

「ああ。俺が警備を頼むために呼んだ」

「わざわざヒーローを!? 奮発してんな！ いらねーだろ帰しちまえよ！」

「いやあそういうわけにもいかない」

作間が呼んだという事に驚くトウワイス。

人が集まるイベントでヒーローに警備を任せようというのは自然な考えではあるが、このイベントは内容が内容である。

ヒーローが協力的になるはずがない、トウワイスはそう思つたのだが、答えは單純だつた。

「あいつも顧客の一人でな。偶に情報を流してもらつてる」

「なんだそういうことかよ！」

そのヒーロー、ピッグピッグという見た目の通りの名前のヒーローは『理想郷』の顧客である。

2年ほど前から何度も作間の人形を買い求めており、そのたびにヒーロー側の情報を作間へと流していた。

ちなみにピッグが『理想郷』の商品を求めた理由は、モテたくてヒーローになつたのに思う通りに行かなかつたからである。

「もちろん今回呼んだのは警備だけが理由じゃない。色々と思惑があつてのことだ」「思惑?」

首を傾げるトウワイスに、作間は夜見が空気を読んでヘッドホンを装着するのを待つてから話し始めた。

「これだけのイベントだ。警察も目を付けるだろうし、報道関係者もやつてくるだろう。それはわかるよな?」

「俺は見かけてないけどな! 確かにそれっぽいのがいたかもしねえ」

「で、話は変わるがウチのビデオへのヒーローの対応は今のところ『認めはしないが違法ではないので放置するしかない』って感じなわけでな。俺としてはそれを変えたくないと思つてるわけだ」

現在、『R.O.D』のビデオに対してヒーローたちは沈黙を保つている。

警察が動かないからどうしようもないという事もあるのだが、何よりそんなビデオに映つている女性ヒーローそつくりの女優について話題にしたくないというのが本音だろう。

まだ大きく動く事ができない状況で強く否定することは、ビデオに映つているその女優の体が本物と同じなのではないかと思わせる事になつてしまふ。

そうなれば状況は更に悪化するかも知れないため、彼らは静観せざるを得ないのだ。

そんな作間の思惑を聞いて、トウワイスは大きく首を縦に振りながら肩をすくめた。

「なるほど……！ つまり、どういうことだ？」

「ああしてヒーローが販売を制止せずに警備をするつてことは、要するに『今回の再現オナホールに関しても今までと同じ対応をする』つて思わせる事になるんだよ。実際には何も言つてなくともな」

今回のイベントを止めるべき対象と見なすのではなく、警護する対象と見なす。

それ自体は『人が大勢集まるなら警備するのが当然』という理由があるから全くおかしなところはない。

しかしそれでも、販売について容認したように見えるというのが表面上は大事なのだ。

更に言うなら、ピッグピッグはこの警備の後に報道関係者と話をする事になつている。

そこで作間に指示された通り、ピッグは『ヒーローとしては認められませんが、正的な理由もなく人々を護る責務を投げ出すわけにはいきません』というような事を答えるだろう。

根回しは万全というわけである。

「でもよ。あいつヒーローとしては微妙じゃね？」

ただ、トウワイズがそう言うように、このビッグピッグというヒーローはこの八枷市に事務所を構えているだけで、大した実績を持つてはいるわけでもない。

そんなヒーローを使って根回しを行つても意味はないのではないだろうか。

その疑問に作間は頷きながら答えた。

「わかってる。でも大丈夫だ。これはあくまで保険だからな。なにせ……」

そこで一度言葉を切つた作間は、心底愉快で仕方がないといった声で続く言葉を口にした。

「オナホールをどんな形状にして売ろうが、それにどんな名前を付けて売ろうが、ヒーローにたまたま容姿が似てる女優がイベントを行おうが、違法じゃないんだからな！」

それから約十分後。

二人の庵が部屋へと戻ってきた。

「おはっ♪ お待たせしましたー！」

「お待たせしましたー！」

二人のヒーロー、ミッドナイトとM.t. レディの人形に憑依した彼女らは、別室で

ヒーローコスチュームに着替えた後、メイクなどを行つていたのである。

そうして部屋へとやつてきた二人の姿は、正しく本物と見紛うほどの代物だった。

「どう？ どう？ 完璧でしょ？」

「いい感じだと思わない？」

「うん。ボクはいいと思うよ。作間さんは？」

「そうだな。事前確認もしてあつたから問題ないとは思っていたが、メイクもすればここまで変わるか。いい出来だ」

その場でくるりと回りながら称賛の声を求める庵たちに、夜見と作間は素直にその姿の出来を褒めたたえる。

しかし……

「なあ、ちょっと気になる事あるんだけどよ……」

「どうしたのトウワイスさん」

「どこか変なところある？」

首を傾げながらトウワイスに問いかける二人。

その姿は大人気の女性ヒーローそのままだ。

ミッドナイトは全身を極薄の肌色タイツで覆い、SM嬢のようなボンデージファッショングを身につけた美女。

175cmという長身と長い黒髪、極薄のタイツの下に押し込められたはち切れんばかりのボディがよりエロさを引き立てている。

Mt・レディもまた全身を腕や足、胸などが青で装飾された白いパツパツスーツで覆つた煽情的な恰好の金髪美女。体に張り付くスーツ姿のおかげでスタイルの良さが強調され、引き締まつた腰から大きく張りのある尻へのラインは否が応でも興奮を誘う。

今の庵はその二人の姿を完全に再現していると言えるだろう。トウワイスもそれについては否定しない。ただ、どうしても気になる事があつたのだ。

「全然おかしなところはねえぜ？ でも乳首浮き出るのはヤバいだろ！」

トウワイスの言う通り、体に張り付くタイプのコスチュームを着た二人の乳首は、衣装越しにもバツチリ浮き出てしまつていた。

その理由は二つ。単純なものだ。

一つは用意したヒーローコスチュームが当然本物と同じものではなく、安物の素材を使つてガワだけ完璧に真似た安物だつた事。

そしてもう一つが、今回のイベントに際し、コスチュームの下にブラジャーやニップレス、パンツや前張りなどの局部を隠すものを着用しないように夜見が指示を出した事だ。

「お前かよ！ どういうつもりだこの野郎！ 最高な事しやがつて！」

「いやあほら、こつちの方が売れると思つて」

悪びれもなくそんな事を言う夜見を無視し、トウワイスは庵に問いかける。

「庵ちゃんはいいのかよ!」

「私の体じやないから別に……むしろ興奮する」

「想像したらちよつと勃つてきた」

「そうだつた庵ちゃんこういう子だつた!」

当の庵たちはそんな格好をさせられているというのに、むしろ嬉々としてそれを着用してこの部屋に来た。

それが答えである。

トウワイスも若干の予感はしていたのだが、やはり庵が変態である事を再認識して頭を抱えるのだつた。

そしてイベントの開始時刻を迎へ、ついに再現オナホ手渡し販売会が始まつた。

ちなみにイベントの形式は、まず入り口付近で購入内容の記入を行い、その際に配られた整理券の番号に従つて女優の前に行く。

そして買った再現オナホールの種類に応じて女優に一声かけてもらひながら、オナホールを手渡されるというものである。

ちなみに午前二時間、午後二時間、間に一時間の休憩を挟むかなり強気な時間設定の販売会である。

現在、開始から一時間近くが経ち、既に100名以上が購入したというのに未だ行列は途切れていなかつた。

「来てくれてありがとう。これ、私のアソコそのままの形をしてるから、いっぱい使つてね？」

「はつ、はいイツ！」

「よく来たわね。いっぱい締め付けてあげるから、たくさん射精するのよ？」

「マツジかよエロすぎでしょ！」

ミッドナイトとM.t. レディの姿をした二人がそう言つて体をくねらせながら、時には片手で胸を寄せ上げながら、やつてきた客に吐息を吐きかけながらオナホールを渡していく。

そんな事をされながらエロい言葉と共にオナホールを渡された客の興奮はすさまじいもので、再び列に並びなおそうという客が何人も出現していた。

「お、おいアレ！」

「マジだ。乳首勃つてね？」

「つか下も割れ目……エツツツロ!!」

そんな中、何かに気付いた客たちのそんな声が上がる。

それに反応したかのように客がミツドナイトとMt・レディに目を向ければ、そこにはピンと立つた乳首や、じつとり湿つた割れ目がスースに浮き出ている二人の姿があつた。

ざわめきが一気に興奮へと変わり、会場内の熱気は更に高まっていく。

そして午前の部が終了した時、一個5000円の再現オナホールの売り上げは三百万を軽く超えるものとなっていた。

第17話 急転直下

正午から1時間の昼休憩を挟み、午後の部の開始時刻となつた。

午前中に購入することができなかつた客が今か今かと待ちわびる中、ついに『R.O.D』社長によるアナウンスが会場に流れた。

『それでは皆様、大変お待たせいたしました。本日の販売会、午後の部を開始させていただきます』

そんな開始宣言を聞いた客たちは一気に興奮度合いをあげてざわめきだすが、続いて行われたアナウンスを聞いてそれは更にヒートアップした。

『ステージにて女優のお二人に挨拶をしてもらつた後、販売へと移ります。ステージにご注目ください』

会場中に響く社長の声に従つて、会場にいる客たちの視線が手渡しスペースの後ろにあるステージへと集まる。

そして熱の籠つた視線が浴びせられる中、先ほどとは大きく装いを変えた二人がステージの左右から同時に姿を現した。

そのあまりにもエロ過ぎる格好に、客たちは大興奮しながら騒ぎ立てていた。

「うつわヤベエ！ なんだあの格好!?」

「マジかよ！ あんな格好で手渡してくれるのか!?」「エロ過ぎんだろ……」

先ほどまではミッドナイトとM t. レディのコスチュームを着て、完全にヒーローの彼女たちにそつくりの格好をしていた二人。

しかし現在、ステージの上に姿を現した二人が身に纏うのは『水着』だつた。もちろん、ただの水着ではない。

M t. レディは上下に分かれたビキニタイプの水着を着ていた。ただしその布面積は極小で本当に隠すべきところしか隠していない、いわゆるマイクロビキニと呼ばれるものだ。

乳肉に食い込むように引っかけられた布の面積は500円玉程度しかなく、彼女が一步進むたびにその巨乳がたぶたぶと揺れて乳首が見えてしまいそうになつていて、股間を隠す水着の面積もかなりギリギリを攻めていて、股間に張り付くハート形をした布地からはうつすらと割れ目が透けて見えている。

大勢の客はそんな彼女の姿に生唾を飲み込み、更に対面を歩くミッドナイトの姿を目にして股間を熱くさせていく。

反対側から歩いてきたミッドナイトが身につける水着は、布地が股から肩にかけてV

の字を描く紐同然の赤いスリングショットだ。

たわわに熟した乳の中央では紐で隠しきれない桜色の円が見えており、股間へ食い込む紐もその肉厚の土手を隠しきることはできず、当然のように左右から卑猥な肉をはみ出させている。

どちらの水着も後ろ姿は完全に裸にしか見えず、それでいて大きな尻をあえて振りながら艶めかしくゆつくりと歩く姿に、客の多くは完全に魅了されてしまっていた。

そうして左右から進み出た二人はそのままステージの中央で合流すると、そこに用意されていた丸いお立ち台へと足をかける。

二人はそこで頭の後ろで手を組みながらガニ股のエロ蹲踞ポーズを取ると、会場中の客へと甘い吐息交じりの挨拶を開始した。

『皆さん、家に帰つたらいっぱいシコシコしてザーメン吐き出せるように、午後からもしつかり私たちのドスケベボディを目に焼き付けていいってね？』

『午後からもいーっぱいサービスしてあげるから、私たちのオマンコオナホにいっぱいドピュドピュつてできるよう、たくさん買つていきなさいね？』

時折上半身を振つて胸を揺らしながら、口を開いて舌を何かに絡ませるように動かしながら、全身でエロさを表現しながら二人は自身の膣を再現したオナホールの宣伝を行つた。

それが招いた効果は、目をぎらつかせて荒い息を吐く客たちを見れば一目瞭然だろう。

『それでは改めまして、販売会午後の部を開始させていただきます。購入できるオナホの数は一人10個までとさせていただいておりますので、注文票へご記入の際は注意をお願いします』

販売が始まりしばらく経った頃。

会場を横の小部屋にて、やる事のない作間とトウワイスは会場内の様子を監視カメラを使って眺めながら暇を潰していた。

「マジですごい事になつてるな。十個まで買つてる奴も結構いるみたいだ。なあ店長、このまま売り切れになつたらどうする？」

「用意しといた在庫を考えりやそれはあり得ないと思うが……まあその時はそんだけ売れたつて事で宣伝になるさ」

「なるほどな！」

トウワイスの言う通り、オナホールの売れ行きはかなり順調だつた。

庵たちの煽りが効いたおかげで、一人の客が買つていく個数が午前中と比べて倍増しているのだ。

とはいへ今回の販売会で用意されたオナホールの総数は2000個。

更に午前中に売れた数が約600個と予想以上に多かつたため、追加で500個分工場から運んでくるよう指示も出している。

時間までに売り切れで途中終了という事にはならないだろうというのが作間の予測だつた。

「さて、午後の販売が終わるまで二時間だ。カメラばつか見てないで適当にヒマつぶしていいからな。俺はそうする」

作間はそう言つてタブレットを取り出すと、そちらの操作に集中し始めてしまう。そして特にやる事の思いつかなかつたトウワイスは、仕方なくテレビを見る事にするのだつた。

『——次に人参をみじん切りにして、続いて玉ねぎを——』

『——一人一人の個性に寄り添つたモノづくりを！ デトネラツ——』

『——ご当地ヒーローと行く街角ぶらり旅、今回は——』

『——改めて『ヒーロー殺し』による各地の犯行の件数を確認してみましよう』

「お？」

テレビのリモコンを手に取つたトウワイスが適当にチャンネルを変えていると、ふと気になる単語が耳に入った。

ヒーロー殺し。

それは17人のヒーローを殺した有名なヴィラン、ステインという男の通称だ。それが気になつたトウワイスがそのまま番組を見続けていると、どうやらつい先日も保須市でヒーローの襲撃事件が起きていたようだ。

『——先日のイングニウム襲撃を受け、警察はヒーロー殺しの更なる犯行が保須近辺で行われる可能性が高いと——』

「保須つてこここの隣だつけ。まあ俺らには関係ないだろ」

「いや、それがそうとも言えないんだよ！ これが！」

「うおつと聞いてたのかよ店長！ 驚いちやいないぜ！」

ヒーロー殺しが狙うのはあくまでヒーローのみ。

ヒーローじやない自分には関係のない話だとトウワイスはチャンネルを変えようとしたのだが、そこでいつの間にかタブレットの操作をやめていた作間が口を挟んできた。

おまけにいつもよりも声が刺々しい。

トウワイスが恐る恐るその顔を見てみれば、タブレット画面から顔を上げた作間はめちゃくちや不機嫌そうな顔をしていた。
「そいつウチの顧客二人も殺しやがったんだよ。ヒーローの顧客は少ないってのに」

「おいおい……マジか!? いい奴じやん!」

「あのクソ野郎。俺がヒーローに商品買わせるのにどんだけ手間かけたと思つてんだつづーの!」

作間は珍しくマジで不機嫌そうにそう言い放つ。

ステインが『理想郷』の顧客となつたヒーローを殺した事で、彼らを顧客として迎え入れるために行つた情報収集や裏取りなど、作間が費やした時間と努力の全てが無駄になつているのだ。

しかもそれが二人分である。

そんなわけで、もし見かけたら殺しにいつてやろうとまで考えるほどの怒りを作間はステインに対して抱いていた。

「ヒーローもさつさと仕事しろつてんだよ。あんなチンピラに負けやがつて」「店長ステインに会つたことあんの?」

「昔な! 殺そうとしてきたけど、刃物じや俺は殺せないから逃げてつたよ。つーわけで俺はあいつの話を聞きたくない。チャンネル変えてくれ」

「へいへい。他もクソつまんなそうだけどな」

昔を思い出して更に不機嫌そうになつた作間の指示に従い、トウワイスはチャンネルを変えていく。

そして本当に口クな番組がなかつたため、二人は販売会終了まで旅番組を見て暇を潰すこととしたのだつた。

それからしばらく時間が経ち、日が暮れ始めた頃。

無事に販売会が終了し、その後片付けも終えた『理想郷』の三人は作間の運転する車で帰途についていた。

「いやーまさか完売しちゃうとは思わなかつたね」

憑依を終え、元の赤髪少女に戻つた庵がそう呟く。

彼女もまた作間と同じように満面の笑みを浮かべていた。

大勢の男たちからの視線を一身に浴びながら裸同然の格好で淫語を吐き出すのがよほど楽しかつたらしい。

ちなみに、分身の方の庵は用済みという事で作間が殴つて消滅済みである。

「ホントよくやつてくれたな！ 夜見に渡す分を差し引いても大儲けだ！」

そして運転中の作間はいつになくハイテンションで、満面の笑みを浮かべながらハンドルを握つていた。

理由はもちろん販売会がオナホール2500個完売という予想以上の結果に終わつた事である。

経費や税を差し引いてもかなりの金が入つてくる事は間違いないく、もはや笑いが止まらない状態だった。

「よし！ 今日はどこにでも飯食いにつれてつてやるぞ！ お前らどこがいい？」
そして御機嫌の作間は二人を食事へと誘うこととした。

今回のイベントを成功に導いたのは二人の持つ個性のおかげである。
作間は珍しく素直に感謝の気持ちを抱いていた。

「焼き肉！ 私焼き肉がいいです！」

「俺も賛成！ 俺はレバー！ 普通にカルビ食いてえ！」

「よつし焼き肉だな！ 帰り道に焼き肉あるかスマホで探して教えてくれ。今日はそこ
にいって肉を食いまくるぞ！」

「イエーイー！」

揃つておかしなテンションの高さのまま、三人を乗せた車は進んでいく。

そして八枷市の隣にある保須市で焼き肉屋を探そうとした彼らは、思いもよらぬ事態
に遭遇することになった。

問題が発生したのは、お目当ての個室ありの焼き肉屋を発見して近くの駐車場に車を
止めた後の事である。

三人が車から降りると同時に、すぐ近くで爆発音や悲鳴が聞こえ始めたのだ。

もつとも、それは特に驚くべきことではない。どうせヴィランでも出たのだろうと思つてはいるが、案の定ヴィランが発生したとの放送が流れてきたからだ。

その時はまだ三人とも、焼き肉屋で飯が食えなくなることの心配をしていた。

問題はその後。

何やら聞き覚えのある笑い声と同時にツギハギだらけのピンク色の脳無がビルの屋上にある貯水タンクの上に姿を現した事である。

「アハハハハ！ タノシイ！ コンナスツゴイパワーハジメテ！」

三人は呆然とした表情を浮かべてそのピンク脳無を見上げ、最初に正気を取り戻した作間はすぐに庵の肩を掴んで詰め寄つた。

それからはもう大騒ぎである。

「おいコラ庵い！ こりや一体全体どういうことだ!?」

「私に聞かれても知るわけないじゃないですかあ！」

「いやでも庵ちゃん。あれって君だろ？ きっと俺の目がおかしいんだな」

「アレはトウワイスさんが増やした三人目の私でしょ!? 私は無実！ 絶対無実！」

「ただの冗談だつて庵ちゃん。落ち着けよ」

「それよりもあれはウチの地下にあつたはずのものだ。何でここに……しかも留守番しておらずの庵入りで」

三人そろつて突然の展開にパニクリつつもなんとか落ち着こうとしていると、そこで作間のスマホへと電話がかかってきた。

そして取り出したスマホの画面に映る番号と名前を見て作間は全てを察した。

『よう作間。お前のどこの店員、ちょっと借りてるぜ』

「お前の仕業か死柄木イ!!」

第18話 作戦名「ヒーロー殺し」

トウワイスの二倍によつて増えた三人目の庵は、一人寂しく『理想郷』に残つて留守番をしていた。

お客様はお昼ごろに一人だけ来たがそれだけ。

あとは漫画を読んだりゲームをしたりして時間を潰していた。

そして夕暮れが近づいてきた頃、理想郷の店内にあるスマホに死柄木からの電話がかってきたのである。

『作間はいるか?』

「いませーん。店長はトウワイスさんと私を連れてお出かけ中でーす」

『……お前はそこにいるんじゃないのか?』

「そうですよ。私は増えた方の私ですから」

『は?』

事情を知らない死柄木にとつては意味不明な説明をする庵だが、言つてゐる事は特に間違つていない。

とはいえたまま説明しないと理解をしてもらえないだろうと思つた庵は、死柄木に

トウワイズの事と今日のイベントについての事を説明する事にした。

ぶつちやけ愚痴を吐く相手が欲しかつただけである。

「いくら私がオリジナル本体じやないからつて酷すぎますよね！」

私だつて面白い事したいのに

『……』

「あれ？ ちょっと聞いてます死柄木さん！」

『聞いてるよ。ひでえ話だ』

「ですよね！」

『ああ。そんなお前にいい話があるんだ。留守番なんて放つてちょっとこつちに来てくれよ』

「いくいくすぐ行きまーす！」

うんざりしていた庵は死柄木の誘いにすぐさま領いた。

そして店の扉に鍵をかけると、店内の中央に現れた黒い霧の中に飛び込んだのである。

一応鍵をかける時には留守番を投げ出したことを怒るだろう作間の顔を思い浮かべたのだが、『どうせ怒られるのは私じやなくて本体だし別にいいよね！』とそれすらも彼女は完全に無視した。

数時間後に本当に怒られることになった本体の庵にとつては迷惑な話である。

「うわつ、右肩どうしたんです!?」

そうしていつものバーについた庵が見たのは、右肩に怪我を負った死柄木と、いつも通りの黒霧の姿だった。

思わず怪我の様子を心配する庵だが、死柄木はそんな彼女の疑問に答えながらも黒霧へと指示を出した。

「今から会いにいく奴にやられた。お前も来い。黒霧、行くぞ」

「いいのですか死柄木弔、ジエスターも一緒に?」

「そうだ。こいつは本体じゃないから問題ない。早くしろ」

「え? え?」

「わかりました。ではすぐに」

話にさっぱりついていけない庵だが、黒霧がゲートを開いて死柄木がそこを通つてどこに行つてしまつた以上、彼女もついていくしかない。

それでもなんとか状況を把握しようと頭を働かせた彼女は、大きく息を吸い込むと目の前に広がる霧に向かつて声を張り上げた。

「黒霧さん! 私全然話ついていけてないんですけどー! 簡単にでいいから説明してくださーい!」

とりあえずゲートがあるんだからまだいるだろうと思つての救援要請である。

果たしてその声はちゃんと黒霧に聞こえていたようで、ゲート状になつてゐる霧の上部に彼の顔らしい霧が浮かび上がつた。

「ヒーロー殺しとの交渉の際に一騒動あつたのです。今死柄木弔が会つてゐるのがそのヒーロー殺しですよ」

「黒霧さんマジありがとー！ でも私あんまりヒーロー殺し好きじやないんですけど……」

「ジェスター、とりあえず死柄木弔も待つて いますので、移動してもらえますか？」
「そこまで言われたら仕方ないかなー」

わかりやすく説明してくれた黒霧にお礼を言つた庵は、少々の不満を述べながらもすぐにゲートへと飛び込んだ。

一瞬の完全な暗闇の後に庵が見たものは、夕日が街並みに沈んでいく光景と、不機嫌そうに腕組みをしている死柄木弔。

そして、そんな街並みを眺める異様な風体の男性である。

きつとこの男がヒーロー殺しなんだろうと思つた庵が彼の事をじろじろ見ついていふと、男は彼女に視線を向けてきた。

「なんだそいつは？」

「おい、自分の事は自分で紹介しろよ」

「あ、はい。そうですね！」

腕組みをした死柄木に促され、庵は元気よくその男に話しかける事にした。
「私は庵です。憑城庵。あなたのお名前はヒーロー殺しですよね？」

「……」

「あ、もしかして敵ヴィランネーム名で紹介した方がいい感じですか？ だつたら私、ジエスターっていう結構お気に入りの名前があつてですね」

「ハア……子供の遊びに付き合っている暇などない。他所でやれ」

「は？」

呆れ果てた目で庵を見た男はすぐさま彼女を視界から外すと、その横で愉快そうに笑みを浮かべている死柄木へと目を向けた。

鋭い目つきで死柄木を見据える男は、どこか哀れみすら感じる口調で死柄木に話しかける。

「何も考えていない遊び感覚の子供を連れて……お前は何がしたいんだ？」

「おいおい、こいつの個性はそう捨てたもんじゃない。俺はこいつを買つてるんだ。あんたと違つてな」

「……勝手にしろ。俺はこの町を正す。邪魔はするな」

男は死柄木と二言三言の言葉を交わすと、最早言う事など何もないとばかりに貯水タンクの上から飛び降りる。

そのままビルからビルへと飛び移り、男はあつという間に姿を消してしまった。

それを黙つて見送った庵は、その姿が見えなくなるや死柄木に言つた。

「私あの人めちや嫌いになつたんですけど。元からお客さん殺してたから嫌いなんですが、もつと嫌いになりました」

「気が合うな。俺もあいつにはムカついてる。何より俺の肩を刺しやがつたしな……」

元から悪かつた評価が僅かな触れ合いで更に悪化したらしく、珍しく本気で嫌そくな顔をする庵。

そんな庵の隣に立つ死柄木も同様に苛立つた顔でステインがいた方向を睨んでいて、そのまま彼女へと話しかけてきた。

「だからちよつと嫌がらせをしようと思つてるんだ。お前もやるだろ?」

「いいですね! やりましょう!」

苛立たし気に首元を搔きむしりながら行われた死柄木の提案に、彼女は全く躊躇うことなく飛びついた。

ヒーロー殺しに対して行う嫌がらせに単純に興味が引かれたのもあるのだが、そもそも留守番をしていた彼女が死柄木の誘いに乗つたのは『いい話』があると言わされたから

なのだ。

しかし現状は、嫌な奴に会わされて侮辱されただけ。

これでは話が違うというものである。

「それで嫌がらせつていつたい何するの？」

「そうだな……まずはお前にも準備してもらわないとな」

「準備？」

「そのまんまじや暴れられないだろ？ お前」

そう言つて庵を指さす死柄木。

現在の彼女の体はトウワイスの個性で作り出された二体目のコピーであり、ほんの僅かな負傷で消え去る脆いものだ。

それを抜きにしても素の庵には普通の女子高生以上の戦闘能力は持ちえない。このまでの活躍は期待できないだろう。

「黒霧と一緒に店に戻つて体を持つてこい。確か体育祭の時にドクターから報酬で貰つてただろ？」

「店長が地下で色々弄つてたヤツの事かな……あれ？ 持つてくるんですか？ 憑依し

てくるんじやなくて？」

「そうだ。早く行つてこい」

頭に疑問符を浮かべながらゲートの向こうに消えていく庵を見送った死柄木は、まだその場に残っている黒霧へと話しかける。

「黒霧、脳無出せ。あいつの出番はヒーローが集まつてきてからだ。その前にちよつと暴れさせとここう」

「……わかりました。ジエスターはなるべく早く連れて戻ります」

そう言つてゲートの向こうに消えていった黒霧と入れ替わりに、死柄木の背後に広がつたゲートから三体の脳無が現れる。

背に翼の生えた個体、長い手足を持つ四ツ目の個体、筋骨隆々で顔のない個体。

どれもU.S.Jで暴れた個体と同じように脳が剥き出しの異様な姿だ。

死柄木は三体の脳無に町で好きに暴れるよう指示を出すと、ビルを飛び降りていく彼らを見ながらほくそ笑む。

「さあ大先輩、あんたの面子も矜持も全部台無しにして地獄に送つてやるよ」

保須市の中心市街地にある大きな広場。

そこは夕暮れ時であつても多くの買い物客や会社帰りのサラリーマンや学生たちで賑わつていて、保須市の中でも特に人が集まる場所として知られている。

三体の脳無が^{ヴィラン}降り立つたのは、そんな広場のど真ん中だつた。

「なつ、なんだこいつぐああつ！」

「ひつ！ うわああああつ!?」

「ヴィランだあああああ！」

突然現れて襲い掛かってきた脳無たちから悲鳴を上げて逃げ惑う大勢の市民。

脳無たちはそんな市民たちへ更なる攻撃を行い、逃げ遅れた何人もの人々が容赦ない攻撃で宙を舞い、重傷を負つて倒れることになった。

更には周囲の車やビルにまで破壊活動を行おうとする脳無たちだが、ここまで大きな騒動を起こして周辺にいるヒーローたちがやつてこないはずがなかつた。

「やめろお前ら！ 市民に手を出すな！」

「既に重傷を負つている市民多数！ 急ぎ応援を！」

「警察は市民の避難誘導を頼む！ 俺たちはこのヴィランどもを！」

悲鳴や爆発音を聞きつけて、ヒーローたちが次々と広場に姿を現した。

先日のステインによるヒーロー襲撃事件の影響で巡回しているヒーローの数も増えていた事もあり、突然の襲撃にも拘わらずかなりの人数だ。

彼らは暴れる脳無達から市民を救うため、話すのも手短にして脳無たちに挑みかかつていく。

そこからは流石に経験を積んだプロヒーローが十人以上もいるだけの事はあるとい

うべきか。

彼らは凶悪な戦闘能力を保持する脳無たちをなんとか広場内に押し留め、それ以上の被害の拡大を防ぐことに成功していた。

しかしその場にもう一体の脳無が増えたことにより、状況は一変する事となる。

「逃げ遅れていた市民を警察に預けてきた！ 状況は？」

「……もう一体増えた！ 今度はピンクのヤツだ！ 気を付けろ」

ヒーローたちが目にしたのは、またも空から降つてきた全身ピンク色の脳無だつた。

全身に走るツギハギが特徴のそのピンク脳無は、赤く輝く剥き出しの眼球で周囲を見回すと鋭い牙が生え揃う口を歪ませて笑い声をあげた。

「アハハハハハ！ イイネ！ ターゲットイッパイカクニン！」

「喋った!?」

「他の奴らと違つて知性があるのか？」

「なら……おい！ お前らなんでこんなことをした！ 目的は何——」

「サア！ ゲームヲハジメマショウカ！」

話す姿を見て対話ができるのではと思つたクレイドルという名の男性ヒーローの言葉をぶつた切り、ピンク脳無は一番最初に目についた彼へと飛び掛かっていく。

驚愕したのは狙われたクレイドルの方である。

先ほどまでの脳無たちは市民もヒーローも関係なく、ただ無作為に暴れまわるだけであり、知性が無いようなその行動は対処も楽だつた。

しかしこのピンク脳無は違うのだと、改めて気付いたのだ。

「俺を狙つてるのか!?」

「ソノトーリイ！」

「おいクレイドルがヤバいぞ！ 助けに……ぐあつ!?」

「クツソこいつら！ 邪魔するな！」

一直線に標的と定めたクレイドルへと突き進み、その命を奪おうとするピンク脳無。

周りのヒーローたちはなんとか標的となつたクレイドルを守ろうとするのだが、ここにきて他の脳無が邪魔をする。

ピンク脳無の元へ向かおうとするヒーローを横から殴りつけ、何かを飛ばそうとする女性ヒーローに空中から襲い掛かり、再度近づこうとするヒーローたちに車やガードレールを投げつけて吹き飛ばす。

それによつてヒーローたちが失つたのはほんの十数秒に過ぎないが、しかしその間にピンク脳無は標的とした男性ヒーローを捕まえてしまつていた。

「クソッ！ 離せ！ この、喰らいやが……？ 個性が——」

「イタダキマース！」

「は？　ぎつ、あ、あ、あ、アツ！？」

助けに入ることができなかつたヒーローたちが見たのは、ピンク脳無がその巨大な口でクレイドルの頭にかぶりつく瞬間だつた。

頭部を丸ごと口の中に収めたピンク色脳無は鋭い歯でブチブチと首を噛み切ると、頭部を失つた肉体から吹き上がる血を浴びながらガリゴリと頭を噛み碎いていく。あまりにも凄惨な殺害方法を目にしたヒーローたちは、まだ戦闘が終わっていないにもかかわらず顔面蒼白になつた。

「あいつ……頭を食いちぎりやがつた……」

「…うぐつ！　ゲエエエツ……！」

「おいしつかりしろ！　まだヴィランは残つてる！　俺たちがなんとかしなきやならんだろうが！」

「でも……でもあいつ……ヒツ！」

口の中からボタボタと血と脳漿を吐き出しながら、ピンク脳無は嘔吐していた一人の女性ヒーローに目を向ける。

ニタリと笑みを浮かべたピンク脳無は、その女性ヒーローに聞こえるような声で喋りながら再び動き出した。

「ツギハ……シヌマデツブシテミヨウカナ！ キニナルシ！」

「あいつ……私を見た!? 私を狙う気だ！」

「おい！ 落ち着け！」

「まずいぞ！ ヴイランが一人いない！ 広場から消えたぞ！」

「はあ!?」

標的にされて混乱するヒーロー。

惨劇に乘じて広場から消える脳無。

まだまだ広がりを見せるこの騒動は、まだまだ終わりそうになかった。

「いいぞその調子だジェスター！ どんどん殺せ！」

双眼鏡で広場の惨状を眺める死柄木は、ジェスターがヒーローの首を引き千切った様子を見て喝采をあげていた。

彼が今いる場所は広場を一望できる少し離れたビルの屋上。

ジェスターがピンク色の脳無に憑依して戦場に飛び込んでいった後は、現場を目に收めようと場所を移動していたのだ。

ちなみに庵の体も一緒に移動してきていて、すぐ近くのタンクの陰に横になつている。

「あなたは参戦なさらないのですか？」

「馬鹿が怪我してんだよ。それにあんだけ楽しそうなんだ。邪魔しちゃ悪い」

怪我をした右肩を抑えながら死柄木は黒霧に言う。

今回の死柄木の目的はヒーロー殺しを思いつきり虚偽にして、バカにして、可能なら殺してしまう事だ。

黒霧は仲間にした方がいいと何度も言つているが、冗談ではなかつた。

「で、黒霧。あいつが暴れてる間にヒーロー殺しは見つけたか？」

「はい。戦闘中でしたので、その路地をマークしてあります」

「戦闘中？ まあいい、そのまま見張つとけよ。とびきり面白い殺り方を考えてあるからな」

「……」

不服そうに黙り込む黒霧を無視し、死柄木は眼下に広がる戦場に双眼鏡を向ける。

広場ではちようどジエスターが女性ヒーローを抱きしめ、全身の骨が折れて内臓が口や尻から飛び出るまで圧殺するところだつた。

これでヒーロー側の被害者は二人目だ。

この調子でいけば更なる被害が期待できるだろう。

「一晩で十人もヒーローを殺せば、世間はもう誰もあなたの事なんぞ覚えちやいないぜ。

ヒーロー殺し

死柄木の考えた作戦の一つがこれだ。

とにかく脳無たちとジエスターでヒーローを殺しまくり、ヒーロー殺しのお株を奪つてやる事である。

そのためにわざわざ人通りの多い場所に脳無を落下させてヒーローを集めただ。既に作戦は半分くらい成功していて、後は可能な限りヒーローを殺し、最後のトドメに入るのみである。

作戦がうまくいっていて上機嫌の死柄木は、いつになく高いテンションで呟いた。
「さあもつと殺せジエスター！ ヒーロー殺しに吠え面をかかせてやろう！」

第19話 フリだと思つて

『——とまあそういうわけだ。まさかお前も保須に来るのは思わなかつたけどな!』

「ヒーロー殺し一人にこの騒動とは随分と派手にやつたな」

『ああ! せつかくだから楽しまないともつたいたいだろ? ジエスターも随分楽しんでるみたいだぜ?』

「あいつは留守番をさせてたはずなんだがなあ」

死柄木からの電話を受けた作間は、保須市の騒動についての話を聞かされていた。

ヒーロー殺しとの接触、その際のちよつとしたいざこざ、そして現在もまだ行われている三体の脳無と合成人形による大暴れ。

留守番を任せていたはずの庵の分身が勝手に店を閉めた事も含め、作間にとつては驚くべき内容の話だつた。

とはいゝ、今更作間ができる事は何もない。

作間はとりあえず後で庵を叱る事を決めた。

『さて、そろそろトドメを刺してやるか。じゃあな』

「わかった。色々と教えてくれて感謝する。頑張れよ」

随分機嫌が良いらしい死柄木との電話を切り、作間はスマホをポケットへとしまった。

そうしてすぐにため息を吐いた作間に、トウワイスは不安そうに話しかける。

「それで店長、庵ちゃんの事は大丈夫なのか？ もう手遅れだろ？」

「いや……どうやら庵の顔バレは心配ないらしい」

「おお！ 死柄木つてのも結構気が利くんだな！」

「俺も割と驚いてる。そういうわけで庵、今後も普通に買い物行つていいからな」

死柄木との電話においてヒーロー殺しとのやり取りや、現在起きている騒動についての説明を色々と聞いた作間だが、彼が一番に気にしたのは庵の顔が世間にバレる可能性についてだった。

今後の事を考えれば、庵が敵ヴァイラン連合の仲間として指名手配されるというのは絶対に避けたい事態だつたからだ。

しかし死柄木もそこは考えていてくれたらしく、体の方はちゃんと貯水タンクの陰に隠してこの後も人目に晒すつもりはないという答えが返ってきていた。

庵が死柄木にとつてちゃんとした仲間として意識されている事が判明し、作間としては二重の意味で一安心である。

庵もスマホで保須の状況を調べながらも内心では自分の顔バレの事を心配していた

のか、それを聞いてすぐに作間の方を向いて安堵の息を吐いた。

「本当ですか!? これでお買い物とかに困らなそうですね！ あとは私もあつちに参加できれば最高だと思うんですけど」

「今日はもうずいぶん楽しんだだろ。ほら、車に乗れよ。店も閉店してるし移動するぞ」「ちえー」

不満げに唇を尖らせる庵はブツブツ文句を言いながらも車へと乗り込んだ。

実は脳無たちの襲撃による影響で周囲の避難が始まり、作間たちが向かおうとしていた焼き肉屋も急遽閉店してしまったのだ。

おかげで別の市に移動するまで焼き肉がお預けとなり、加えてもう一人の自分が楽しそうな事をやっていると聞いて、庵のテンションはガタ落ちだつた。

そんな彼女を無視して、作間もトウワイスと共に車へと乗り込む。

「さて。それじゃあさっさと保須市を出るか。腹も減ってるしな」

作間はそう言ってエンジンをかけると、急ぎ保須市から離れるために車を発車させようとした。

するとともう関われない保須市の騒動はどうでもよくなつたらしく、後部座席では庵とトウワイスの二人が焼き肉で盛り上がり始めた。

「よし！ それじゃあ今度こそいいお店見つけないとね！」

「そうだな！　俺も手伝うぜ庵ちゃん！どこでもいいから連れてつてくれ！」

「お前ら、警察に目を付けられない程度には静かにやつてくれよ」

駐車場周辺では、既に警察による避難誘導が行われているのだ。

その中を走らなければいけない作間は騒ぐ二人に厳しく注意すると、今度こそ車を発車させるのだった。

脳無たちが降り立つた保須市の中心市街地。

そこではジェスター率いる脳無たちと、市内から集まってきたヒーローたちの戦いが繰り広げられていた。

「カズガソロウトサスガニコワイカナ？　デモヒトリヒトリハソウデモナイネ！」

「何を……っ!?　ごがつ！」

ピンク色の巨体で縦横無尽に走り回るジェスターは、嘲笑いながらまた一人のヒーローを手にかける。

そのヒーローは全身の肌を岩のように変化させることができたヒーローだったが、ジェスターが接近した途端にそれが解除され、あつという間に胴体を左右から叩き潰されていた。

ペしやんこになつた胴体からは折れた肋骨や臓物まみれの血が溢れ、一瞬のうちに目から光が消えていく。

「これでジエスターの手にかかつたヒーローの数は、既に七人に達していた。

「ロツクレイジがやられた！」

「気を付けろ！　あいつには絶対に近づくな！」

「わかってる！　でも個性が使えなくなるなんてまるで……！」

「それより遠距離攻撃できる奴は飛んでる奴を対処しろ！　すぐにだ！」

「地上の顔のないデカブツはこつちに任せろ！」

抜群の危険性を見せつけるジエスターを名乗るピンク脳無を警戒するヒーローたちだが、当然それだけを警戒すればいいわけではない。

付かず離れずの位置にいる二体の脳無にも、既にジエスターを警戒していたヒーローを一人ずつ殺されている。

合計九名の犠牲者が出ている惨状だが、逆を言えばそれでもなお殺されずに抗つているヒーローたちの実力はかなり高いと言えるだろう。

既にジエスターの持つ個性もバレてしまつてしまつており、彼女からしてもなかなか殺す機会が見いだせない状況になつていた。

「よくもやつてくれたな、ヴィラン！」

広場から離れてしまった脳無の一体を仕留めたエンデヴァーが姿を現したのは、ちょうどそのタイミングだった。

「つ！ エンデヴァーさん！」

「な、No.2！ 助かつた！」

「ピンクのヤツは俺が何とかする。他の対処は任せるぞ！」

広場の惨状を見て激昂する彼の姿に、ヒーローたちは助かつたとばかりに顔を明るくして喜んでいる。

エンデヴァーはそんなヒーローたちに下がる様に指示を出すと、すぐさまジエスターの方を睨みつけた。

「エンデヴァー？ ワタシシデモシッテルユウメイジンジヤン！」

「貴様のようなものに知られていても嬉しくもない！ ふん！」

エンデヴァーの登場に興奮するジエスターは駆け出そうとしたが、エンデヴァーはうまく距離を取りながらジエスターに膨大な量の炎を浴びせていく。

この広場での戦闘でヒーローたちが得られた情報は、この広場に向かっている途中だつたエンデヴァーにも既に与えられていたのだ。

『ピンクのヴィランに約10メートルほどまで近づくと個性が使えなくなる』という事を事前に知っている以上、彼がその範囲に入ることは決していない。

いくらジエスターが追いかけても決して近づかせずに炎で押し戻し、しかし離れすぎて炎の威力が弱まらない程度の距離を保つて燃やし続けていた。

「アアアアアツモウ！ コンナノツマンナイ！」

「それは結構。このまま力尽きるまで焙らせてもらおう」

「ムガアアアアツ！ ムカツクツ！ コウイウトキハ……ン？」

子供の癪癩のようにぎやあぎやあと喚くジエスターに、油断することなく炎の放射を続けるエンデヴァー。

しかし、左右に飛び跳ねたりジャンプしたりして炎から逃れようとしていたジエスターが、急にその動きを止めた。

そして唐突にその場で小さく蹲ると、炎の中で小さく何かを呟いた。

「ワカッタ。コツチハモウツマンナイカラ、コンティニユースルネ」

「……なんだ？」

自身の放つ炎の勢いに遮られてジエスターが何を言つたのかまではわからなかつたエンデヴァーだが、明らかに異様なその変容ぶりに警戒を高める。

だが、蹲つていたジエスターが足に力を込めている事には気付けなかつた。

「サヨーナラエンデヴァー！ モウアイタクナイネ！」

「何つ！」

驚愕するエンデヴァーの前で、ジェスターはそのまま垂直に飛び上がった。
弾丸のような勢いで炎の中から飛び出し、速度が衰えないまま上空へとすつ飛んでいく。

そしてちようどそこには、不自然なほど大量の黒い霧が漂っていた。
「何の個性だか知らんが逃がすわけには……くつ！ 邪魔だぞけ！」

気付いたエンデヴァーが追いかけようとした途端、他のヒーローを振り切った筋骨隆々な脳無が掴みかかる。

明らかに足止めのためだけに掴みかかつてきただその脳無の頭を高温の炎で焼き切つたエンデヴァーは、上空を見て舌打ちを漏らした。

「逃がしたか」

上空にはジェスターどころか、漂っていたはずの黒い霧すら残っていない。

何人のヒーローを殺した犯人を逃がしてしまったと理解したエンデヴァーは、その顔を酷く歪ませるのだつた。

黒霧にジェスターを回収するように指示を出した死柄木は、ある路地裏を一望できるビルの上に立っていた。

彼はその路地裏で起きていた戦闘の様子を双眼鏡で覗き見ながら、庵を呼び戻すタイミングを見計らっていたのだ。

そんな死柄木の隣に、憑依を解除して元の体に戻った庵と、ジエスターとしての体を回収した黒霧がやってくる。

黒霧に渡されたコートのフードを目深に被っている庵は先ほどの戦闘の事を思い出しているのか、かなり不満げな様子で死柄木に愚痴をぶちまけた。

「あのおっさん強すぎ！ 全つ然近づけないしさあ！ あんなにいっぱい炎出すとかズルじやん！」

「あの体で勝てないならまた別ので試せばいいだろ？ 気にするなよ」

「ていうかこの体に戻つてもまだ暑い気がする……これ脱いでいい？」

「駄目だ。作間にお前の顔は晒すなって言われてる。 それより……見えてるよな？ アレ」

死柄木はそう言つて顎をしゃくり、先ほどまで自分が見ていた路地裏を見る様に庵に促す。

庵はその言葉と共に受け取つた双眼鏡をのぞき込み、一気に上機嫌になつた。

そこには、見覚えのある雄英高校の生徒たちによつて縛り上げられるヒーロー殺しの姿があつた。

傍に座り込むプロヒーローや周囲の荒れ具合からいつて戦闘があつたのは確実であり、状況から見てもヒーロー殺しが敗北したのは間違いないと言えるだろう。

つまり、ヒーロー殺しはヒーローでもない子供に負けたという事になる。

「ふふーっ。子供に負けるとか超ウケるんですけど！」

「だよな！　えらつそうにしやがつてまさかあんなガキどもに負けるとは！」

U.S.Jで起きたことはさっぱり忘れ、二人はグラグラと笑いあう。

その横に佇む黒霧は流れについていけていないのか、どこか困惑したような様子で二人を眺めていた。

そのまま涙が出るほど面白がつていた死柄木と庵だが、黒霧から路地裏で動きがあった事を教えて笑うのを止める。

どうやらヒーロー殺しの拘束を終えた生徒たちが、路地裏を出て通りに出ようとしているようだ。

「さて、あいつには随分笑わせてもらつたが、せつかくだからこのまま殺つちまおう」

「いえっさー！　でもどうやつて殺すの？　確かに、本当だつたらあのピンクちゃんに憑依して不意打ちとかする予定だつたよね？」

「別にそれでもいいんだけどな。せつかくガキどもにボコられてくれたんだ。もつと酷い死に方をさせてやろう」

死柄木はそう言つてニヤリと笑うと、さつきからずつとすぐ近くの床に転がつていた
一人の警察官を指し示した。

庵もそれを見て死柄木のやりたい事を理解したのか、ぱあつと顔を輝かせる。

「あいつが負けそうになつてゐるのを見て黒霧に用意させた。それなら簡単に近づけるだ
ろ？」

「きやーつ！ 死柄木さん天才！ さつすがあ！」

「わかつたらさつさと行けよ、黒霧に送らせる」

「りよーかいでーす！」

元気よく返事をして警察官の体に憑依した庵は、すぐさま黒霧が作り出したゲートに
飛び込んで姿を消した。

死柄木も一応庵の演技に関しては一定の評価を置いている。

きちんと警察官としての演技を行い、ヒーロー殺しを捕らえた生徒たちに近づき、隙
を見てヒーロー殺しを仕留めるだらう事を疑つてはいなかつた。

だからこそ死柄木はこのまま観客に徹することを決め、路地裏から出た先の様子が
もつとわかる場所に移動しようと決め、黒霧に作らせたゲートをくぐろうとした。

そんな時である。

死柄木は、遠くからだんだんと羽ばたく音が近づいてくることに気付くのだった。

警察官に憑依した庵は困惑していた。

最初、庵にとって拘束したヒーロー殺しと一緒にいる生徒に近づくのは、彼女にとってとても簡単な事だった。

彼らは警察官の姿をしている庵をすんなり信じ込み、まるで疑わなかつたからだ。

その場にエンデヴァーに指示を受けたヒーローたちが救援にやつてきた時もちゃんと誤魔化せたし、そのせいでヒーロー殺しを殺す隙がさっぱり無くなつたとはいえ、時間を探ければ近づく瞬間くらいはできるはずだつた。

しかし庵が困惑する事になるのはここからである。

突然に空から脳無が降つてきて、優先目標であるはずのヒーロー殺しではなく何故か生徒の一人を攫つた事。

いつの間にか意識を取り戻したヒーロー殺しが拘束から抜け出し、どうやつてかその脳無を空から落として殺した事。

そしてその場に空を飛べる脳無を追いかけてきたエンデヴァーが姿を現した事。

どれもこれも庵にとってはスピード展開過ぎてわけがわからない事なのだが、中でも特に理解ができないのは、脳無を殺してこちらを振り返つたヒーロー殺しを前にして、

その場にいる全員が動きを止めてしまった事だ。

「贋物……正さねば……誰かが血に染まらねば……英雄^{ヒーロー}を取り戻さねば！」

（なんでエンデヴァーまで止まつてゐるんだろう。あんなに強いのに）

ヒーロー殺しの持つ気迫、異常なほどの殺意をぶつけられて、その場にいる全員が顔色を変えて動きを止める。

そんな中、庵は一人だけ呑気に首を傾げていた。

安全圏から憑依を行つてゐる庵には、ヒーロー殺しの気迫も殺意は伝わらなかつた。

せいぜい「なんかすごい顔でよくわからない事を言つてるな」くらいで、それを受けた周りの人間が動けない理由がさっぱりわからなかつたのだ。

とはいへ周りが動きを止め、ヒーロー殺しに注目している状況は庵にとつては都合が良い。

おかげで誰にも気付かない内に、彼女は拳銃を取り出して狙いを定めていた。

「俺を殺していいのは、本物^{オールマイト}の英雄だけだ！」

そう吠えるステインの気迫の前に未だ動けないヒーローたち。

ヒーロー殺しから放たれる異常なまでの威圧によつて場が支配され、誰も警察官に扮した庵を気に留めない。

そんな中で複数回の銃声が響き渡り、胸に弾丸を受けたヒーロー殺しが仰向けに倒れ

ていく。

ヒーローたちの視線が一気に集まるのを感じながら、庵は借り物の顔でいつもの笑顔を浮かべていた。

「あんなこと言うからフリだと思つて」

そう言つた途端に何かを理解したらしい小柄な老人が突進してくるのを最後に見ながら、庵はその場で憑依を解除するのだつた。

第20話 新たな始まり

保須市での騒動から数日。

ある男によつて呼び出された作間は、黒霧の作つたゲートを通つてどことも知れぬ場所へとやつてきていた。

そこで作間を待つていたのは、顔の上半分が醜い瘢痕で覆われた男だつた。

「やあ、こうして会うのは初めてかな。今回は弔が迷惑をかけたね、作間」

「……いや、気にしてませんよ。実害は出てませんから」

「そうかい？ ならよかつた。君には今後も弔と仲良くしてもらいたいからね」

転移してすぐに男に話しかけられた作間はまず周囲の状況を把握した。

現在作間がいるのは、男に繋がれた何らかの装置が発する光だけが部屋の中を照らず、窓のない薄暗い密室。

つまり、どこにも逃げ道のない空間である。

しかし目の前の男の正体の予想がついている作間にとつては、その事はあまり大した問題ではなかつた。

もしも男の正体が作間の考える通りの人物だつた場合、こうして手の届くような距離

にいる時点ではどうせ逃げられはしないのだから。

「僕の自己紹介は必要かな？」
作間

緊張して身構える作間に對し、口を開いたのはやはりその男だつた。

まるで作間が当然知っているだろうと、試すかのような口ぶり。

間違いは許されないだろうと感じ取つた作間は、できれば口にせずにすませたかつたその言葉を口にした。

「あなたはあのオール・フォー・ワン^A。^F、でいいんですよね？」

「……やっぱり優秀だね、見込み違いではなくてよかつたよ。君の言う通り、僕がそのオール・フォー・ワンだ」

作間の答えを聞いて、AFOは嬉しそうに自分の名前を口にした。

そもそもそれが名前なのかどうか、作間は知らない。

しかし裏社会に生きていてその名前を知らない人間はモグリだ。そう言われるほど、裏社会では未だにAFOの伝説は語り継がれている。

かつて義爛の下にいた頃に、作間もよくその名を聞かされたものだつた。

「さて、君が僕の事を知つているように、僕も君の事を知つている。話を本題に戻そうか」

そんな相手に知られていると言われて作間は内心ぎくりとしたが、顔には出さずにA

F O の話に耳を傾ける。

「実を言うとね。先日の保須での騒動、僕は弔があそこまでやるとは思っていなかつた」「あそこまで……つていうと、それはヒーロー九人死亡の方とヒーロー殺し死亡の方のどつちですか？」

「もちろんヒーロー殺しの方だよ。弔がちゃんと計画立てて彼を殺しにかかるとは、嬉しい誤算さ」

誤算と言いながらも、A F O の声はかなり上機嫌だつた。

どうやら本当に死柄木弔が予想以上の成長を見せたことが嬉しいらしい。

「特に、警察官に撃たせたのはいい手だつた」

「まあ……今じや世間がえらい騒ぎになつてますからね」

保須での事件は作間が先ほど言つたように、大きく二つに分かれる。

四人の凶惡なヴィランによつて保須市の中央広場が破壊され、大勢の市民が怪我をし、そしてヒーローが九人も殺された事件。

最初の内は特に凶惡なヴィランを取り逃した事に対するヒーローへのバッティングが多少はあつたのだが、ヒーローが必死で頑張つたからこそ市民の死亡者が出なかつたのだと、今ではその場にいたヒーローを評価する流れになつてゐる。

もちろんヒーローの力不足を嘆く声もあがつてゐるが、亡くなつたヒーローのファン

による追悼メッセージに覆い隠されている形だ。

そしてもう一つ、ヒーロー殺しが警察官に射殺された事件。

撃たれたヒーロー殺しがいくら凶悪犯であるとはいっても、既に気を失っている相手に何発も撃ちこんだのは大きな問題として取りざたされた。

特に問題なのは、その一部始終を収めた動画がネット上にアップされてしまつた事だ。

ヴィランの主張やその死の瞬間が収められた動画という事で動画はすぐに削除されるが、その削除という行為そのものが警察の失態を隠すための隠蔽工作なのではないかと大炎上を生んだ。

その場にいたヒーローや撃つた警察官本人からの証言を得た警察はすぐに『ヴィランの個性による洗脳を受けて発砲させられたのではないか』との会見を開いたのだが、拡散された動画を見た人々からは未だに激しい非難に晒され続けている。

まあ、動画が公開された後からヴィランの個性のせいだなんだと言つても言い訳にしか聞こえないのは当然だろう。

「今どろ警察は血眼になつて洗脳系の個性について探つてゐるだらうね。憑城庵ジェスターが探ら
れる対策は取つてゐるのかい？」

「もちろん。じやなきや従業員として雇えませんよ」

AFOに尋ねられ、作間は庵を雇つた時の事を教える。

元々彼女は作間の元に来た時、ちょうど高校二年生だった。

かなりいい家に生まれていた事もあり、突然の失踪という形にするには作間にとつてかなり危険な存在だったのだ。

だから作間は憑城庵を『理想郷』の従業員として迎えるにあたり、人体創造によつて庵の死体を用意し、警察とのコネを使つて彼女が自殺した事にしたのである。

「なるほど、死んだ事になつていれば個性届から探る際にも基本は除外されるからね」「というかあいつの場合、そもそも個性届を出していないうらしいんですよ」

「ほう？」

「あいつが自分の個性に気付いたのは高校に入つてから、らしいんですよね。まあ本人の言葉なんでどこまで信憑性があるかわかりませんけど」

実際それを聞いた時、作間はかなり驚いた。

個性なんて小学校に入る頃にはだいたいの奴に発現しているのが普通で、自分の個性の使い方だつて成長と共になんとなく気付いていくものだ。

しかし実際に調べてみれば庵の個性届は提出されておらず、戸籍にも無個性と記されていた。

おかげで作間は楽をすることができたのである。

「ふむ……個性の発動条件のせいかな？ 確か、意識のない人間と手を繋ぐ事だつただろう」

「ええ。どうやら高校生になるまで一度もそんな状況に遭遇しなかつたようです」

そして初めて行つた憑依で、庵はクラスメイトを一人自殺させた。

それが作間の聞いた庵の初憑依の話だ。

庵はその後も憑依の事を誰にも話さず、一年間大小問わず幾つもの犯罪を犯した末に『理想郷』へとやつてきたのである。

「いずれにしろ、警察がジエスターの正体へ辿り着くことは無いというわけだね。それはよかつた」

「ええ。あいつには今後も役に立つてもらわないと困りますから……それはそうと、一つ聞きたことがあるんですが、いいですか？」

「いいとも。遠慮せず聞きたまえ」

「それはよかつた。ヒーロー殺しの死体についての事なんですが——」

「ところで作間。また今度、I・アイランドに行くらしいね」

その後もピンク脳無の後継機についてや今後の敵連合の事についてなどを話し、一段

落したところでAFOは作間にそう言つた。

「どうやら庵が黒霧や死柄木に言いふらしたらしく、それがAFOの耳にまで届いたようだ。」

「ええ。また新しい依頼が来たので」

「内容は?」

「当然のようにそう問い合わせてくるAFO。」

「普通なら依頼の内容を他人に漏らすような事をしない作間だが、こんな状況で隠すほど愚かではない。」

「依頼人は『キュリオス』。内容は『[I・エキスボ]のプレオープン中に開かれるレセプションパーティに出席して著名人のドールを作成し引き渡す事』ですね」

作間はAFOが聞き入る前で、今回の依頼について詳細に口にしていく。
日時、潜入方法、報酬……そうして口にしていると、いつの間にかAFOが笑みを浮かべている事に気付いた。

「何ですか?」

「いや、『I・エキスボ』か。そうか……そういえばそんなものもあつたなあ。今思い出したよ」

うんうんと頷きながら、AFOは困惑する作間に話しかける。

「実は【I・エキスボ】で面白いイベントがあるのを思い出しちゃうね」

「……もしかしてヴィラン絡みで何か事件が？」

「正解だよ作間。ちよつとした襲撃計画があつてね、僕も少し手を貸してあげたんだ」

悪戯をしたかのような口調でそう告げるAFOに、作間は内心ため息を吐いた。

絶対にちよつとした襲撃ではないのだろうと予想ができてしまつたのだ。

これから行く島が戦場と化す様子が容易に想像できて、作間は一気に憂鬱になつた。

「だから、僕も君に依頼をさせてもらつてもいいかな？」

「その状況で俺に何を頼みたいんです？」

襲撃計画があるのであれば、確かに作間にとつては動きやすくなるだろう。

ヒーローたちは襲撃の犯人たちに目が行くだろうし、セキュリティに隙ができるのは想像できる。

何でもできてしまいそุดからこそ、どんな事を頼まれるか気が気でないのだ。

「僕が頼むのは簡単な事だよ。ほんの少し、オールマイトの顔を歪めてやりたいだけだから」

そう言つて笑みを浮かべるAFOが口にした依頼に、作間は少しだけ拍子抜けしながら首を縦に振つたのだった。

「……あー、残念だつたね死柄木さん。テレビでもいっぱいあの人の顔見る事になつて」「いや、いい。確かにムカつくが……あいつはもう死んでるからな。そのうちスッキリするだろ。ハア……」

(絶対根に持つてるよこれ)

いつものバーにて。

保須の事件を報道するニュース番組を前に、不機嫌さを隠しきれない死柄木の隣で、庵は死柄木の反応を面白がりながらオレンジジュースを飲んでいた。

あれから数日が経つて、ニュース番組はかなり詳細な情報を垂れ流す様になつていた。

内容は専ら死んだヒーロー殺し、ステインについて。

死んだヒーローに関しては悲しみをあまり蒸し返すのもよくないと、各ヒーローの活躍をまとめた番組をやつて以来は落ち着いたものだ。

暴れた脳無たちの仲間として見られているステインの主張などの方が視聴率が取れるという判断なのだろう。

おかげでせつかく殺したというのに、死柄木も庵も、テレビをつけるたびに見たくも

ないステインの顔を揉めさせられていた。

「もつと私の活躍を映してほしいよね！ こう、頭をプチユつたところとか」「何を言つてるんだお前」

「そんなものをテレビに映せるはずないのでは？」

「二人ともマジレスやめてよ！ ああ……こんな時トウワイスさんなら面白いツツコミをくれるのに」

一緒にふざけてくれない二人に文句を言いながらぶーたれる庵。

しかし残念ながら、トウワイスは『理想郷』の店番中である。

今頃は一人でソファーに腰かけながらゲームでもやっている事だろう。

「あーあ。早くまた何か面白い事起きないかなー」

「I・アイランドには作間だけで行くのか？ お前も行けばいいだろ」

「監視役が来るから連れていけないんだってさ。ずるいよね！ 私も行つて遊びたいのに！」

「作間は遊びに行くわけではないのでは？」

「わかってるけど暇なんだもん。だから死柄木さん、一緒に買い物とか付き合つてくれない？」

「ふざけんな」

暇そうに体をぐらぐら動かしながら、黒霧と死柄木に言葉を投げかける庵。返つてくる反応は冷たいものの、それもまた新感触だと楽しみながら、庵は楽しい時間過ごしていく。

世間のざわめきとは裏腹に、敵連合は束の間の休息のようなものを満喫しているのだつた。

番外 とある掲示板の書き込み

【再現オナホ】 R o Dについて語るスレ Part 7 【手渡し販売】

1 名前：E R Oの名無しさん *****/***/* * * . * * . * * I D : *

このスレはAVメーカーのR o Dの作品・イベントについてまつたり語るスレです。
次スレは>>900が立ててください。無理ならば誰か代役を頼んでください。
また荒らしや煽りはスルーするようにしてください。
公式HPはこちら↓

2 名前：E R Oの名無しさん
>>1

乙

3 名前 : E R O の名無しさん
おつおつ

4 名前 : E R O の名無しさん
1 おつ

5 名前 : E R O の名無しさん
イベントどうだつたん?
俺行けなかつた……

6 名前 : E R O の名無しさん
みんな販売会どうだつた!?
もちろん10個買つたよな!

7 名前 : E R O の名無しさん

知つてはいたけどガチで似ててビビったよ俺は。
本物と区別つかなかつたぞ二人とも。

8 名前：EROの名無しさん

>>5

購入が10個までつてのは事前情報通りだつたけど、手渡しのサービスは想像以上
だつた。

てかあんなん想像できねーつて

9 名前：EROの名無しさん

俺も参加してきました。

いやーマジでそつくりだつたな！

肝心のオナホもかなりクオリティ高いし！

10 名前：EROの名無しさん

クソア！

俺も行きたかつた！

11 名前：EROの名無しさん

俺公式ファンクラブ入つたわ。

これからは眞面目にヒーローでシコろう

12 名前：EROの名無しさん

>>7

似てるのもすげーけど衣装もヤバいよなあれ。

いつも町中で見かけるヒーロースーツなのに透け透けで色々丸見えだつたし
ヒーロー見る目が変わりそうだわ

13 名前：EROの名無しさん

>>11

眞面目とはいつたい

14 名前：EROの名無しさん

>>11

そのファンクラブ絶対本物の方だろ。
まあ工口いことには変わりないからいいか。

- 15 名前：EROの名無しさん
いやあれ偽物！偽物だから！
そつくりさんなだけだから！ 間違つても普段の会話の中で話題にすんなよハブら
れるからな！
俺みたいに

16 名前：EROの名無しさん
俺行けなかつたんだけどそんなにヤバい格好してたんか？

17 名前：EROの名無しさん
路上歩いたら捕まる格好だよアレは

18 名前：EROの名無しさん
ヤバい格好。

ぶつちやけ裸よりヤバい。

ミツドナイトとM t. レディの普段の格好見慣れてる分余計に。

19 名前：EROの名無しさん

>>16

これを見てみろよ。どつからどう見たって痴女だ。

↙【画像】《スリングショット姿のミツ●ナイトが》

20 名前：EROの名無しさん

>>16

ほらよ

↙【画像】《マイクロビキニ姿のM t. ●ディがカメラに向けてダブルピース》

21 名前：EROの名無しさん

わいせつ物陳列罪です

でも好き

↙【画像】《色々と透けてるヒーロースーツの二人がオナホの箱を両手で手渡すポーズ》

21 名前：EROの名無しさん
ウワー行きたかつた！

なんで仕事だつたんだろう俺。マジで

22 名前：EROの名無しさん
ちよつと待てよ

格好がヒーローコスと違うぞ

24 名前：EROの名無しさん
でもこつちのがエロいからヨシ！

・・・

75 名前：EROの名無しさん
でもぶつちやけ再現オナホってどうなん？

クオリティ高いんか？

81 名前：EROの名無しさん

>>75

高い

82 名前：EROの名無しさん

>>75

オナホを手渡して貰える時点でクオリティとかどうでもいいだろ

83 名前：EROの名無しさん

オナホ歴十余年の俺が断言するが素晴らしい出来だ。

ふう……

84 名前：EROの名無しさん

抜いてんじやねえよ！

85 名前：EROの名無しさん
抜いてんじやねえよ！

86 名前：EROの名無しさん
いやまあ実際クオリティ高いよこれ。
あんま詳しいことは言えんけど、マジで本物みたいな感じよ

87 名前：EROの名無しさん
妄想乙

88 名前：EROの名無しさん
再現モノに夢を見るのは自由ですよ

89 名前：EROの名無しさん
でもあんな売られ方で手渡しされたら誰だつて信じるだろ？
俺だつて信じる

90 名前：EROの名無しさん
というかシチュだけで抜けるんだが？

91 名前：EROの名無しさん
わかりみ

・・

190 名前：EROの名無しさん

それにしてもよくこんなイベントができたよな。

193 名前：EROの名無しさん

>>190

それはどういう意味で言つているんだ

194 名前：EROの名無しさん

>>190

最近のR.O.Dかなり儲かつてるからね。

売上ランキングでもヒーローものAVのジャンルじや上位独占状態だし。
それ考えたらこのくらいの規模のイベントもなくはないでしょ。

195 名前：EROの名無しさん

>>190

格好が過激すぎるって意味で言つてるなら、そもそもあの二人の格好はエロ過ぎるの
が悪いと思う。

196 名前：EROの名無しさん

>>194

あー。そんなに儲かつてるのか。

いきなりオナホール何千個も売り出すとかどつから資金用意したのか気になつてた
んだ。

やっぱヒーロー人気にあやかると売れるもんなんだね

199 名前：EROの名無しさん

>>196

ヒーローAVなんか昔からあつたろ。
クオリティの善し悪しはともかく。

200 名前：EROの名無しさん

最近のR.O.Dのクオリティが異常なだけで、ヒーローAVモノ自体は昔からある人気
ジャンルだよ。

なんならR.O.Dも昔にクソみたいなの出してる

201 名前：EROの名無しさん

ぶつちやけヒーローAVつて危ないんじやないの？

ヒーローから睨まれてそう

202 名前：EROの名無しさん

>>200

あれ单なるコスプレもんだろ？

俺はあれをヒーローAVとは認めたくない

203 名前：EROの名無しさん

ビデオの売り上げもいいし今回の販売会も大盛況だつたんだろう?
こりや今後のイベントも期待できそうだな

204 名前：EROの名無しさん

>>201

考えすぎだろ。

ヒーローAVなんて今まで何本売られてきたと思つてゐるんだ

205 名前：EROの名無しさん

>>201

そりや女性ヒーローからはめちゃくちゃ嫌われてるだろ

206 名前：EROの名無しさん

タイトルもちゃんと伏字使つてゐし、ビデオ内でも名前出す時はP音かぶさつてゐる。

昔のヒーローAVで守られてたルールはきつちり守ってる以上、今更ダメって事にはならんやろ

207 名前：EROの名無しさん

というかこの流れでほかのどこからもヒーローAV出してくれないかな

208 名前：EROの名無しさん

>>206

今パッケージ見たらちゃんと本人じゃないって書いてあつたわ
そういうことね。

ちゃんと対策してたわけか

209 名前：EROの名無しさん

ここまでそつくりのものは無理でも、他がどんなヒーローAV作るのかは気になるね

210 名前：EROの名無しさん

まあ今は流れ來てるし他からも出すでしょ

今後に期待だね

352 名前：EROの名無しさん

そういうやあの二人の女優さん、どんな人だつた？

356 名前：EROの名無しさん

>>352

販売会行つて直接見たけど、補正無しでも完全に本人と同じだつたよ
あれ絶対個性使つてるとと思う

357 名前：EROの名無しさん

>>352

二人とも全然恥ずかしそうなそぶりを見せずに終始笑顔で楽しそうだつたのに驚い
たわ。

アレが演技なのかガチでエロいの好きなのかはわからん

358 名前：EROの名無しさん

>>353

頼めば胸揺らしたり尻向けたりしてくれるくらいにはサービス精神旺盛だつた

359 名前：EROの名無しさん

>>356

顔を変える個性の女優さん見たことがあるよ。

ちよつと違和感は覚える程度のそつくり感だつたけど。

360 名前：EROの名無しさん

>>358

なんならちよつと触らせてもくれたぞ

361 名前：EROの名無しさん

>>358

マジかよ！

俺も頼めばよかつた！

362 名前：EROの名無しさん

>>359

体つきのエロさまで見分けつかないレベルなんだよなあ
公式で出してる写真と見比べても区別がつかないよ

363 名前：EROの名無しさん

>>360

エツツツツ

次のイベントあつたら俺も頼んでみよ

・・・

531 名前：EROの名無しさん

というか俺はてつきり変身系の個性だと思つてたのに、二人いたせいでわけわからな

くなつたんだけど。

534 名前：EROの名無しさん
 >>531

二人いただけじやないか？

536 名前：EROの名無しさん
 >>534

いや、あそこまでソックリに変身できる個性つてかなりレアだろ。
 そう都合よく二人もいるか？

537 名前：EROの名無しさん
 >>534

そんな都合よく変身系個性持つてるエロ大好き女が二人も出てくるもんかね

538 名前：EROの名無しさん
 ていうかそんないい個性持つてたらヒーローなるだろ

540 名前：EROの名無しさん
せやな

541 名前：EROの名無しさん
それは言えてる

672 名前：EROの名無しさん
しかしこここまでそつくりだと本物のヒーローに何かしそうな奴出てきそうだな
そこだけが不安だわ

675 名前：EROの名無しさん
>>672
いやいやいやありえねーわ

676 名前：EROの名無しさん

>>672

注意書き読みよ大丈夫か?
デカデカと書いてあるだろ?

677 名前：EROの名無しさん
>>672

どんな妄想だよ

678 名前：EROの名無しさん
ちゃんとそつくりさんと理解して楽しんでれば問題にはならないんだからさ
そこを勘違いしちゃだめよ

679 名前：EROの名無しさん

そりや色々と配慮して作つてはあるだろうけど、ヒーローに悪いイメージ付くのは間違いないだろ

680 名前：EROの名無しさん

ヒーローAV見てヒーローに襲い掛かるアホがいたら俺は笑うよ
だつてヒーローに勝てるわけないじやん

681 名前：EROの名無しさん
>>679

実際は悪影響どころか良い影響出てるけどな
イベント後に公式ファンクラブの人数増えてるし

682 名前：EROの名無しさん

これからもR.O.Dの作品楽しみたいと思つたら変な事しないように。
そういうことだろ？

誰だつてこれからの作品見れなくなるのは嫌だからな

683 名前：EROの名無しさん

そういうことね

684 名前：EROの名無しさん

公式ファンクラブの人数増えてんの冗談かと思つたらマジじやねーか！

685 名前：EROの名無しさん

Mt・レディについてはあまりよく知らなかつた俺だけど、
今回の販売会のおかげでファンになつたよ

686 名前：EROの名無しさん

活躍してる地域が違うとあまり目にしない女性ヒーローって割と多いからな
確かにそういうヒーローにとつては男性ファン獲得のチャンス……か？

687 名前：EROの名無しさん

>>685

そういうやデビューしてからまだ1年ちよつとか
あまりに工口いんで忘れてた

688 名前：EROの名無しさん

俺もプツシーキヤツツはあまりよく知らなかつたが今はファンだよ

間に挟まりたい

6 8 9 名前：E R O の名無しさん

>>6 8 6

そんなファンでも増えれば嬉しいものなのかな

幕間 热狂明けて

作間が依頼を受けて再びI・アイランドへと出発する少し前。

死柄木たち『敵連合』のアジトとなつてゐるバーには、新しく三人の客が訪れていた。
「よう嬢ちゃん、分倍河原の奴は元気にしてるか?」

「うん! 仲良くしてるとよー。すつごい仲良しだよ。今は店でお留守番」
「そうかい。まあその調子で仲良くしてやつてくれ」

一人は庵も良く知る裏社会の大物ブローカー、義爛。(ギラン)

今回、仲介役として二人のヴィランをここに連れてきた張本人である。

本人は連れてきた時点で仕事を終えたつもりなのか、男女二人のヴィランに自己紹介をさせた後は暇そうな庵と駄弁つていた。

しかし『敵連合』との接触には少し慎重になつてゐるらしく、庵と話しながらもその目は注意深く死柄木の方へと向いてゐる。

「ステ様が死んじやつて残念だけどピンクちゃんが羨ましいです! あと私もヒーローかじつてみたい!」

「……最近の女子高生つてのはこんななんばっかりかよ」

「ねえねえヴィラン連合入れてよ弔くん！」

「ハア……」

もう一人は義爛が連れてきた女子高生、渡我被身子。トガヒミコ。

まだ年若い少女でありながら、連續失血死事件の容疑者として追われる立派なヴィランである。

最初の自己紹介からそのイカれっぷりを露わにしていたトガの前で、死柄木はうんざりした顔をしながら溜め息を吐いていた。

最初、『憑城庵ほどイカれたガキじやないだろう』なんて事を思っていた彼だったが、僅かな会話のみであつという間にその評価は覆されたわけである。

「……」

「ねえねえ暇なら話さない？ 義爛さん電話があるって外行っちゃつたんだよね」

「うぜえな……」

そして最後の一人、全身に焼け爛れた皮膚を繋ぎ合わせたような跡のある男、茶毘。

自己紹介で『ヒーロー殺しの遺志を全うする』と宣言した彼は他に言いたいこともなかつたのか、イラつく死柄木にトガが話しかけるのを傍観しながら壁際に佇んでいた。

しかし、暇になつた庵が初対面の茶毘に興味を抱かないはずがなかつた。

いきなりそんな絡ま對方をされば茶毘でなくとも怒りそうなものだが、実は茶毘の

方にも庵に聞きたいことがあつた。

「お前、さつき個性は『憑依』だつて言つてたよな？」

「そうだよー。あと、『お前』じゃなくて『ジエスターちゃん』か『庵ちゃん』にしてね」

「……」

「無視しないでよ！」

ぶんすか怒るフリをする庵を冷めた目で見ながら、茶毘は先ほど彼女が言つた言葉を頭の中で整理する。

義爛に連れられたトガと茶毘の紹介が終わつた後、死柄木と黒霧、そして庵もまた自己紹介を行つていたのだ。

まあ死柄木は不機嫌そうに名前を言い捨てただけだが、とにかくその時に庵は自分の個性や『理想郷』の事についても口にしていた。

『理想郷』つてのはヒーローの人形を売る店だつたよな。憑依つてのはその人形相手にも通じんのか？』

「うん。そうだよ。なんで？」

「最近流通してゐる偽ヒーローのビデオつてのもお前らの店の商品かと思つてな」

「え？ 見たことあるの!? そ、うそ大正解！ アレ全部主演女優私なの！ すぐくな
い！」

「見てねえよ」

実は以前から茶毘は『理想郷』の事を調べていた。

『憑依』という要素一つで理想郷とビデオが結びついたのもそのためだ。

その目的はとあるヒーローの人形ドールを手に入れる事だつたのだが……そこに『憑依』を持つ庵がいて、人形を自在に動かすことができるとなると話は変わつてくる。

それは茶毘にとって、『敵連合』という組織に対する不安を補つて余りあるほどのメリットがあるよう思えた。

「ジェスター、後でお前のどこの店長と話がしたい。会わせろ」

「店長？　いいよ！　トウワイスさんにも会わせてあげる！　友達できたら喜ぶと思うよー。あんまり外で歩けなくて寂しそうだから！」

「トウワイス？」

「もう一人の店員で私の後輩のおじさん。いい人だよ？」

「は……？」

トウワイスの紹介を聞いた茶毘が思い切り顔を顰めるが、庵はそれに気が付かない。

そんな彼女にいい加減うんざりしながらも、茶毘は最後に一つ聞いておくべきことを聞くことにした。

「ヒーロー殺しについてお前はどう思つていたんだ？」

死柄木の態度からは、ヒーロー殺しについてあまり良くない感情を抱いているのが目に見えていた。

リーダーである死柄木がそうなら、当然庵もそうだろう。

なんなら『憑依』という個性から一つの可能性が茶毘の頭に浮かんではいたが、それは彼にとつてあまり重要ではない。

大事なのはこれから先、茶毘自身が何を為すかの話なのだから。

「私は嫌い」

「やつぱりな」

「うん。だつて私の事遊び半分の子供だつて言つたんだもん！ 酷いよね！」

何一つ間違つていらない評価だ。

心の底からそう思つた茶毘は、ぎやーぎやーと喚く庵を無視して深くため息を吐くのだつた。

過酷な期末テストを乗り越えた雄英高校ヒーロー科、1年A組の生徒たち。彼らはテスト明けの休日に集まり、みんなで県内最大規模のショッピングモールへと

やつてきていた。

そして夏休みに行われる林間合宿に備えて各自がバラバラに買い物へと向かう中、緑谷出久は一人モール内を歩きながらつい先日にオールマイトから告げられた事を思い返していた。

オールマイトに呼び出された緑谷が教えられたのは、ワン・フォー・オールにまつわる秘密と、オール・フォー・ワンという巨悪の存在について。

そして、もう一つの懸案事項だつた。

『……U.S.J.に現れた脳無の事、覚えているね』

『え、はい！ もちろんです！』

悩みに悩んだという表情のオールマイトは緑谷にそう言つて話を切り出した。

U.S.J.の脳無の事は、緑谷も良く覚えている。

何しろあの事件が敵連合との初めての邂逅だつたのだ。そう簡単に忘れられるものではない。

そう思つて何を言われるかと身構えた緑谷だが、そこで告げられたのは完全に予想外の言葉だつた。

『あの後、捕まえた脳無の事を検査してね。その肉体が私と全く同じものだつたことが

わかつたんだ』

『え?』

曰く、脳無の体は薬物や手術によつて変えられてはいたが、その肉体のDNAはオールマイトと完全に一致しただといふ。

何かの間違いかと再検査を行つても結果は同じで、その脳無の肉体が間違いなくオールマイトと同一のものであると認めざるを得なかつたようだ。

『クローンなのか、それともそういう個性なのか……どちらにせよ、奴がそんな力を手に入れたとなれば脅威だ』

オールマイトを探る為か、ワン・フォー・オールを調べるためか、それとも単なる挑発なのか。

こうして新たな力の証拠となるようなものを残したオール・フォー・ワンの狙いはわからない。

しかし間違いなく何か仕掛けてくる。

オールマイトはそう確信し、緑谷に注意を促したのだ。

思えば、ステインに血を舐められてしまつたせいでオールマイトを余計に心配させてしまつたのかもしれない。

これからはできるだけ心配をかけないように頑張ろう。
緑谷出久はそんな事を考えながら目的の店へと向かうのだった。

断章 悪意満ちる塔

A—O プロローグ

I・アイランドへと向かう飛行機の中で、作間は席に座りながら眼下に見え始めた島の様子を眺めていた。

その隣に座っているのは今回作間に仕事を依頼してきた氣月置歳。

『集瑛社』の専務という表の顔、『異能解放軍』の幹部という裏の顔という二つの顔を持つ、青い肌と薄紫のロングヘアが特徴的な女性である。

「まさかまたこの島に来ることになるとはね」

「あら、嫌だつた?」

「別に嫌つてわけじやない。こうも短期間で二回も来ることになるとは思つてもみなかつただけだ」

「そうなの? I・エキスボの内容に興味は?」

「ないね」

つまらなそうに言う作間の姿は、既に別のものに変わつている。

今回は氣月と共に潜入するため、『集瑛社』における彼女の部下の『坂上』という男の

姿を借りたのだ。

上司である気月と共にI・エキスピ内で取材をしていても、レセプション・パーティに同伴者として出席していても不自然ではない、最適な姿であると言えるだろう。「別にいいけど、島ではちゃんと私の取材を手伝つてね？」でなきや怪しまれちゃうもの

「わかってる。その代わり、そつちも俺が依頼をこなせるよう協力しろよ？」上手くやらなきやそつちも困るんだからな」

「わかってるわよ」

今回、作間は気月の依頼とは別にAFOからも依頼を受けている。

その依頼の内容やAFOの存在については気月に教えていないが、テロリストによる襲撃がある事とその襲撃に乗じて作間が動くという事は共有済みだ。

それを聞いた気月は襲撃事件についてかなり興味深そうにしていたが、流石に首を突っ込むには危険が大きいと感じたのだろう。

作間の同行者である気月が怪しまれないようにするための準備も含めて、お互に協力する事で同意していた。

そうして二人が到着後の予定について改めて確認し合つていると、機内に到着を知らせるアナウンスが流れた。

『——当機はまもなくI・アイランドへの着陸態勢に入ります』

「8時15分、予定通りね」

「そろそろ到着か。もうちょっと寝てたかったんだが」

スツキリした顔で腕時計を確認する気月と違い、作間は若干眠そうにしていた。

早朝からプライベートジエットで出発した上、気月に話しかけられるせいで口々に眠れなかつたのだ。

ちなみに何故そんな朝早くに出発したのかというと。

「夜に襲撃があるなら明日以降の一般公開が遅れる可能性もあるでしょう？　なら今日中になるべく取材を済ませないと」

と言ふ氣月がプライベートジエットを用意したためだ。

協力をすると言つた手前作間もあまり強くは言えず、結局朝早くの出発となつたのである

それから無事にI・アイランドの入国審査をくぐりぬけた作間たちは、まず荷物を持つてホテルへと向かい、それからすぐにパビリオンへと向けて歩き出していた。

「さあ、島は広いから急いで行きましょう」

「別に楽しむつもりはありませんでしたが、本当に忙しくなりそうですね……」

実際に彼女の言う通り、島の総面積は8000ヘクタールもあり、エキスピは島全体が会場なのだ。

移動用の設備も充実しているとはいえ、かなり急がなければ今日中に目的のパビリオンを全て回り切る事は難しいだろう。

もちろん明日からの一般公開以降も取材を続けられれば問題はないのだが、それは言つても仕方のない事である。

「事前に情報は仕入れておいたから今日中に見ておく場所は決まってるわ。ちゃんとお願いね」

「まあ……できるだけの事はやりますよ」

氣月に協力してもらう条件の一つが彼女の仕事を手伝う事だつたのだ。
で、ある以上は商売人として手を抜く事はしない。

元気潑剌とした氣月の後ろを、作間は面倒くさがりながらも遅れずついていくのだった。

「少し休憩にしましようか。お昼でも食べましょ」

「助かった……」

「氣月がそう言いだしたのは時刻が正午を回つて少しした頃だった。

既に作間はぐつたりとしている。

いつの間にかアポを取っていたらしい氣月と共に島に在住の科学者のインタビューを行うことになつたのだが、その研究内容はさっぱり理解不能で、それでもある程度の受け答えができるないと不自然だろうと脳をフル回転させ続けていたのだ。

それでも危ないところは幾つもあつたのだが、氣月によるフォローがあつたおかげでなんとか乗り切つていた。

「午後はあまりインタビューはないんですね?」

「ええ。さつきのシールド博士で最後。一番の大物を午前のうちに終わらせられてよかつたわ」

午前の最後にインタビューを行つたのはデヴィット・シールド博士。

個性研究の第一人者であり、今までに数多くのサポートアイテムを開発してきた事でも知られている、I・アイランドでも特に有名な科学者の一人だ。

そして夜、テロリストの襲撃時に標的になるだろう人物でもある。

作間はAFOからの情報提供から、以前にシールド親子の人形を作つた時の依頼人が

今回のテロの犯人である事を知つていた。

そのため、テロリストたちが誰を標的にしているかすぐにわかつたのだ。

「シールド博士の説明が一番わかりやすかつたんだけど、まあしようがないか」

「何がしようがないの？」

「いやいやこつちの話。それより飯にしましよう。本当にもう腹が減っちゃって」「ふーん……まあいいわ。私もお腹が減ったしね」

怪訝な顔をする氣月をなんとか誤魔化し、作間達は事前に見つけておいたレストランへと向かう。

周りを海に囲まれたI・アイランドでは新鮮な海の幸を楽しめるらしく、氣月が見つけたのも魚介系のメニューが充実したレストランだ。

そこで適当にパスタを注文した作間はなんとなく窓の外を眺め、ピタリとその動きを止めた。

「どうしたの？」

「…………」

「何？ 指さして……あら」

無言で作間が指をさす方向を見る氣月。

そこで彼女が目にしたのは、固まつて歩く数人の少年少女たちだった。

作間も氣月も、彼らの姿には見覚えがある。

「雄英の1年A組の子たちね。それに……メリッサ・シールドだつたわね」確認するようにそう呟く氣月の声を聞いて、作間も諦めたように頷く。

緑谷出久、飯田天哉、麗日お茶子、八百万百、耳郎響香。

作間も氣月も雄英体育祭で目にしているため間違いない。

そこにいたのは、まさしく雄英高校ヒーロー科の1年A組に所属する数名の生徒たちだつた。

「なんでこんな所にいるのかしら？」

「わからない。それより問題は、メリッサ・シールドが一緒にいる事だ」
行動を共にしている金髪の少女、メリッサ・シールドはデヴィット・シールド博士の娘だ。

今回のテロリストによる襲撃に無関係でいられるとは思えない。

そんなメリッサとヒーローの卵たる雄英の生徒たちが仲良くしているとなると、一体何が起こるのか……

「なんだかおもしろい事になりそうね」

「いや全然面白くない。ぜんつぜん面白くない。マジかよ……」

何が起きるかさっぱりわからなくなつた状況にウキウキしだす氣月を前に、作間は深くため息を吐いた。

その後、嫌な予感をビンビンに感じながらも作間は氣月と共にI・エキスポ中のパビ

リオンを巡った。

そして日が暮れ始める17時頃、なんとか気月の予定していた取材を全て終える事ができた二人は、パーティ出席の準備をするためにホテルへと戻っていた。

「もう二度とジャーナリストに変装なんてしたくない……」

愚痴を言いながらも素早くスース姿に着替えた作間は、部屋に備え付けの椅子に深く腰掛けて目を閉じた。

今までの気月の手伝いは前座で、むしろこれからが作間の仕事の本番だ。

それに備えて、少しでも休息を取ろうというわけである。

「少しは休めたかしら？」

そんな作間に気月が声を掛けてきたのは18時頃。

目を開いた作間の前には、高級そうなベッドに腰かけて優雅に足を組む気月の姿があつた。

彼女も既に着替えを済ませたようで、赤を基調としたドレス姿からは熟れた女の色気が溢れ出ている。

しかしそれには全く反応せず、あくびを堪えながら立ち上がった作間は大きく伸びをしていた。

「十分休めた。計画通り頼むぞ」

「ええ。ちゃんと計画通り動くわ。私はね」

「……私は？」

「さつき見かけた不確定要素も含め、色々と想定外が起こりそうだもの。あなたがそれにどう対処するのか、楽しみにさせてもらうわ」

嬉しそうにそんな事を言う気月に苦虫を噛み潰したような顔で応えた作間は、彼女の後についてパーティ会場へと向かうのだった

A—1 作間の計画

今回、作間が取るプランは単純なものだつた。

まず初めに、招待客の一人として会場へと潜入。

そこで気月たちからの依頼である『招待客たちのドール人形作り』に必要な記憶を完了させた。

ただ、そこにおいてはならない人物がいるのを見た作間は眩暈を起こしそうになつた。

「オールマイトがいるじゃねえか」

「あら、本当ね。あとで取材してみようからしら」

「動かれたらまずいが……テロリスト連中の働きに期待しよう」

流石に今から何か手を打つこともできないので、作間はテロリストに対応をぶん投げた。

周りには大勢の人がいるのだから、人質を取つて動けなくさせるくらいできるだろうと思うことにしたのだ。

そして時間も迫つてるので、次の行動に移ることにした。
「あー、いたたたた。お腹が……トイレに行つてきます」

「早く戻つてきなさいよ」

そんな露骨な会話を周りに聞こえるように気月とかわし、作間は会場を離れてトイレへ向かう。

このフロアの非常階段のすぐ脇にあるトイレだ。

トイレに入った作間は中に誰もいないことを確認すると、その場で個性を発動させた。

作り出したのは、現在作間が姿を借りている『坂上』という人物の肉体だ。

「あとは服脱いでこいつに着せないとだな……めんどくさ」

ぶつぶつと文句を言いながら、服を脱いで坂上へと着せていく。

そしてそれが終わつた途端、作間は作り出した『骨の槍』を服の上から何度も突き刺していった。

「これでよしと」

実はこの坂上という人物、何日か前にもう殺されている。

気月は自身の部下であるこの人物を『異能解放軍』の仲間の手によつて殺させ、作間がこの島で坂上として動くことができるようになつたのだ。

そして今このI・アイランドで坂上の死体が生まれたことで、作間の存在は完全にフリーアイランダになつた。

「うわっ！ ちょっとなんで裸なの!?」

ちようどそこへ氣月が現れた。

平凡と男子トイレへと入つてきた彼女だが、これも計画の通りだ。

『帰りの遅い同僚を心配して見に行つた氣月が死体を発見する』という流れである。

「服はこいつに着せなきやならないんだからしようがないだろ」

「なんでもいいからさつさと隠しなさいよ」

「うるさいな全く……わかってるよ」

作間だつて別に裸でいるのを女に見られる趣味なんてない。

個性を発動させた作間は、全身に人の皮膚と大量の骨を組み合わせたようなグロテスクなコスチュームを作り出した。

事前に庵とトウワイスの二人と一緒に映画を見ながら考えておいたものである。

「これで俺は正体不明のヴィラン、ボーンズつてわけだ」

「骨を纏つてるからその名前なの？ ちょっとネーミングセンスがないんじやない？」

「余計なお世話だ」

作間の計画は、架空のヴィランを作り出してそれになりきる事だつた。

『脱出手段と脱出時間は既に決まつている』ため、上手くテロリストやヒーローたちを混乱させるにはどうすればいいのか考えた結果がこれだつた。

「それで、私はこのトイレにしばらくいればいいわけ？」

「ああ。会場にテロリストが来た後でそつちに戻つてもらう。女優並みの演技を期待しどくよ」

「あなたがこれからやる事が面白そうだけど……まあつていけそうもないし、仕事だものね。わかつたわよ」

渋々納得した氣月を置いて、作間はトイレの外に出て非常階段へと向かつた。この非常階段へ続く扉は普段は開かないはずなのだが、作間が手をかけるとあっさりと開いた。

どうやらすでにテロリストたちの作戦は開始しているらしい。

「やつぱりな。あとは200階まで上のだけか」

そもそもその話。

多くのヒーローが集まっている時にタワーの襲撃を行うのなら、まずタワーのセキュリティシステムを掌握する必要がある。

そうすれば警備システムを用いて島中の人間を人質に取ることができるからだ。つまりテロリストが間違いなく狙うポイントとしては、セントラルタワーの最上階に200ある『管制室』が挙げられるのだ。

もしそこに奇襲を仕掛け、テロリストの一部を皆殺しにできたらどうなるだろう。

もしそこで作間の個性を用い、『部下の声』で『リーダー』を呼び出したらどうなるだろう。

「依頼内容その1、テロリストのリーダーの確保もしくは殺害。案外簡単にできそうだな」

AFOから頼まれた依頼は複数あるが、そのうちの1つがそれだつた。

即ち、有用な個性を持ち、AFOと接触した情報を持つ人間を捕らえる事だ。
更に言うなら、それはヒーロー側からすれば主犯を取り逃がすという大失態でもある。

嫌がらせというのも頷ける依頼だつた。

一度も休まず200階までたどり着いた作間は、そこでやつと足を止めていた。

ぜえはあと荒い息を吐く彼の下方からは、何かが閉まるような音が聞こえてきている。

どうやらテロリストグループが非常階段に設置されている隔壁を閉じたらしい。

「ハア……隔壁閉まつたか。マジで、ギリだつたな。ハア、ふう……」

しかし既に作間がいるのは200階。

既に彼を止めるには手遅れである。

「よし……いくかあ！」

息を整えた作間は、非常階段からフロアへと続く扉に手をかける。そして勢いよくその扉を開け放つた。

何者かが200階に侵入してきた事はすぐにテロリストたちに伝わった。非常階段からフロアへの扉を開けたことが、セキュリティシステムに感知されたのだ。

「なんだ？ なんでいきなり200階に？」

「警備員が残つてたのか？ つて、これは……いつたい……？」

「どうした……は？」

管制室で防犯カメラの映像を目にしたテロリストたちは、自分たちの目を疑つた。

恐るべき速さで移動する不気味な人型の物体が、何かを発射してカメラを破壊しながら管制室へと近づいているのだ。

すぐさまリーダーであるヴォルフラムへと連絡をした彼らだが、事態はその間にも深刻さを増していく。

「ヤバいボス！ 何か変な奴が管制室に向かってくる！」

『どういう意味だ？ しつかり報告しろ。対処可能かどうか言え』

「無理だ！ こいつとんでもない速度で……」

『わかった。応援を送る。少し持たせろ』

応援が来るという言葉を聞いて安堵するのも束の間、一瞬後に管制室へ飛び込んできたものを見たテロリストたちは顔をひきつらせた。

そこにいたものが全身から白い骨を生やした赤黒い皮膚の化け物だったからだ。

「なんだお前!?」

「撃て！ 集中攻撃しろ！」

その時管制室にいたテロリストはセキュリティシステムをハックしていた人員を含めて三名。

彼らは飛び込んできた化け物を一斉に銃で撃ち始めた。

しかし銃弾のすべてはそれが全身に纏つた骨に弾かれてしまう。

「随分と面倒な計画立てさせやがって」

「喋った!?」

「そりや喋るさ。一応人の姿はしてるだろ？」

突然喋りだした相手に呆然とするテロリストたちは、銃を構えながら様子を伺うこととした。

銃弾が通用しない相手をどうにもできない以上、彼らにできるのは応援が一刻も早く到着してくれるのを待つことだけだ。

それでも相手がどういう存在なのかだけでも知ろうと、テロリストの一人が口を開く。

「お前は何者だ。なんでここに来た！」

「俺は……ボーンズだ。ここにきたのは仕事だよ」

「仕事？」

ボーンズと名乗った相手の言葉に、テロリストたちは首を傾げた。

何か嫌な予感がして仕方なかつたが、そんな動搖を隠して銃を向け続ける。

しかし次の瞬間、彼らはこの場にいることを後悔することになった。

「随分と面倒な計画を立てなきやならなかつた憂さ晴らしだ。派手にやつてやるよ」

そう言つたボーンズが両の手首から骨でできた槍を取り出したからだ。

二本の槍を手に取つたボーンズは、浴びせられる銃弾をものともせずに、テロリストたちへと近づいてくる。

応援が来る前に自分たちはこいつに殺される。

その事を悟つたテロリストたちは、悲鳴を上げながら銃を乱射し始めるのだった。

A—2 タワーの頂きにて

部下から侵入者を始末したという連絡を受けたテロリストのリーダー、ヴォルフラムは直通エレベーターを使つて最上階へと向かつていた。

計画なら移送は部下に任せて彼自身はパーティ会場にいるはずだつたのだが、侵入者の正体についての調査も兼ねて一度リーダーであるヴォルフラムが最上階の管制室へと行く事にしたのである。

「博士たちの仕事に影響はないんだな?」

『……ああ。今も保管室で頑張つて作業中だ。こっちの《たごた》にも気付いてないみたいだぜ』

「ならない。そのまま続けさせろ」

ヴォルフラムはエレベーターの中で無線越しに部下から報告を聞いていた。

博士たちというのは、襲撃者が出現する少し前に最上階へと連れて行かせたディヴィット・シールド博士とその助手のサムという研究者の事だ。

何故その二人の仕事ぶりをヴォルフラムが気にするのかと言えば、答えは簡単だ。そもそもこの襲撃は博士たちが計画したものだからである。

博士たちは最上階に保管された「ある物」を取り戻すため、偽物のヴィランを雇つてこのタワーを占拠させる計画を思いついたのだ。

ヴォルフラムたちは二人に雇われ、だからこそ難なくタワーにも侵入できたというわけである。

尤もヴォルフラムは偽物ではなく本物のヴィランであり、最後まで博士たちとの約束を守る気もない。

そのためにヴォルフラムは、事前に『二体の人形』を手に入れていた。

「あとは襲撃者の正体か……なんだ？」

エレベーターが開いた瞬間、ヴォルフラムは違和感に気付いた。

自分を出迎えるはずの部下がないのだ。

おまけに。

「おい。なんで誰もいない？」

『……』

「どうした。返事をしろ！」

つい先ほどまで話していた無線の先にいる部下との連絡も、突如として途絶えてしまつた。

声を荒げつつ話しかけても一切の無音だ。

いよいよ怪しくなりつつある状況に警戒を強めながら、ヴォルフラムは管制室への道を進んでいく。

そして管制室に辿り着いたヴォルフラムは、無残な死体となつた部下たちの姿を見ることになった。

彼らは全員が達磨となつて壁に磔にされていた。

床には血に染まつた何十本もの白い槍と、引き千切られた手足が散らばつている。

「まずい……っ！」

咄嗟に無線を使つて部下と連絡をしようとしたヴォルフラムだが、その瞬間に上から男が降つてくる。

手に持つてゐるのは骨の槍だ。

それが既にヴォルフラムの顔面目掛けて迫つてきている。

「ぐつ……舐めるな！」

しかしヴォルフラムはそれにかろうじて反応すると、攻撃が顔を掠める中でその場にしゃがみ込んで地面に触れて個性を発動させた。

ヴォルフラムの個性は、触れた金属を操る個性だ。

一瞬にして床の金属が盛り上がり、目の前の男を弾き飛ばす。

「遅いよ」

しかし男は金属が体にぶち当たつたにも拘わらず堪えていないようで、その勢いを利
用して一瞬にして距離を取つた。
そんな男へと、ヴァルフライムはいつでも個性を発動できるよう身構えながら問いかけ
る。

「お前が襲撃者か？」

「ああ。今はボーンズって名乗つてる」

「今はだと？」

「ああ。それより連絡を取れなくて残念だつたな」

最初の槍での不意打ちを受けた際、ヴァルフライムがつけていた仮面は半壊してしまつ
ていた。

それ自体は大したことではないが、問題なのは仮面に無線が内蔵されていていた事だ。

無線が破壊されてしまった以上、もう部下と連絡を取ることもできない。
「問題ない。お前を殺してから部下の無線を使うさ」

そう言つてヴァルフライムは個性を発動しようとする。

今度は床だけではなく、壁や天井の金属まで操つて完全に押しつぶしてやるつもり
だつた。

そこまでイメージして個性を発動しようとして、しかしそれは叶わなかつた。

「やつぱり殺す時はできるだけ楽して殺すに限るね」

謎のヴィラン『ボーンズ』に扮した作間はそう言つてヴォルフラムを見上げていた。捕獲か殺害か、楽な方を選ぼうと思っていた作間は躊躇なく殺害を選んだのだ。

ヴォルフラムは個性を発動する瞬間、背後から体中を貫かれて死んでいた。作間の個性による初見殺しにハマつたのだ。

作間は人体を作り出した後、一度手を離した後であつても、もう一度触れればその人体を作り直すことができる。

例えば今回の場合、一度出しておいた骨の槍にもう一度触り、それをこつそり伸ばしたり。

その伸ばした骨を床に散らばつていた骨に触れさせ、一度にまとめて操作したり。最初から殺す気満々で用意しておいたトラップに、ヴォルフラムはまんまと引っかかつたわけである。

「さて、あとはもう一つの依頼をこなさないとな」

AFOから頼まれたテロリストのリーダーを殺すという依頼はこれで完了だ。

しかし作間はまだ依頼が残っている。

「まだ時間に余裕はあるし、大丈夫だな」

一応時計に目をやれば、事前に決めた脱出時間まではまだまだ余裕がある。

それまでに十分依頼をこなすことができるだろうと判断した作間は、管制室内にある

モニタールームへと向った。

ヴォルフラムが一階から消えた事で、何か変化はないかを確認するためだ。

200階の保管室で作業をしている博士たちの様子も見ておかなければならない。

「……特に何も起きてないな」

しかし、拍子抜けするほど何も起きていなかつた。

オールマイトは1階でセキュリティシステムに捕らえられたままでいるし、博士たちも保管室での作業を一切止めていない。

入り組んだ廊下と保管室の分厚い壁のせいで、戦闘の音は博士たちには聞こえなかつたようだ。

「これなら適当に指示を出しておくだけでなんとかなるか……ん？」

作間が自分の声帯をヴォルフラムのものに作り替えようとしていると、そこでモニターに映る変なものの見かけた。

自分と同じく、そこにいるはずのない子供たちの姿だ。

「何やつてんだこいつら……」

モニターに映っていたのは、昼間にアイランド内で見かけた雄英高校の生徒たちと、メリッサ・シールドだった。

どうやら彼らはテロリストたちに拘束されずに済んだらしく、メリッサに案内されてタワー内の通路を走り続けている。

作間がモニターの情報を確認してみれば、現在は100階の通路を進んでいるとのこと。

制御室が作間によつて制圧されたせいで、ほとんど妨害も受けずに順調に進んでこれたらしい。

「カモがネギしよつてきたな」

オールマイトに引き続き再びのトラブル発生だが、作間はこれをチャンスだと考えていた。

何故ならメンバーの中にメリッサ・シールドがいる。

本来ならこの場にいなはずの彼女は、事件の中心人物であるシールド博士と違つて手を出すことのできない存在だ。

それが、雄英高校とはいえまだ1年生の子供に守られて自分から近づいてくれている。

うまくすれば、本来予定していた以上の成果を得ることができるだろう。

「そうと決まれば妨害といくか……」

そう呟いた作間は喉をヴォルフラムのものに作り替えると、テロリストたちに指示を出し始めるのだった。

A—3 塔を登る少年少女

作間が200階に到着するほんの少し前。

レセプションパーティの会場は突如として現れたテロリストたちによつて占拠され、パーティに出席していた人々は全員が拘束されていた。

それはオールマイトを含むヒーローたちも同様だ。

本来なら簡単に撃退できるテロリストが相手でも、セキュリティシステムを乗つ取られて島中の人間を人質に取られては動くことはできない。

そんな中、運よくテロリストたちに捕まらずに済んだグループがあつた。

この島を訪れていた緑谷出久たち雄英高校1年A組の生徒たちと、彼らと行動を共にしていたメリッサ・シールドである。

彼らはたまたまパーティ会場に行くのが遅れてしまつたために、タワー内にいるにも関わらずテロリストたちに気付かれずに済んだのだ。

そして彼らは、迷つた末に行動を起こすことを決めた。

「ヴィランと戦わずに、オールマイトを、みんなを助ける方法があれば……」
ヒーローの卵に過ぎない自分たちにできることは限られているけれど、それでも助けたい。

そんな緑谷の言葉を聞いて、メリッサが解決策を提示したのだ。

「ヴィランの監視から逃れて最上階にさえ行けば、セキュリティシステムを再変更してみんなを助けられるかもしれない」

乗つ取られたセキュリティシステムの制御室はこのタワーの最上階にある。

そしてメリッサがそのシステムを再び元通りに戻せば、ヒーローたちを解放してテロリストたちを何とかできるかもしれない。

その可能性を示されたことで、緑谷たちは連れて200階へと目指すことを決めたのだ。

彼らは非常階段を用いて200階を目指すことにした。

監視カメラの少ないそこなれば、まだセキュリティシステムの扱いに慣れていないテロリストたちに気付かれずに済むと思ったからだ。

しかし、順調に80階まで進んだところで問題が発生する。

「シャッターが下りてる……」

「どうする？ 破壊して先に進むか？」

「いえ、そんな事したらシステムが反応してヴィランたちに気付かれてしまうわ」

非常階段の途中でシャツターが下り、先に進めなくなつていたのだ。

轟はそれを破壊しても先にと言うが、そんな事をしてヴィランに気付かれれば戦闘になつてしまふ。

なんとか別の方法を考えようとしたところで、80階まで走つて疲れていた峰田が非常階段から外へ繋がる扉を開いてしまつた。

「じゃあこっちから進めばいいんじやねえの……」

「峰田君！」

「ダメッ！」

制止の声も届かずに扉は開いてしまい、結局他の方法も思いつかなかつた一行はそちらの通路を走つて進み始める。

しかし、メリッサの懸念に反して通路では何も起きなかつた。隔壁も降りてこないし、他のシステムが反応した様子もない。それどころか。

「ああ!? タワーがヴィランに占拠されただとオ!?

「マジかよそれ」

「二人とも、放送を聞いていなかつたのか？」

何故か80階にいた爆豪と切島と合流し、二人とも一緒に200階を目指すことになつた。

友人と合流して喜ぶA組の生徒たちだが、メリッサは訝しげな表情を崩してはいなかつた。

「絶対に変よ」

「え？」

「こつちのフロアに入つてきた時点で気付かれなきやおかしいの。それに爆豪くんたちが歩いてたなら、もつと早くにシステムが反応してもよかつたはずなのに」

「確かに……かなり不自然ですわね」

A組生徒たちの活躍によつて順調にタワーを上つているのに、未だに何の妨害もされないのは明らかに異常だつた。

時として壁を破壊したり、ドアをこじ開けたりしているのに、である。

メリッサの言葉を受けた八百万もそれに同調して通路の監視カメラに視線を向けるが、それが機能を停止しているというようにも見られない。

それはつまり、システム上は見ることができてはいるはずなのに、何故か何もってきていない、という事になる。

「おいおい、罠つて可能性もあるつてことか？ ヤベエじやん！」

「そうだとしてここまで来たらもう上行くしかないでしょ……ちょっと待つて！」

そして彼らが100階を通り過ぎた頃。

その時、罠の可能性を口にする上鳴に反論の声を上げていた耳郎が、何かに気付いた
ように耳のジャックを通路の床へとつけた。

「どうした？」

「なんか妙な音が……何かくる！」

「うわっ！ シヤツターが下りてくる！」

そう言つた耳郎が通路の少し先の曲がり角を指さすと、そこから大量の警備マシンが現れた。

更には今まで通つてきた通路の隔壁も下りてきて、引き返すことができなくなつてしまふ。

「ここにきて妨害!!」

「デクくん！ あっちのエレベーター！」

ダメ押しとばかりにエレベーターが動いている事に麗日が気付き、何者かがやつてこ
ようとしていることがわかつてしまう。

このまま手をこまねていれば、最上階に行く前に捕まってしまうかも知れない。

そう思つた緑谷は瞬時に考えを巡らせ、メリッサに問いかけた。

「メリッサさん！ この先どんな通路があるか教えて！」

緑谷の考え方付いた手段は、メンバーを分ける事だつた。

時間をかけねばかけるほどに状況が悪化していく現状、それしかなかつたのだが……結果としては上手くいったと言えるだろう。

「耳郎さん、次は！」

「右からくる！」

「メリッサさん、ルートは大丈夫ですか？！」

「ええ！ 左からのルートで、上手く避けていきましょう！」

先に進むことになつたのは、機動力の高い飯田と緑谷、聴覚による探知が可能な耳郎と、この先で行うショートカットでどうしても必要な麗日。

そして、セキュリティシステムを再設定するためには絶対必要なメリッサだ。

彼らは耳郎が警備ロボットの場所を探知して、メリッサが上手くルートを選定すると

いう方法をとることで、ほとんど戦闘することなく先に進むことができたのだ。

「残してきたみんなが心配だが……」

「みんなを信じよう！ きっと大丈夫だよ！」

「そうだな！」

二手に分かれた時、その場に残してきたのは戦闘に長けた爆豪と轟と切島、警備口ボットに有効そうな個性を持つ峰田と八百万、上鳴といった面々。

不安は大きいが、きっと大丈夫だとみんなを信じながら彼らは先へと進んでいく。

そしてついに、彼らは150階へとたどり着いた。

そこはタワー外部に出れば巨大な風力発電システムがある場所で、空を飛ぶことさえできれば一気にショートカットして200階付近まで辿り着くことができるのだ。

高所での強風対策として八百万からフック付きのロープも受け取っているため、麗日の個性である『無重力』^{ゼログラビティ}でメリッサと一緒に飛んでいけば、残る50階は警備システムの稼働したタワー内部を通らなくて済む。

それがあの場で建てた彼らの作戦だった。

とはいって、麗日の個性で飛ばせる人数には限りがある。

更には麗日本人が浮こうとすれば気分が悪くなつて長時間の個性の維持が困難になるため、ここでもまた彼らは二手に分かれることになった。

「ロープを伝つていくながら緑谷くんの方が向いているだろう。俺はここで麗日くんたちと」

「うん。頼んだよ飯田君！」

そんな挨拶を交わして、緑谷はメリッサと共に麗日の個性を受けて宙へと浮いていく。

警戒していた強風が吹いても、先に超パワーで投げておいたフック付きロープを掴むことで耐えしのぐことができた。

そしてそれから10分もしないうちに、緑谷とメリッサは非常扉から再びタワーの中へと入るのだつた。

「急いでセキュリティシステムを止めないと」

「うん。足止めしてくれたみんなも、オールマイトも早く助けないと」

メリッサに案内されながら、一人は足早に制御室へと向かう。

この階層に警備ロボットがいる様子はない。

異様な静けさの中、二人の足音だけが周囲に響いていた。

「入つたらきつとヴィランがいる。僕が何とかするから、その隙にメリッサさんはセキュリティシステムを」

「ええ。私がすぐにシステムを再設定する。そうすればマイトおじさまがなんとかしてくれるはずよ」

入つてからの流れを再確認した緑谷とメリッサ。

きつと上手くいく。

ここまでみんなの分もしつかりやろう。

そう思いながら、彼らはタワーの制御室へと足を踏み入れた。